

スキルアウトと地球の 記憶

マルチスキルドーパント

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは割りと平和な学園都市の時間軸。

ビリビリとツンツンがそれぞれそんなに大事に行かなかった場合のあり得ない時間。

学園都市は滅ばないし大戦争も起きてない、然し学園都市の内部で起きた小さな異変。

暗部とか全く関係無い一人の少年が起こしてしまった……というか、持ち込んでしまった生まれながらの能力。

理論的に存在しないと言われていた幻の能力者を、量産するかもしれない危険なモノだった。

スキルアウトとつるんで無能力者の烙印を受けながら、自分も時には変身して、取り敢えず安全だけを確保する一般人。

後に、『レベル0のマルチスキル』という物騒な通り名で狙われる彼と、ビリビリとツンツンが学園都市で交差する。

その名前は、ガイアメモリ。星の記憶と名付けられた、化け物を増やす能力者。

学園都市に新たな武器が、生まれていく……。

目次

プロローグ | 1

目覚めるドーパント | 15

広がった波紋 | 28

無能力者の現実 | 42

砕け散る日常 | 55

ドーパントの力 | 72

加入、スキルアウト | 86

風紀委員とスキルアウトに囲まれて

102

姉妹たちの押し掛け | 116

女子たちの流れ | 130

すれ違い | 144

副作用 | 161

暴走 | 174

多才能力の真髄 | 191

ドーパント誕生 | 206

裏側の出来事 | 217

幻想殺しは殺虫剤ではない | 229

動き出す裏側 | 244

偽者との戦い | 260

これからの方針 | 276

藍花悦の詫び方 | 289

プロローグ

学園都市って、知っている？

そんな質問を母からされた。

学園都市……？ ああ、と思いつく。

家族が入学していると言うあの大きな都心部と言うか、都市部の……。

夕飯の席で、向かい合いながら義理の母は笑っていた。

今度、年明けにでも向こうに引っ越しをしないか。そう突然言われた。

引っ越しをされると言われても。あんなセキュリティの厳しい都市部にどうすると言うのか。

で、案の定その辺の問題はクリアしているとか。

聞けば、義理の姉と妹が、なんでもとても誇らしい立場になったと最近連絡が入った。大能力者、と言われる。レベル4？ なんのことだかわからない。

専門用語と言われる、理解できない頭じゃ頷くしかできなかった。

高校進学と同時に姉妹は学園都市に入学していた。

凄いお金がかかったらしい。けど、代わりに自分は地元の学校に進学した。

頭もよくないし、なんの取り柄もない自分にはこの生活が気に入ったのだが残念。

いわく、後から内部に引越すのも一応可能らしい。

なんか随分と面倒な手続きがあるようだが。

しかもまたお金がかかる。大丈夫だろうか本当に。

まあ、地元でも有数の金持ちとかよく嫌味を言われるが、こう見てみると確かに身内の金銭感覚はおかしい。

お金は問題ない。現在単身赴任の父も学園都市に既に住んでいると初めて聞いた。

何年も戻ってこないと思っただらもうそちに暮らしていたのか。

母はそう言うことを聞かないと教えてくれないので困る。

トントン拍子で此方の意見も聞かないし、決定事項なら確認しないでいい。

どうせ友達など居やしない。と言うか、未練もない。

元々人付き合いは苦手で、普通に生きていければ満足の毎日。

変化するならそれでもいい。構わないと言って、その日は終えた。

……で。

——半月後にはもう自分が学園都市内部にいるのにビックリだった。

何が起きた。手続き早くないか。待つて、認識が追い付かない。

朝起きたら何故か自室に母がいて、引越しの準備は全部業者に発注したとか言うし。

軽い荷物を抱えて黙つてついてきて数時間したら学園都市？

立ち並ぶ高層ビル。そこから回っている風車に、見たことのない機械や都会的な風景。

ゲートを超えた先に広がっていたのは近未来の非常識。あのドラム缶はなに？ お掃除？

そこに行き交う様々な制服の学生たち。実家をあけて、小さなアパートに引越す母と自分。

その内自分は学生寮に放り込まれるらしい。

明日には外部から入学してきた生徒に行くテストがあるのかなんとか。

それを受けたのち、編入する学校が決まる。能力開発とかいう変なことするんだそうだが。

いや、受けるけど。受けるけどなあの光景。

徒歩で移動していたら内部に入って早々大乱闘が起きていた。

手品ですか？ 自動車放り投げている男子生徒が何やら叫んでいるんだけど。

ドツキリですか？ 投げられ墜落し、爆発する自動車から逃げた拳銃持った誰かがこつち走ってくるんだけど。

母が呆然としていた。此方も呆然としていた。歩道で立ち尽くす。なにこれ？ この治安の悪さ。本当に国内？

チンピラみたいな人が、立ち尽くす自分に走って近づき、不味いと思つて思わず咄嗟に母を突き飛ばす。

でも、遅かった。自分が代わりにそのチンピラに首に腕を回されて捕縛。背後に回り込まれて、持っていた拳銃をこめかみに突きつけられた。

「動くな!! 動くところいつの頭をぶち抜くぞ!」

「……………」

ああ、そう言うこと。人質か。こんな白昼堂々。

周囲を観察。武装した大人、此方は体躯の良い成人男性。そこに捕まる自分。

向かうあい、突きつける銃口はアサルトライフルと見る。何したのだこの人は。こういう場合、暴れると身内にまで被害が出るから大人しくしよう。

抵抗すれば此方を尻餅ついて見上げている母まで巻き添えになる。

チンピラは周囲を威嚇する。近付くな、車を用意しろ。

銃口をそつちに向けていた。思わず怯む恐らくは警備の人らしき人物たちが宥めて

いる。

無抵抗にして、チンピラに小声で言った。

母は逃がしてもいいか、と。

「ああ!?! お前なにいつてんだ!?!」

もう一度こめかみに突きつけられた。だから、繰り返す。

別に自分はこのまま人質で良いから家族は邪魔だから追い払ってと。

「……はっ? お前マジで何言ってるんだ?」

啞然とするチンピラ。そんなに変なこと言ったか?

母はどう見ても逃亡の邪魔になる。車を用意しろと言うなら逃げるんだろう?

あんたは一人。人質は二人いたら逃亡の足手纏いになる。

足手纏いはイコール射殺、という結果を避けたいだけだ。

此方は家族が無事ならまあ仕方ないと思うから諦める。

どうせ勝てないし早死にもしたくない。

利害の一致。母だけ遠ざけてくれないかと。

ここまで来れば抗えない流れなので大人しく人質でもなんでもするから。

だから遠ざけると言うのだ。

「……お、おう、分かった。おいそこのお前! 早く向こう行け!!」

呆れていたのか何なのか知らないが、チンピラは母に銃口を向けて失せろと怒鳴った。

母は息子を離せと言うが自分が言った。

死にたくないなら早く逃げろと。最悪外部で何とかしてもらえればいい。ここであの警備の人間と銃撃戦されたら此方にまで位置的に飛んでくる。

痛いのは勘弁で死ぬのも勘弁。故に言うことを聞いて早く逃げろ。

ハッキリ言った。すると、母はそれでも諦めない。

まだ離せと叫ぶ。話聞いていないのか。

「お、おい……聞いてねえぞあの女！ どーするんだよー！」

小声でこつちに犯人が聞いてくる。確かにどうするこの場合。

此方は無抵抗と決めた。生殺与奪は犯人の都合。

ならばそつちに合わせて解放するまで付き合うしかない。

焦れてきて撃たれるのもごめん被る。

一つ提案。一度撤退。このまま自分を楯にして後方に迂回は可能かと問う。

逃走に協力するのが現状最も生存率が高い方法と断定。

自分としても、それで一向に構わない。

決めるのは犯人。任せると素早く説明して委ねる。

「……クソッ！ 仕方ねえ、逃げるぞおら！」

不利と理解して、そのままの体勢でジリジリ後退して、角の近くで小さく言つて命令。了解して、一瞬の隙で拘束をほどいて、先に走る。直ぐに近くの角を自分で曲がった。案の定いきなり警備の人は犯人に向かつて発砲。慌てて犯人も逃げ出す。

人質が居なければいきなり射殺か。アメリカのような場所だと思う。

背を向ければ迷わず攻撃。実におかしい学園都市。姉妹はこんなサバイバーな場所で生活している。

おかしい、外部向けのアナウンスと話が違う。何が最新のセキュリティだバカ野郎。

「おい、お前地理が分かるのか!？」

分かるか。こちらとら今来たばかりの引越してきたばかりだぞ。

どういう流れか一緒に逃亡。自分を殺そうとするような相手なのに。

って言うか人を楯にするなら案内しろよと悪態をつく。

「お前良い度胸してんな!？ まあいい、ついてこい!! 協力するなら無傷で解放してやるよ!!」

犯人もあまりにふてぶてしい自分に呆れているようだった。

そつちの都合で巻き込んでおいてよく言う。仕方無いので最後まで付き合おう。

何で犯人に付き合っているのか自分も分からない。混乱しているようだ。

先に走る犯人に続いて、取り敢えず追走する。

初日から、本当になんなのだ。男を追いかける外部の子供は、文句しか思い付かなかった。

放置された廃墟のビル。

その一画に犯人と彼はいた。

全力疾走は流石にキツイ。体力がないから見事に干上がった。

ぜーぜー言っている彼に、犯人は一息ついて、聞いた。

なぜ、協力した。普通なら抵抗してあの場で解決もできたはずだ。

確かにそうだ。だが、それはあくまで可能性。

こちらら外部から来たばかりの右も左も分かっていない外部者。

内部の常識が外に通じると思うなど逆に言う。

要するにあの過剰な武器持ってきた警備の人間と自動車投げつけるような人間の存

在を信じるか。

バカを言うな、巻き添えはゴメンだと言った。

確かに助かりたければ、身内を優先して離脱させるにはああするのが一番早い。

自分はここの認識など知り得ない。どこの世界に拳銃一つにアサルトライフル持ち出す民間人がいる。

狂っている。そう、思うと。

「……そうか、お前外部の人間か……。だからバランスが分かってねえのか。納得したわ。悪かったな、てつきり学園都市の無能力者と思っただが」

「？」

なぜ、謝る。犯人の癖に。知らないやつを巻き込んで悪かったと言われても。

大体、レベル0？　なんだそれは？

そもそもレベルって何？　聞いたことがない単語。

もしかしてちゅーに？

「阿呆！　学園都市の学生にとっては死活問題なんだぞレベルってのは！　何にも知らないんだなお前!!」

だから外部の人間だと言っているだろうが。

聞けば超能力とかいう科学的なモノを開発しているとか。

ちよつと待てそんなの知らない聞いてない。

母、知っていただろうにまたこういう重要な問題を言わない教えない。

いい加減にしろ真面目に。頭を抱える。あの自動車投げつける手品はその能力者とかいう学生の仕業。

で、学園都市の学生は大なり小なり超能力とやらを持ち、その強弱の呼び名がレベル？

概要を教えてくださいるのはいいが、じゃああんな超人がゴロゴロ居るのか学園都市。

「居ねえよ。俺なんか無能力者だぞ。因みに学園都市の半分ぐらいは俺と同じ弱いレベルの連中だ。レベル0は、基本的には外部の人間と大差無い、お前が言う普通の人間。無力な、蹂躪されるだけのオモチャさ……」

最高値が超能力者、レベル5。所謂化け物。

対して最低値が無能力者、レベル0。所謂雑魚。

上位になればなるだけ、こんな拳銃風情じゃ太刀打ちできないと嘆くように犯人は言った。

項垂れて、不平不満を溢すようにぼやく。

「お前に言うのと信じて貰えないとは思ってる。人質にしたのも気が動転していたといえ、バカじゃねえかよおい。何やってんだよ本当に……。俺だつてなあ、本当は大事に

する気じゃない。単に暴行受けた挙げ句にカツアゲされた金を取り返しに行っただけなんだ。銃だつてよ、護身の為に必死になつて手に入れただけなのに。一方的に俺が拳銃持つてりゃ悪者扱い。相手の暴行にもカツアゲにも一切触れない風紀委員に警備員……。学園都市は不平等なんだよ。相手はレベル3……ああ、お前に言つても分からねえか。強いのと弱いものの中間みたいなものだ。その時点でこんな拳銃じゃ敵わないような能力なんだぜ？ 笑えるだろ？ お前にも分かりやすく言えばな、相手は武術の達人で、此方は丸腰の素人。勝ち目がないのに武器を持てば弱者が悪だ。ふざけんな、向こうのほうがよっぽど強いだろうが畜生め！ 能力は武器じゃねえとも言いたいか！」

……なんかよく分からないが、相手はとても強いとは分かった。

拳銃で自動車投げつける相手に勝てれば苦労しない。そんな理屈は見ればわかる。

相手は合法で暴力を振るう。弱いやつに。けど、それは取り締まってはくれないと。

そう言うことか？

「……お前、物わかりがいいな。そうだよ。この学園都市じゃ、無能力者は上の連中には常に見下されて笑われる。カーストの最底辺。数だけが多くても結局正義は向こうにつき。知力も能力も財力も権力も力という力は全部向こうの味方。勝てるのは武器を使った暴力だけなんだ。俺達を遊び半分でお掃除とか言つて襲ってくる輩は一時期よ

りは減ったがまだまだ居る。お前も気を付けろよ。俺が巻き込んでおいて言うのも何だが、レベルの高い能力者は信じない方がいい。あいつらは内心ずっと無能力者を笑っている。忘れるなよ、あいつらは単なる悪魔だ」

「……………」

まだ、全部を自分で見てはいない。

けれど、学園都市は自分の常識が通用しないことはよく分かった。

警告は覚えておく。学園都市は、レベルがすべてと言うことを。

「…………ああ、そうだな。お前みたいに俺達の話聞いてくれる人間も今じゃ珍しい。スキルアウトって言うんだ、俺達みたいな集まりをな。レベルの高い能力者に対抗するために武力で身を守る連中のことをいう。不良見たいな集団と思われがちだが、俺は実際金奪われるまでは普通に暮らしていたよ」

「……………」

何だか気の毒に思えてきた。

嘘かどうかは分からないが、少なくとも後悔と悔しきは本物じゃないかなと思う。

そういえば、能力者って何でもありなのか？

試しに聞いてみた。自分も理解できない変な力がある。

数年前に偶然発見したのだが、これはその超能力なのか？

「はっ? いや、超能力は学園都市の内部で開発しないと開花しないぞ?」

思い切り動揺された。まあ、以前にも知り合いに話して夢を見ていると言われた。この反応は予想していた。じゃあこれもやっぱりこれは摩訶不思議な何かか。

USBメモ리를 違うものにする能力。なにに役立つのか未だにさっぱりの一発芸。因みにビックリ、これを人間にぶつ差すと怪人に変身する。

一回自分で試して大変驚いた記憶がある。

何をいうかと言うので記念に一本実践してみる。

こんなときのために、手荷物にメモリを数本持ち歩いている。

大体何でもできるんで何ほしいと聞いた。

「……何でもいいのか? じゃあ……そうだな。俺は無能力だが、一応発火能力って言うんだ。炎に関するものは出来るのか?」

否定的だが何だかんだ見るらしい。

パイロキネシス。漫画で知っている。その名前の通り発火させる。

チヨイとグレードあげても良いかなと一本握って目を閉じて念じる。

やる前に一般的なメモリと見せておいて、いつも通りやる。

この人にピッタリのメモリをイメージすると。

——マグマ!

何か思ったよりも物騒な単語がメモリから聞こえた。

男も目を丸くした。彼の握った手のなかで、放電するように一瞬火花が散った。で、色と形が変わった。化石みたいなメモリが開かれて見せられた。

証拠と言われて愕然とする。なんだこいつ。聞いたこともない妙な能力者。しかも外部の。混乱する男に見せびらかす。

そうこうしているうちに、追っ手が……追いついていた。

目覚めるドーパント

廃墟のビルに入ったのはいい。

問題は、徒歩による逃走のため予定以上に近場にいたことか。

犯人の判断で、隠れたのはいいが見つかったらしい。

遠くから、サイレンの音がする。

周囲に複数の気配がした。取り敢えず伝える。

「チツ……追跡できる能力者が居たか！ おい、お前はもういい！ 話聞いてくれて
スツキリした！ 早く戻れ！ これ以上はもう付き合わなくていいぞ！ 俺もお前を
狙わない！」

乗用車のエンジンの音も聞こえた。停車のブレーキ音も微かに耳に入る。
完全に包囲された。そう思っただろう。

下が随分と騒がしいが、何だか物騒な気配もしている。

……やはり、何かおかしくないか？

なんだこの人数。不自然過ぎると、ふと思った。

聞く限り、犯人は一人。なのに何故ここまで過剰に戦力を投入する。

人質が居るのを差つびいても異常な数が割れた窓から見下ろす眼下には見える。

パトカーみたいなものが数台、武装した大人がざつと20人。

更には能力者と思われる制服の学生が複数。

あと、見てゾツとした。知っている身内が怒り狂っているのか車から降りた母に止められている。

顔を真っ赤にして助けにいくとか言っているんだろう。ヤバい、犯人が死ぬ。

緑の腕章をつけた小さい女子高生と見慣れない制服の大きい女子高生。

そう言えばあの二人、大能力者とか言ってた気がする。詰まり上位の能力者。

益々危険じゃないか。あの性格上、犯人をぶん殴るまでは絶対止めない。

ブラコンを拗らせた姉と妹はあの様子じゃ変わってないんだろう。

解放するという犯人に言う。自分の身内が来た。滅茶苦茶怒っている。

レベル4だと思われるが平気なのかと。当然真っ青になる犯人。

自分は真ん中で姉妹が居るのだが、拗らせたブラコンなので人質にした時点で犯人を

確実に血祭りにする。

逃げる気なのはいいが、そもそも逃げ切れるのか。って言うか、諦めないのか？

「悪いが諦めが出来ねえんだよ！ あの金は、俺がバイトして必死に稼いだ……親父の墓を買うための金なんだ！ 取り返さないと俺は……！」

そう言う事情か。ならば任せろ。

緑の腕章をつけた奴が複数いるが、あれは確か風紀委員とかいう、警備側の人間だったか。

最悪、やりたくはないが妹に頼んで見るか。そういう汚いことが嫌いな奴は鉄槌をそつちにも下すだろうし。

だから情報寄せ。最悪そつちが失敗しても何とかするぐらいの協力はしてやる。

「お前……」

カツアゲするような卑怯な能力者など聞いていて虫酸が走る。

ポカンとしている間に早く言え。じゃないと連中、制圧しに来るぞ。

そう、二重の提案をした。驚く犯人に続ける。

その気なら止めない。事情は聞いた。

やりたいならやれ。邪魔はしない。その代わり失敗の事も踏まえろ。

自分にはどうやら、身内が可能なことかもしれない。

期待外れかもしれないが、保険はかけておく。

どうせこのままじゃ、逃げ切れない。相手が強すぎる。

なのに、カツアゲしていたクソ野郎が野放しなのも腹が立つ。

犯人に聞いた。どうしたい？ 自分で捕まるの覚悟で突破してお礼参りするか。

不確かだが、大人しく捕まって誰かに託すか。好きにしろと告げる。

どっちを選んでも多少は手伝う。ただし責任は自分で背負え。

此方は一時殺されそうになった。これでチャラにしてやると。

「……決まってるだろ！ こゝこを突破してでも、自分で取り返す！」

犯人は言うまでもないと銃を取り出す。成る程、足掻くか。

それが許されない行為でも、奪われたモノを奪い返すために。

弱くても、無力でも。それが、スキルアウトの一面。強いたげられる弱者の意地。

……どうするか。別に、惜しくはない。ただ、間違いなく被害が広がる。

無法者に手を貸すという事は同類になる。

脅された訳じゃないが、そもそもこれの使い方も詳しくは自分でも分かってない。

以前使ったときは、自分が気持ち悪い姿になっていたので速攻引っこ抜いた。

その次は姉妹にタコ殴りにされて、気絶して自動で抜けた。メモリも抜けたら直ぐに

壊れた。

抜けろと念じると勝手に抜けるらしいのは知っている。

だが、気のせいかあの時も妙に身体が軽かったし、どう見ても人間じゃなかった。

この学園都市の能力者のようなモノじゃないとするなら、これは一体なんだ。

少なくとも、物騒な事には使えるだろう。根拠のない直感だが、故に広がると言うのである。

責任は取れないし、然しこのまま放置も気分も悪い。急がないと相手も救出に来てしまふ。

逃げる準備をしている犯人、然しここで。処刑の時間がやってきた。

「——お兄ちゃん誘拐したクソ野郎はお前ですかア……？」

「——弟君に何てことするのよチンピラが……絶対殺す、確実に殺すツ……!!」

……来ちゃった。ブラコン姉妹。

頭を抱えた。数年前から変わっちゃいないあの二人。

もういい加減にしろと溜め息をついた。

廃墟の扉が突如爆発して吹っ飛び、幽霊のような足取りで二名が乱入。

絶句する犯人が見たのは。

一人は分厚いコートにチエックのスカート姿の腕章をつけた長い黒髪の少女。

一人は前開きのロングコートとセーラー服と地味な色合いのスカートで、白いハイ

ソックスをしているポニーテールの黒髪少女。

互いによく顔付きは似ており、一応高校生ながら美人の類いに入るだろう。

茶色の目も血走ってなければ素直に喜んだのに……。

背丈も一部分も大きいのが姉で、全部小さいのが妹。

犯人を発見して、でっかい火の玉右手に構えた姉と、強烈な冷気を発して足元を凍らせる妹。

完全にお冠だった。

「落ち着け、杠に柳。俺は無事だ」

宥めるように彼女たちに声をかける。

もう驚かない。事前に聞けば如何に二人が強大がよくわかる。

蟻を人間が踏み潰すようなもんだった。殺気を放つ二人に、銃口を必死に向ける犯人。

「弟君、久々なのに本当にごめんなさい。先ずはそのスキルアウトを灰塵にするから待つてて？ 丸焦げのウエルダンに仕上げて、お姉ちゃんたちと早くお家に帰ろうね」
「って言うか邪魔です。兄さんは引つ込んでいてください。氷像にしてから砕いてやる、このクソスキルアウト。無能力者の分際で生意気なことをして、許しません……」
「素の呼び方漏れてるぞ柳」

「うるさいー」

照れ隠しに怒鳴るな。怖い。

あと、妹はやっぱり見下すようなことを今言った。

分際で、か。犯人の言うことは正しかったと信じる証拠が一つ。

姉が大山杠。妹は大山柳。そして、自分は大山鍊太郎。

竦み上がる犯人は銃を撃つと脅すも、火の玉を持った杠が凄む。

「燃やして灰にして川に流してやる。弟君に人質にした事は万死に値するんだよ」

「おい、私怨混じってるぞ杠」

怒り心頭の姉妹には何をいっても無駄だろうか。

ゾロゾロ、増えていく大人たちも含めて四面楚歌。

これは王手か。そう鍊太郎は保険のほうを優先しようと冷静に考えるが……。

「まだだ、まだ終わらねえ!! 終われねえんだよ、こんな場所で!!」

自棄になった犯人は、鍊太郎に駆け寄った。

途端に火の玉を投げようとする杠。流石に鍊太郎が制止した。

「杠アツ!! お前は俺まで灰にする気か!!」

姉、杠は極度のブラコンである。

弟に怒鳴られると直ぐに謝る。

「わああ!?! 弟君ごめん!」

大抵鍊太郎の怒鳴る内容は正しいので、杠としても全幅の信頼を置くわけだが。慌てて火の玉を引っ込めた。器用な真似をする。

それはいいとして。犯人は、先ほど見せた鍊太郎のメモリを引たくった。

「兄さん!?! なんでガイアメモリを学園都市に持ち込んでいるんですか!?! 入るときの持ち物検査は!?!」

柳がその行為を理解した。スキルアウトに、彼の特異な能力を教えた。

その意味も正しくわかった上で警告したはずなのに。

「あー……変異する前だったから問題なく。中身も新品だったし。入ってから暇潰しにやってた」

「何てことしたんですか!?! しかも教えたんですかスキルアウトに!?! ああもう、だからお母さんに事前に言ったのに!?! メモリは没収してって!!」

聞いてない。知らない。

柳がそれを奪い返せと叫ぶ。

姉妹は鍊太郎のこの力を知っている。

学園都市に入る前に、一度披露して二人が泣き喚いて叩き潰されたから。

「借りるぜ、お前のその能力って奴!」

ガイアメモリと自分自身で何と無く名付けたそれを、使い方など詳しく聞かない犯人は奪ってボタンを押す。

マグマツ!!

赤い化石にも見えるメモリを、思い切り手の甲に押し付ける。

すると、犯人の身体が突然燃え出した。熱風を吐き出し、思わず錬太郎が一步下がった。

殻を破るように変異したのは……燃え盛る炎を抱いた男だった。

頭部や背中には焔をたぎらせ、焼け爛れた人間の顔が、黒煙を口から漏らしながら立っていた。

「す、すげえ……力が溢れてきやがる! 際限なくみなぎるパワー……これがお前の力ってヤツか! 感謝するぜ、ありがとうよ!!」

犯人は変貌したのを呆然として見つめる大人たち。

礼を言つて、颯爽と窓から逃げていく犯人。ここ、結構高いのだが。

結局逃亡したので再度追跡。出ていくのを見送る錬太郎。

何が起きたかは、正しく理解しているのは……三人だけだった。

「兄さん!! ドーパントの事を口外するなつて前にあたしは言いましたよね!!」
ガイアメモリの事は秘密にするつて!!」

「……そうだったか？ 濟まん、忘れてた」

そう言えば当初は三人だけの秘密だった気がする。

怒鳴る柳。何年も会ってなかったんで、余裕で忘却の彼方だった。

「学園都市じゃ兄さんのそれは、異常なんですよ！ 有り得ない事だつて学んで知ってるんです！ 手遅れかもしれないかもしれませんがもう本気で止めてください!!」

「そうだよ!! 弟君は兎も角逃げて!! あいつはお姉ちゃんたちがどうにかするから!!」

何かとんでもないことをしたようだ。さっぱり自覚がないが。

ドーパント。これも、何と無く名付けた怪人の名称。ガイアメモリを取り込み、変異した人間の姿。

二人は避難しろと言っていた。言われた通りにするが、然し気になる。

あの人、無事だろうか。家族以外で使われたのは初めてなのだが。

ちよつと心配なので、追いかけることにする。

「避難するけど、ちよつと様子見に行く。他人に使われたのは初めてだしな」

「だから開発受けてないのに能力あるみたいなの事をするなって言ってるんですが!!」

「どのみちバレるだろうがよ。だったら早めの方がいいんじゃないか」

柳が指摘するがどのみち最後には判明してしまう気もする。

検査は後で恐らくは受けるのだろうし。

ある種の正論に柳が怯む。学園都市の本質を知らない外部の意見。然し、時間の問題なのも事実で、ならばいつそ開き直るのも一興。

と、鍊太郎は言った。杠は一度言うとは頑固な鍊太郎の性格を知るので諦めた。自分と一緒にいるなら許すと。結局ブラコンの欲望優先。

兎も角、追いかける。鍊太郎はもう一本取り出した。

暇潰しに作った、新作。効果不明。内容不明。ドーパント形態不明。

絵柄は走る犬が文字を象る。Pの単語。

最後までごねる柳を無視して、ボタンを押す。

ペット！

「!?」

また妙なものが出来たらしい。ペットとかいうガイアメモリ。

嫌な予感が出て、柳が奪おうとするが額に素早く突き刺した。

そしていきなり、ぐにやぐにやとシルエットが変形していく。

縮み膨らみ、数秒後。姉妹の前には……。

「ブギーッ!!」

大人の大きさの恐らくはミニブタが、構えているのだった……。

解説。

ペットガイアメモリ。

ペットの記憶を内包したガイアメモリ。

歴史において人間がペットとしてきた動物たちの記憶を多く記憶している。

絵柄は走り出す犬。単語はP。

使用するとペットドーパントに変身する。

ペットドーパント。

ペットガイアメモリを使用して変異するドーパント。

使用者によって、変異するドーパントの姿も性能も変わるランダム要素が絡んでい
る。

大抵実際の動物と酷似するドーパントにしかねないので戦闘には向かない。とい
う弱い。

鍊太郎の場合は成長したミニブタ。但しそれなりに大きく突進などもできるが能力者には通用しない。

尚、変異する状態では会話も不可能。要するに動物になってしまいう外れドーパントである。

解説終わり。

広がった波紋

この日を以降に、学園都市では波紋が広がった。
とある日に入学してきたある男子高校生。

ソイツは、有り得ないとされた多才能力者に似た能力を保持していたという。
出身は外部で、開発の経験はない。身内が二年ほど前に学園都市に住んでいるだけ。
過去を調べるも一切の怪しい部分がない完全な一般人。故に誰もが疑った。
生まれつきの才能にしては、微妙すぎる能力だった。

USBメモリをガイアメモリという得体の知れないモノに変化させる能力。

これを使うことで人間は怪人、ドーパントに変異して様々な能力を使えるらしい。

が、学園都市は生憎と能力者の巣窟。そんなもん無くてもクローンのほうがお手輕で安定しているし早い。

無能力者の烙印を結局は押されたいが、それは学園都市においてもその能力があまりにも不可解だから。

はつきり言えば再現不可能な領域。

しかも研究して利用するにはどうしようもなくばらつきがあり戦闘にも政治にもその他にも何の役に立たない。

特化したものはある程度は役に立っているが、それは彼でなくとも問題なく。

そもそもその時点で既存の技術の方がより高性能で遥かに低いコストで製造できた。

同時に意味のない無駄に大きな枠組みで発現する能力は正直学園都市から言えば放置しても妨げにはなりえない。

どこの世界にブタに変身する能力を有効活用できる奴がいる。

その他、お酒やら芸者やら妻やら団子やらマグカップやらイチゴやら、しまいには架空の動物まで入る。

清濁あわせすぎて最早カオスだった。因みに役立つのはその内の一桁。少なすぎる。

夢幻と言われた多才能力は現実には、ただの器用貧乏だった……そんなオチだったらいい。

挙げ句には本人には戦うセンスがまるでない。

他人に自分の能力を道具として精製、譲渡できるとはいえ高くとも大能力者止まり。

どう見ても世界のバランスを崩すには至らない。傾かせるほどの逸材でもない。寧ろ半端な力は邪魔でしかない。

知らなくても困らない。いや、知るに使う時間と金が無駄になるだけ。

学園都市の闇の結論はこうだった。

リスクの割りには見返りが少なすぎる。利益という意味では無意味と同義。

全く持つて金にも技術にもならない。精々ちよつとした兵器の製造工場程度の認識。

要点を纏めると意味ないからほつとけ。

個々ならばまだしも、全体的な流れでは微々たる物で利益にならない。それだけだった。

それが寧ろ救いになった。多才能力とは即ち単なる器用貧乏で、魅力は全くない。

万能というには欠点が多すぎる。運用には難があつて、量産も不向き。

万能の完全な劣化。

汎用にすら至らない未熟かつ無価値な能力、のちに『星の記憶』と名付けられた彼は闇に関わる事がなかったのは、欲張りすぎて科学の進んだ学園都市では兎戯と同等と蔑まれる程度の能力だったこと。

特化したものを安定的に安全的に生産できる学園都市だからこそ、無視してもらえたと云つてもいい。

だが、それはあくまで上層部の判断である。ある闇の小規模組織たちは思う。使い捨てには便利そう。然し生産できるのがこいつだけだから殺せない。

インスタントの戦力増強に丁度良さそうな一般人。

ただ、全く持って不理解なモノもある。中身わからず渡してきた。

自分でも分からないとはこれいかに。

先の話になるが、入手したあるイケメンの男は手にしたそれを見て硬直する。

(……………これをどうしろと言うんだ……………)

エージェントが手に入れたガイアメモリはマグロ。

試しに恐々使ったらまさかの自分がマグロになってアジトでのたうち回る羽目になった。

誰が想像できる、学園都市の上から数えたほうが早い実力者がマグロになってのたうち回るとか。

青いメモリに、Mの文字を象るようにマグロが並ぶオモチヤ。

科学では証明できない何かと言われ通ずるモノを感じたが結果はお魚にされた。

それを見たゴージュルつけた仲間が思わず吹き出して、頭に来たのでそいつにぶっさしてやった。

そいつもマグロになってのたうち回っていた。

で、女子の多い組織でもそれを手に入れた。

「はーまーぶーらー……お前スキルアウトだったろ？ 同類のもんならほら、お前が試すんだよ!!」

「ちよ、待てそんな強引に……うわあああ?」

リーダーの美女に捕まって実験台にされた哀れな男が、抵抗空しくこめかみに突き立てられた。

この世界では悲劇を幸運にも免れていた面々の目の前で、男が変貌する。

それを見た面々は反応に困った。実験台にされた彼はひどい姿だった。

言うなれば、スチールの缶に手足生えて落書きみたいな顔がある金属光沢のある着ぐるみ……?」

「だーっはっはっはっはっ!! お前最高だよもうっ!!」

リーダーの美女がアジトで涙を浮かべて腹を抱えて爆笑していた。

一人は超お似合いと嘲笑い、一人は記念とか言い出し写真を取って、一人はドンマイと慰めてくれた。

愉快な事をしていきますがこいつら一応暗部の人です。

受け取ったガイアメモリは、エナジードリンク。スチールの缶にEと書かれた絵柄のメモリ。

哀れなパシリは、この世界ではリーダーと戦争せず平和に日々のお仕事を送っていたが今回は悲劇だった。

肝心の性能は言うまでもなくクソだった。

対象に炭酸ぶっかけ疲労回復する程度だが意外と便利なもんだった。

そんな裏の一部の方々は、便利な道具扱いでちよくちよくお買い上げに向かうことにした。

尚、恐らく最も性癖に問題のある連中はというと。

「……………」

紅一点が死んだ目をしていた。打ち込んだガイアメモリが悲惨なものだったので。

なぜか最初のガイアメモリは拒絶反応が出てしまい使えず、複数購入したうちこれだけが反応。

……ピラミッドだった。使ったところ、目玉のあるピラミッドが鎮座しただけ。

等身大の置物になったわけだ。この状態でも能力を使用できるのは驚いたが。

「ピラミッドですか……また、奇妙なモノに反応しましたね」

爽やかな表情のイケメンの男が苦笑する。

こいつはビールのガイアメモリが反応してビールになった。

こつちも酷いもので、ジョッキの頭部に際限なく出てくるビールが満たしている怪人

である。

強さと言うまでもなく、使えない。アルコール中毒でも無ければ。

「……良いじゃねエか。俺は気に入ったぜ」

で、学園都市最強には運命のようなガイアメモリが届いていた。

製作者いわく、何なのか理解できない。大抵なら使えるはずの自分ですら拒絶反応が出たという一品。

要らないのでサービスと言われたそれは、正しく彼の能力と全く同じ。最強に相応しいものだった。

取りに行ったグラサンは三名にドン引きされた。反応したのはまさかのメイド。

使ったところ体格はそのまま肉体美に溢れていたが服装はメイド服的な意匠の、グラサンかけた野郎宜しくのドーパントに変貌。最強に小突かれて速攻出した。気持ち悪い。

一応人間ならば誰でも使えるという謳い文句に嘘はない。全員何らかで必ず反応した。

但し役立つのは一部だけだったが……。

そんなこんなで闇の皆様は何かに使えればまた買いにいく、ぐらいの認識であった。故に積極的に狙うのは、通り名の『無能力の多才能力』に反応した一般人やスキルア

ウトであつた。

さておき、時は戻る。

ブタになつた兄を絶句して見下ろす柳。

大きなブタだ。丸々太つたピンクのブタ。

「お、お兄ちゃんが……ブタに……」

あまりのショックで気絶した。ぼつたり倒れるのを杠が受け止める。

ぶぎー！ と荒々しく鳴いたブタ、鍊太郎。

よくよく見れば顔は可愛いと杠は喜ぶ。

「ブタになつたら……一緒に風呂入って綺麗にしても誰も文句言わないよねエ……」

「？」

「ぶぎー！？」

愛玩動物を肉食の危険な視線で見下ろす姉。

義理の弟がブタになっても好都合とか言うのはこいつだけだろう。

ともあれ、マグマドーパントを追いかける。

気絶した妹を軽々と背負って、更にブタに跨がる姉。

「さあー行くよ弟君!!」

お前が走れと無茶を言われるもそこまで重たくもない。

仕方無く走り出すブタ。乗っかる姉妹。シユールな光景だった。

階段を走って降りる。廃墟を抜けて、外で待っていた母を見た。

「!?!」

目を点にした。娘が知らないブタに乗っかっていた。

そのまま駆け抜け犯人捕まえてくると言って去っていく。

……ブタに乗って。

方向は柳が持っていた無線で勝手に聞いて特定、道を案内する。

どうやらマグマドーパントは、犯人を探しに走って逃げているようだ。

乗用車すら追い付けないとは中々やる。ブタに追い付けるかは微妙だが。

「頑張つて弟君! ご褒美に今夜は一緒に寝しようね!」

「ふぎゃーっ!!」

絶対嫌だ、という断りは聞こえないだろう。

ブタは走る。舗装された車道を、元気な姉と目をぐるぐる回転させて気絶する妹を連れて。

相当な速度。やはり腐ってもドーパント。多少は人間よりも速い。

見た目は随分と悪いけど……。

「とうま！　大きなブタが道路を走ってるんだよ!!」

「いやいや、インデックスさん。街中にブタが居るわけ……居たー!!」

街中に突入。車道の隅っこをブタは引き続き疾走。

歩道の歩行者が何事かと注目していた。ブタ、走る。音を立てて。

あるシスターとその恩人が見たのは女の子乗せたブタがなにか目指して突っ走る姿。

何が起きた。理解できないが学園都市。気にしないことにした。

また、ある中学生は。

「お姉さま、謎の怪人はわたくしにお任せ……を……」

「何よ黒子、私も手伝う……って……」

ビリビリ中学生と変態能力者が口論している前をブタが走る。

学園都市でも早々ない、ブタに跨がる女の子がテンション高めにドーパント撃破を指しているのを見て言葉が萎んだ。

変態能力者のほうがのちに、それを担当する箇所の違う風紀委員の仲間の身内と聞いて絶句するのは言うまでもなく。

ともかくもブタは目指す、マグマドールパントがいる場所に。

「許さねえ……ここで死ね能力者ア!!」

現場に到着した。

見事に死屍累々。警備員も風紀委員も焦げ臭い状態で倒れていた。

眼前には、半殺し状態の被害者……いや、事の発端であろう連中が半殺しになっていた。

激怒するマグマドールパントの前で、起き上がっていたが大ケガをしているのが見てわかった。

ブタは倒れる連中を超えて、油断しているマグマドールパントの背後から突っ込む。

足は止めない。なんか良くない空気を感じる。殺人はやり過ぎだ。

もうお礼参りは終わったんだろう。なのに殺そうとするのは過剰な仕返し。

足元には半分焦げた鞆が落ちており、札束も顔を覗かせる。

取り返したと見た。ならば、仲裁するとする。やり過ぎ、良くない。

今にも焼き殺されそうな彼らが見た、言葉が出てこなくなる光景。

それは。

「ぶぎいいいいい!!」

「そこまでにしなさいーい!!」

巨大なブタが、女の子乗せて真っ直ぐ突っ込んできて。

その女の子の直情では、背中に誰かを背負ったまま燃えている大きな炎の拳骨を構えていた。

雄叫びに振り返るマグマドーパント。怒りで全く気付かなかったが、さっきの女とな

ぜブタが一緒にいる!?

「ぶ、ブタだとおおおおおお!!」

思わず出た言葉がそれであった。

驚いて固まる。その致命的な隙に、大能力者の炎の鉄拳が見上げる先で、降りおろされる。

「おりやあああああああ!!」

「なんでブタがああああああー!!」

反撃の火炎の弾丸も拳骨に吸収されて更に巨大化。

逃げる前にブタの勢いとインパクトに怯み。

マグマドーパントは……そのまま、火炎の拳に呑まれるのだった……。

解説。

マグロガイアメモリ。

垣根さんが入手してしまったマグロの記憶が内包されたしようもないメモリ。

要するにマグロに変身するメモリであり、垣根さんには全くのメリットがない。

色は青色、象られたのはMの形に並んだマグロ。文字はM。

ドーパントになるとマグロになる。以上。垣根さん、ドンマイ。

エナジードリンクガイアメモリ。

世紀末帝王が悪乗りしたむぎのんに実験されたしようもないメモリ。

こっちは変身すると疲労回復の期待できる炭酸を精製できる。

但しあの面子に炭酸をぶっかける愚行を世紀末帝王が出来るかは別として。

色は緑色、象られたのはEの文字が入ったスチール缶。文字はE。

ドーパントになるとスチール缶手足生えた気持ち悪い姿になる。以上。世紀末帝王、ドンマイ。

解説終了。

無能力者の現実

学園都市に引越してきて一週間が経過した。

幾つか分かったことがある。一つ、この学園都市は治安が非常に悪い。

特に普通に暮らしている一般人は毎日何かしらの悪事の被害者になっていた。

ひつたくり、恫喝、強盗。果ては殺人、放火……。内部が酷い有り様に開いた口が塞がらない。

能力者というのは……。いや。人間というのは強大な能力を手にすると増大する。

悪意が弱者を虐げて、居場所を奪う弱肉強食。無力は罪だ。

学園都市は、科学がありながら本質は無法者の楽園。

最先端が聞いて呆れる。秩序がない都市。笑えない。

二つ。妹は風紀委員というその秩序を守るために集った有志の組織に所属している。

姉はその手伝いをよく駆り出されていると言っていた。

暴力には暴力を。言って理解しないバカには叩き潰して捕まえる。

それが、妹の主張。姉も似たようなものだった。

彼女たちは言った。

「正義ですよ。警備員、風紀委員。あたしたちは、バカに痛みを持つて教育する立場。即ち、正義を執行するのです」

「説明して理解できるお利口さんは無能力者には居ないからー。弟君は別だよ？ 事情が違うし」

傲慢にも自らを正義と語る柳と杠。自分は思う。

ああ、愚かな生き物になってしまった。外の世界を忘れたか、とも。

正義などの世界にも存在し得ない。思い上がっている。これが、現実。

だから言った。近づくな。一緒にいたくない。

自分まで、学園都市の非常識に吞まれる。そんなものはゴミだ。

と、久々にあつて変わってしまった姉妹に突きつけた。

「弟、君……？ なんで……？ なんでそんなこと、お姉ちゃんに言うの……？」

「お兄ちゃん……どうして怒るんですか……？」

分からないか。お前らだって、強い能力を持つて増長している。

高校生が正義を真顔で、得意気に語るのはお笑い草だと言っていると指摘した。自分達は子供。それが答えだ。

世の中のなんたるかを知らないひよっこが、人よりも優れた自分を見せつけるのがそんなに楽しいのか。

笑わせるな。正義なんかない。そんなものを言い出したお前らは、外の世界で生きてきた自分からすれば。

滑稽、とすら言える。箱庭の世界に入って頭までおかしくなったか？

自分達だけが絶対に正しいと思う……それを、外の世界じゃ盲信と言うのだ。

頭を冷やせ。じゃないと、家族とすら思いたくない。

身内の恥。妄想を拗らせるのも大概にしろ。

嫌がるように、彼は敬遠する。そんな見えない思想に染まった姉妹は、狂っている。理解したくもない。する必要もない。

近寄るな。そんな危険な考えを持つ家族と一緒にいると自分までおかしくなる。バツサリと切り捨てた。悲しそうに表情を変える姉妹に、同席していた母が怒った。

然し、母も半分信じられない顔をしていた。物騒なことを嬉しそうに喋る二人は、最早別人と思うように。

良くも悪くも、彼は外の感覚が強い。故に学園都市での常識を非常識と嫌悪してい

る。

その感覚が強く共感してくれるのはやはりなにも持たない弱者……無能力者に近い。故に、初日のスキルアウトの事も言った。

結局、あの金は爆発したマグマドーパントの爆風で吹っ飛び、何枚か燃えたが無事に回収。

足りないぶんは半殺しの連中が出させたと言った。

然し、妹は犯人を責めた。他人に言えばいいものを暴力に頼った頭の悪い無能力者。

無論連中も締め上げたらしいが、彼女はバカにしていたのだ。

「群れるしか脳がないのに相談も出来ないとは……。そりゃ開発を諦めたチンピラの集団ですもの。相談する相手もいませんよねえ。情けない……。それで暴れるとか、これだからスキルアウトは最悪なのです。身勝手極まる迷惑な奴らがスキルアウトなんですよ」

言いたい放題見下して、因果応報と病院送りにした姉を褒め称え、その後始末書を書いていった。

担当する地区以外の場所での能力使用と権利執行。

でしゃばった罰としての始末書と言うが反省はしていないと見る。

嘲笑する柳に、酷く嫌気を感じたのを覚えている。

何時から妹はこんなに偉そうになった。知らない間に随分と調子に乗っている。彼は再三言った。近寄るな。もう顔だつて見たくない。

自分の知る姉妹じゃない。自分の存在を過大評価するような家族は家族じゃない。あの犯人の言う通りだった。大能力者という上の連中は笑っているという事実。よりによつて、家族が。風紀委員という秩序の万人がこの有り様。信じられない。助けられた……そんな気がしない。寧ろ合法なら人殺しだつてしそうで怖い。相手が悪いで正当化。大義名分を手にする人殺しと発想が同じ。

「お兄ちゃん……あたし、そんなつもりじゃ……」

「ご、ゴメンね弟君……気に障つたら謝るよ……だから、許して……」

二人は懇願するように言うが、一度膨れた猜疑心は止まらない。

とどめに言った。どうせ自分もその嘲笑う無能力者。学校だつて違う。

カースト最底辺のバカしかいない学校に入る奴なんかどうでもいいだろう？

レベルが全てと聞いたのだ。そして自分で聞いて、感じて、分かった。

じゃあ無能力者に価値などない。二人はそう言いたいんだ。

家族だから特別扱い？ 同情しているのか？ 哀れだから？

「ふざけるのも大概にしろよお前ら。お前のその根付いた差別意識が無くなるまで、金輪際俺に近寄るな。俺まで同類に思われるのなんか冗談じゃない。俺は普通に生きた

いんだよ。見下されるのってこんなに不愉快なんだな。初めて知ったよ」
大能力者と無能力者。

その間を隔てる壁は途方もなく、大きかった。

姉妹は仕舞いには泣き出ししていた。……だが、彼の胸の不快感は消えない。

呼吸をする如く自然体で見下していた。この無駄に高圧的な態度は共に居るのは不可能。

あまりにも無神経すぎて、キレる自信があった。

だから、試験を受けて決まったカースト最底辺の学校の学生寮のアパートの場所は教えない。

そして、自分には友人も居ない。どうも、誤解が広がっているようだ。

一泊をあれこれ終えてからホテルで過ごし、翌日には試験になった。

が、どうもあの事件のせいで能力を保持していると知られたらしい。

承知の上だったが、普通に学力テストを行い最後に例の開発をするというのだが。

自分の場合は実践しろと言われた。……何を？

何を実践しろと言われているのか先ず分からなかった。

なにができるか、と白衣の科学者に聞かれた。

言われても困る。自分だって未知数。以前よりただの一発芸としか認識してない。

試しにメモリをガイアメモリにしてみた。見ていた一同が絶叫した。有り得ない、オカルトか、科学的な証明ができない。等々。

何度か試して出来上がった有象無象のガイアメモリは渡しておいた。サンプルにするそうだ。

で、次にドーパントに変身。再び絶叫。ブタになったから。

解き明かすとそのまま少し検査した。科学的にはミニブタだそうだ。

戻ったら、ペットのガイアメモリも持っていかれた。

補足程度に誰でも使えるが、副作用などに関してはそもそも使ってなかったので分からない。

研究に必要ななら検査を頼むと言うと身体の隅々まで探られた。異常はないという。

ガイアメモリも中身のデータが解析できない。どうなっているのか時間がかかる。

取り敢えず、実験と称して一人がガイアメモリを使ったら山羊になったのは驚いた。本人も。

どうも大事ならしい。学園都市の開発を無しに自然で発芽した超能力。

そんなものは本来居ないはずなんだそうだ。

事実として目の前にいるので、科学者たちは然し不可解な事象に頭を抱えていた。

そんな紆余曲折あって、結果は彼も無能力者。

最底辺の有象無象。低レベルな学校に押し込まれて、そこに編入した。

学校初日。見上げた高校は何の面白もない普通の学校。

二年生として途中編入した、黒い学ランとストラックスの制服。

真新しいそれを着て、先生に紹介された。HRの前に。

それもごく、当たり前前の転校生としての範囲かと思つたのに。

クラスの見知らぬ生徒たちは訝しげに自分を見る。

なぜここにいる。そういう顔で。

違和感があつたが、そのまま空いている用意された席に着席。

……前の席は女の子だった。振り返り、愛らしい笑顔で小声で話しかけてきた。

周囲は異物を見ているような顔なのに、彼女だけは普通に接してくれた。

「あなたが噂の転校生なんだね。わたし、月川雫。よろしく」

「……」

セミシヨートの身内よりももう少し色の濃厚な黒い綺麗な髪の毛。

右の頬には大きなガーゼをしている怪我をしている女子生徒。

目鼻立ちの整つた幼い顔をしているが、痛々しいガーゼのせいで台無しだった。

瞳は珍しい澄んだブルー。彼女は唯一友好的に接して、笑つた。

クラスの見知らぬ生徒の訝しげな態度のその理由を、数時間して彼は嫌でも理解する

はめになった……。

昼休み。周囲は鍊太郎には一切近づかない。

怖がっているような、そういう雰囲気だった。

前の席の女子生徒、月川雫だけは笑って話しかける。

「ごめんね、みんな大山君のこと警戒しているみたいで……」

苦笑いしている雫。だが一瞬、悲しそうにしているのを鍊太郎は見逃さない。

椅子を反転させて、振り向く彼女に聞いた。

「……俺の話聞いたか？」

「そうだね。噂になってるよ」

雫は勿体振らずにストレートに言った。

綺麗なブルーが、鍊太郎を覗く。彼は冷たく彼女に言う。

「成る程。要するにお前がクラスの代表になって、俺に噂の真偽を確かめる役目になっ

たのか」

「……………」

彼女は笑ったまま沈黙した。肯定と受け取る。

初日のあの騒ぎのこと。柳が控えろと言ったこと。

何より科学者が有り得ないと言うほどの事態。

鍊太郎は異常性のある己を自覚はしていた。

「怖い。俺が有り得ない能力者だから」

「怖いよ。凄い怖い。今にもわたし、この場で殺されるかもしれないって、正直に思うぐ

らい」

ストレートな言葉にはストレートに返す雫。

笑っているが、ブルーの瞳は完全に怯えていた。

被害妄想のように、勝手に。呆れるように、鍊太郎はため息をついた。

「阿呆が。俺は見境のない能力者じゃあない。そもそも、俺はマトモに自分の能力を理

解できてないんだ。歴とした無能力者だよ」

「本当かな」

「嘘だと思えば勝手に思え。最初に言うが、俺は人殺しになる気はない。この頭には、外の世界の常識はちゃんと詰まってる」

自分の人差し指で、右のこめかみを軽く叩いて彼女に言った。

雫は笑顔を崩さない。まるで、仮面か能面のように変わらない。

「みんな、最初はそうやって言うんだよ。自分は悪人じゃない、悪いことなんかしないって」

「用心深いなお前。……まあ、大体の事情は察したがな」

雫の言葉に、一種の確信を得た鍊太郎。

そうするとようやく、雫はハッキリと怯えを見せた。

表情がみるみる変わって顔色も悪くなる。微かに震えていた。

「ま、まさか……ここに来る前にわたしに何かしたの……!?!」

「?」 どうやって……ああ、違う違う。俺は月川の想像することはしないよ」

そう言うが、怖がったままの雫。

恐々彼に聞いた。

「開発受ける前に能力を持っていたって……本当なんだね……」

「ああ、まあな。って、そっちかよ。てつきりもう一個のほうかと思っただのに」

なんだ、怯えていたのはそっちか。

鍊太郎は雫にそう言った。彼女は驚く。

怖い理由は、なにもせず能力が開花していた不気味な能力者。

皆は後天的なのに、彼は先天的。その違いが恐ろしかった。
なんかブタに変身する能力らしいが。

「えっ？」

「ん？ 俺の能力名だよ。『星の記憶』。それが、俺の能力になるんだと」

ガイアメモリ？ なんだそれは？

授業でも習わない、聞き覚えのない能力名。

その危険性をこの時は自覚してない錬太郎は、学園都市の禁句を言った。

雫の状態は何となく分かったが、これは理解できてなかった。

自分から、爆弾を撒いてしまう。

「俺の能力って、科学者の人が言ってたんだけど……多才能力とかいうのにかなり近いらしい。完全に劣化したとか言われたけど。有り得ないって、そっちじゃなかったのか？」

この一言が、騒動のきっかけになるとは……思っても見なかった錬太郎であった。

人物解説。

月川雫。

本作のオリジナルヒロイン。無能力者。鍊太郎の転校してきた席の前の席の女子生徒。

一応、ある系統の能力は保持している。彼女が選ばれた文字はW。

彼女も、ガイアメモリに選ばれた一人になってしまっているが、果たして……。

ガイアメモリ解説。

バリアガイアメモリ。

詳細不明。

バリアドールパント。

詳細不明。

解説終了。

砕け散る日常

その日から、自分の日常は崩壊した。

次から次へと迫り来る悪意。嫉妬。羨望。

何故だ。自分だつて無能力者。同じ土俵にいる存在すら目の敵にするのか。

何度も言つただろう。お前らの言うような力などない。存在し得ない。そんなものは幻想だ。

なのに彼らは理解しない。しようとしなない。

ありもしない見えない何かに狂つて、自分のことを襲う。

無力なものを強者が殺そうとする。見せろ、その能力を。何度も聞いた。

何度も怒鳴つた。無い。そんな才能も、素質も、夢のようなものなんか。

聞けと言つても聞きやしない。嘘を言うな。お前は知つているはず。

その頭に秘めた能力が、学園都市の多くの生徒を惨めにする。寄越せ、使わないのならば。その力を此方に寄越せ！

彼らは叫ぶ。嫉妬に狂った愚かな学徒。彼らは彼が外の人間だと知らなかった。追い詰める。追い込まれる。呼び覚ます、彼らは知らない。

星の記憶。歴史に眠る戦いの記憶すら内包し、それが暴走を誘発するなどは、露にも。

「多才能力……？ あ、有り得ないよ……そんなの、有り得ない……」

雫は鍊太郎が真顔で言った言葉を即座に否定した。

別の恐怖が沸き上がる。彼は何を言っている。

だが、彼は外の人間。外で居たと自己紹介の時言っていた。

詰まりはその常識など存在しない世界で生きてきた。

故に重大な事を分かっているかと雫は下す。

「ああ、やっぱり有り得ないんだな。俺も驚いたよ。幻の能力者なんだってな？ 机上の空論が現実に住ればそりや大騒ぎになるわけだ。勘違いするなよ。俺は多才能力じゃないぞ？ 最も近いだけの劣化。欠点だらけで夢もクソもねえってさ」

「……………」
と、軽く話しているが雫は愕然とした。

やりたくもないこの役目、終えなければ逃げ出せない。
相手はやはり異常な能力者。逃げたい。逃げ出したい。

(…………騙されないよ。わたしは、もう…………騙されない…………)
そう。騙されたら痛い思いしかしないから。

何とか完了させて、彼から離れよう。どうせこれも嘘に決まってる。
適当なことを言っているんだ。真実など、何処にも…………。

「証拠見せてやろうか？」
「えっ…………」

なのに論よりも証拠と言って、手品を見せてやると彼は言い出す。
周囲は各々飯を食べていて、エアポケットのように空間が空いている。

近寄ろうとしない。怖がっている。未知の能力者。実際はもつと危ない学生であった。

懐から取り出したのはなんの珍しくもない、USBメモリ。

仕掛けがないか調べるかと聞くのでチェックしてみる。特に異変はない。

受け取った彼は問う。

雫は、どんなメモリが欲しい？ と。

「……選べるの？」

「多少はな。俺自身原理が分からんから適当なイメージで作ってるが、正確に言えば当たりが出るかもよ。但し効果は保証できない。真面目に大半のものなら出来るからなあ。しょうもねえもんが多いんで、詳しく言う和尚良いぞ」

「……………」

ここまで言い切るのだ。相当自信があると見た。

しかも彼は教える。これは、使用するとドーパントという怪人になる。

化け物宜しくの外見になるので、それだけは受け入れろ。

と、あとは使ってもいいが自己責任。此方は関与しない。

「強大なものになるかもしれない。振るうのなら勝手にしてもいいが、俺は知らねえぞどうなっても。副作用もよくわかってねえ実験品みたいなもんだぜガイアメモリは。自衛に役立つかどうかの程度のもんだらうけど。だから、月川にガイアメモリを渡してもどうするかは自分で決める。壊したければ壊せ。踏めば壊れる。使いたいなら使え

「ばいいが、俺は知らん」

あくまで、断るといふ選択もあると提示する。

鍊太郎は証拠さえ見せれば作つたものはまた科学者サンプルとして提出するのみ。

誰かにやつてもいいとは科学者たちにも言われている。実験台にしたいようだ。

ただ、その時も言つたが鍊太郎は責任を取る気はない。

渡したものが武器になるのは知っている。

然し、こんな物騒な学園都市なら、武器ぐらい持つてないとあまりにも危険。

雫の頬の怪我也誰かに襲われていると言動を見て感じた。だから言い出した。

声を小さくして、余計なお節介なら引つ込めると言うが……。

「ま、待つてー！ いるー！ 欲しい!!」

雫は過剰に反応した。激しく求めていた。

嘘じゃないなら是非欲しかった。事実、雫にはメリツトしかない。

受け取つてもダメなら元々。当たり前なら得をする。

どう転がつても彼女には何もないと、軽く考えていた。

詰まり、彼女が。月川雫が……鍊太郎の最初の相手だった。

「どんなイメージでもいいの？」

「大抵はどうにかなるけど」

雫が聞く限り、本当に雑多なモノを内包できるようだった。ぶつちやけ何でもあり。成る程、本質が雫も分かった。

多才能力とは、能力者が一つしか使うことができないう能力を複数使える事を示す。だが、複数とは言うが同時並行で使用する訳じゃない。

錬太郎のそれは、用途に分けて変えていく仕組み。言わば能力の着替えのようなもの。

だから、劣化した多才能力。同時に使えない、道具に頼る、副作用も不明。見れば納得する。そうならば、確かに彼は多才能力ではない。

まあ、そんなことはどうでもいい。今は、チャンスが目の前にある。

以前のチャンスは幻想御手とかいう、聞くだけでレベルが上昇するというモノだった。

然し雫はその時、大ケガをして入院して機会を逃してしまった。

恐らくは仕返しを嫌がってあいつらが阻止するためにやったんだと思う。

雫の性格を連中は知っているから……。

おかげで唯一のチャンスを逃して、一時期不登校になっていた。

後で聞けば、重大な後遺症が合ったらしいが、雫は思う。

(副作用があっても、わたしは夢が見たかった……。けど、今度は遅れない。わたしにも

幸運が漸く来たんだから!!)

絶望など慣れている。何度も挫折して、へし折れた精神だ。

今頃希望が無くなっても落ち込む程度で済むだろう。

どうせ何もない、一度は死のうとすら思ったような人生。

一度ぐらい、博打に出る。失敗したつてもう、雫には何も無いから。

「強い力が欲しい。自分の居場所とか、自分の身を守るぐらいの強い力」

気がつけば、彼女は錬太郎の目を真っ直ぐ見て告げた。

その綺麗なブルーには、錬太郎には自分の予感が正しかったと思わせるような色をしていった。

強い力と言いながら、続いた言葉は自衛の意味で、思わず初対面なのに笑う錬太郎。

彼女は増長した能力者とは、違う。不必要な程の力は求めない。

感心すると言うか、安心した。

「大山君……? や、やっぱダメだよ……。ごめんなさい、調子に乗って。そうだよ、わたしなんか……」

沈黙と笑みを嘲笑と受け取ってネガティブに、自己否定を始める雫。

錬太郎は雫に言った。

「いいぜ。お前の安全が確保できる能力をガイアメモリに詰め込んでやる。強い力って

言いながら誰にも負けないとか、悪いやつをぶっ潰すとか言い出していたら速攻止めたけどな。身を守る程度なら、お安いご用だ。お前だけのガイアメモリ、作ってやるよ」

人生で初めて、専用のガイアメモリを意識して製作する。

呆然としていた雫は、言葉をや取り取りして精製したときには目を輝かせた。

本当にできた。雫専用のガイアメモリ。

そつと手渡す彼に、雫はブルーの瞳に僅かに涙を浮かべて、礼を言った。

嘘じゃなかった。彼の言っていた事は、どうやら本当らしい。

「あ、ありがとう大山君……。わたしなんかの為に……」

「気にするな。もう、学園都市の状況は知っている。無能力者でも、自分の安全は自分で守ろう。……頑張れよ」

昼休み。喋っていて、見事に飯を食べ損ねた雫と鍊太郎。

そんなことよりも、雫は鍊太郎に恩義を感じていた。これが本物かどうか分からないくとも。

最低でも鍊太郎には不可解な能力がある。それは事実。一応命令していた連中にも報告した。

生まれながらの能力があるというのは本当だった。

内容を聞かれて、言わないと何時もみたいに叩きのめすと武器を持ち出す相手に。

雫は、すっかり彼を信じていた。彼は信じてもいい。確信していた。

この手にした力は、間違いなく本物。運命のように、鍊太郎が導いてくれた運命のガイアメモリ。

月川雫だけの星の記憶だから。

逆に、数名のいつも黙って暴力を受ける連中に言うのだ。

「……言わないよ。絶対言わない。もう、わたしは言いなりにもならない。従わない。我慢はもう、止める」

言い返して、何を言うかと嘲笑する連中に思い知らせる。

彼女が受け取ったばかりのそれを使用し、下克上を果たしたのは数分後だった。

昼休みの出来事は、遠目に見ていたクラスの連中にも伝わった。
逆に、雫が知らないだけで皆は知っていた。

鍊太郎は、多才能力を持っているのではないかと。

故に初見の時、彼の存在を怪訝に思った。

彼がガイアメモリを生み出しているのを見て、そして何より。

雫がぶちのめした奴等が言ったのだ。

月川雫が怪物になった。蹂躪されて医者に運ばれている。

多分それは大山鍊太郎の生み出した武器のせいだ。

運悪く雫は、下校よりも前に呼び出しを受けて実行してしまった。

で、そのまま学校サボって逃げた。

情報の拡散が早く、塞き止めて居なかった雫の落ち度。

人前で使った鍊太郎の落ち度。二人して抜けていたのだ。

結果、放課後。鍊太郎は柄の悪そうな男子に絡まれていた。

先輩だろうか。いきなり教室に入ってきて、帰宅の準備をしている鍊太郎を囲む。

用件を訊ねると、昼休みの物を寄越せと命令した。

従わないとぶちのめすというご丁寧な脅しつきで。

転入初日で仕掛けてくるとは思ってたが覚悟はしていた。

構わないと言って、拍子抜けにしている連中にもその場で適当に仕上げた。

代わりに金払え、メモリ代金と言われ彼らは渋々、ぶちのめす場合は二度と精製不可

能になるとでっち上げたら支払った。

支払うと思つては居なかつたが受け取つた以上は最低限の仕事はする。

此方も渋々、量産品みたいなものを生産し手渡す。何時もの注意点を教えて。

コイツらは聞き分けの良かつた部類であつた。

渡した記憶は鞭、タイヤ、トーテムポール、レコード。

本当に出来たと感動しようだつた先輩。

嬉しそうにテンション高め礼を言つて、戻つていった。

後日、強すぎるので扱い方を教えろと言われたがその辺は自分で慣れろと放置した。

タイヤの人がスピード違反で捕まつたらしい。何してるんだ。

初日はまだ、良かつた。

だが次第にそれらはエスカレートしていく。

強いものを寄越せ、いいから寄越せと喧しく付きまとう。

ストーカーのように毎日ついてきては暴力で脅そうとする。

雫は翌日から休んでいた。風邪らしい。なので不在。

結局鎌太郎は、学校に行けば追い回されて。街中ではスキルアウトの連中に襲われる。

逃げ回る日々が始まつてしまつたのだつた。

あまりの酷さに、警備員に通報した。

学生寮の近くに警備員が補導する人数が多すぎると巡回してくれたので部屋近くにはいない。

然し離ればまた寄ってくる。鬱陶しいハエのように付きまとうので、いい加減頭に来た。

追い払うしかない。実際、自分で使うにもやり方が理解できないしブタになっても逃げ切れないし。

取り締まりをしてもボウフラのように湧いてくる。すっかり噂になっていた。無力者の多才能力。そんな通り名で呼ばれているとか。冗談じゃない。

平穏な生活を、慣れない独り暮らしで忙しいのに心労まで追加してきやがる。

とうとう怒った鍊太郎は、反撃してやることにした。

一度適当にブツ飛ばすしかないのかこの学園都市では。

通報した数が多すぎる。他人がダメなら自分でやるしかない。

乱闘騒ぎの暴力沙汰になると、予め警備員に知らせておいた。止めろと言われたが、無理と返答。

そつちの気苦労も察するが、学園都市の方法で対処させてもらおうと。

その日は学校にいかずに、廃墟のある区画に向かった。

因みに遠慮なしで、此方は初手からガイアメモリ使用中。

その気になれば、無視もできるが今はムカつくので一度潰す。

予行演習も兼ねて買ったためたメモリを全部実戦想定で精製してある。

内容など相変わらず知らないが使えば分かるだろう。

大量に鞆に隠して、広い場所に向かっていた。

到着したのは、廃墟のビルが建ち並ぶ一画。

駅のトイレで自分に戻り、わざと歩いていく。

早速追跡してきていた人影を発見した。

迷惑にならないように歩いて向かい、建設業の使用されていない建築材の置き場に来た。

すると。

「あれ？ 大山君？ 何してるの？ 学校此方じゃないよ？」
「月川!？」

雫が何故か先にいて学校をサボっていた。

休憩しているのか、軽く汗ばんでいた。

建築材の上に腰かけて空を眺めていた。

制服姿の彼女は、数日大変なことになっているようだ知っているのか聞いてきた。

鍊太郎は、問いには答えずサボって雫こそ、何しているのだと問う。

「ただの練習だよ。ガイアメモリの」

学校をサボり、秘密の特訓をしていたらしい。

いわく、ここは雫の縄張り。学校に行かないで前から此処によくいると。

「わたし、スキルアウトだからね。不良って言われるけど、単純に集まってお喋りしてい

るだけの穏健派なんだ。そんな警戒しないで。恩人に酷いことは死んでもしないから」

スキルアウトと聞いて、身構える彼に彼女は朗らかに言った。

明らかに以前よりもリラックスしている自然体の笑顔。

あんな狂暴なバカと一緒にされたくはない。ここは、雫の居場所。

故に、その場所を犯すものを今は許さないと言った。

「知っているのも、スキルアウトの知り合いが教えてくれたの。大山君が、他の人たちに

襲われているって。だから、恩返ししたいと思つて特訓したんだ。言つてもダメだつて聞いている。どうやら……早速成果を見せるときが来たみたいだね」

言っている最中に、背後から物騒な連中が現れる。

雫が、嫌そうにガーゼを取り替えながら言つた。

武装した他のスキルアウトや一般学生か。ついてきたようだった。

ざつと見ても20はいる。

「冗談だろ……」

昨日よりも増えていたのに愕然とする鍊太郎。

但し、今回は此方にも味方がいた。

「はあ……。何日もわたしの恩人追い回して……。迷惑つて言葉を知らないのかな」

ぼやくように、雫が建築材から飛び降りる。

微かに怒気を放つて、不愉快そうに前に出る。

「月川……お前」

「良いよ。ここは、わたしがやってみる。やりたくないけど、しつこいなら仕方無い」
乗り気じゃないが、向こうが鬪争を選ぶのならば相手するしかあるまい。

よく見れば、雫の手には絆創膏や真新しい傷が増えていた。

ぼろぼろの瘡に、彼女は出ていけと一度言うが当然無視。

武器を構えていた相手に。

「わたしの居場所に土足で入らないで」

ハッキリと怒りを見せた。そして。

——ウオーター！

青いガイアメモリを取り出して、構える。

高まる緊張感。黙って見ている錬太郎。

任せろと言う、月川雫とチンピラの戦いが、幕開けする……。

解説。

ウオーターガイアメモリ。

水の記憶を内包する、錬太郎初の専用制作したガイアメモリ。

使用者は月川雫。彼女の要望により、制作されたため実質彼女のみ使用可能。

元々雫は無能力者の『水流使い』であるため、扱いは比較的速く習得している。その効力とは果たして……。解説終了。

ドーパントの力

兄が学校に居ない。

その話を聞いたとき、二人は頭が真っ白になった。

何処に行った？ なぜ消えた？ 助けに行く。

エリートで通る大能力者が、突然のサボりを決行したのはこれが初めて。

何も言わずに、妹は風紀委員の腕章を腕につけた。

姉は落ち着けと言う教師を無理矢理退かした。

そのまま、学校から脱走。探しに向かつてしまった。

ここ最近、下らない噂が流れているのを耳にした。

多才能力の無能力者が居るらしい。そんな噂だ。

そして、それが事実だと判明したとき。学園都市の生徒は敵対した。

有り得ない筈の幻の能力者。それが生まれつき備わった異常な学生。

何より、それはどうやら他人にも渡すことができる。

即ち誰でも上を目指せる。誰でも強くなれる。

そういう意味になるのだから、当然学校の勉強などでレベルが上がるとは思っていない半分諦めたようなレベルの低い生徒が暴徒化。

彼を狙い初めて本人が通報して対処を願っていた。

当然杠も柳も黙っていない。家族を狙うろくでなしを片っ端からブツ飛ばして捕まえた。

周りですら思わず制止するほど過剰に、狂うように、避けられている家族に尽くした。寄るなど言われているのに、そんな酷いことを言うのになぜ助ける。

そう、聞かれた。

「兄さんは外の人間なんですよ。あたしたちみたいに、この街には適応してない……外側の人間なんです。だから、ああ言われて当然だった。そう思ってます」

柳は言った。学園都市の常識は外からすれば既に異常。

学園都市は科学が進むが治安は悪い。その異常過ぎる日常に慣れている学生は気にしない。

だが、外から来た人間はここはスラムのようだと後で比較的日の浅い学生から聞く。詰まりは、彼は別段おかしなことは言っていないかった。

ここがあまりにも突出して危険な街なだけで。外はもつと、安心して、安全に暮らせるのだ。

だから警察だけで事足りる。警備員も風紀委員などの有志も不必要。レベルが全て？ バカを言うな。外じやそれは立派な差別。

見下すのは当たり前？ 自分は優秀な人間だから？

バカを言うな。何時から柳はナルシストになった。

周囲がそうなら自分もそうなる。郷に入ればなんとやら。

知らず知らずに学園都市の認識に彼女の見識は変えられていた。

兄からすれば拒絶反応もする。客観的に考えれば、あまりにおかしなことを言っている。

なぜレベルだけが基準になる？ その人間はレベルだけなのか？

大能力者は基本的には羨ましいと言われる立場。それを自負するから堂々としていた。

優秀なのだと思うっていたから、それが態度に出ていたのだ。

下の有象無象など、取るに足らない無能力者。意味なんかない愚かな存在。

スキルアウトなどその例だ。バカをするしか芸がないあんぼんたん。

処罰して然るべき。風紀委員に入隊したのも自分が優秀だと見せつけるためだった。

決して、崇高な目的とか、街の為とか。そんなんじゃない。

自分が合法に、弱者に能力を行使するのが楽しかった。正義と言う大義名分を手に入れている。

幼稚な遊びをするように、その行為を正当化して楽しんでいたので。

スキルアウトと何が違う。スキルアウトをなぜ責められる。

やっていることが違うだけ。救えた人が居ただけ。

スキルアウトが一般人を襲うのと感覚は変わらなかつたくせに！

(あたしは……狂っていたんですね)

快楽に酔っていた。正当化出来る自分の能力を他者に見せつけるために、風紀委員をやっていた。

拙い自尊心を満たす為にやっていた。

柳は後輩とは違う。知り合いの中学生、白井とは根本が異なる。

彼女のように街の平和を守ると気合いを入れて、時には同じ規律違反をしても。

柳は面白がっていたのだ。スキルアウトや無法者をブツ飛ばす自分の行為を。

だから兄は言った。人殺しと何が違うと。面白がって暴力を振るう人間の何が正義と。

嫌われても、当たり前前の行為を行っていたのだと、気付いた。

スキルアウトは人間のクズ。罵倒して見下して何が悪い。全部に決まっている。

人間として最悪の行為。無意味に貶す差別を、疑問に思わないのは学園都市の風潮だからだった。

外からくれば嫌がる。なぜ、そんな事すら……想像できなかったんだ。高校二年にもなつて。

(お兄ちゃん、無事で居てください……!!)

けど、今度は違う。

もう、傲慢は捨てる。

自分は大能力者である前にまだ子供。

こんなちっぽけなプライドを満たすために行つていた風紀委員の役目も。

今度こそ、正しい事に使う。まずは家族を守ろう。

正しく、自分の能力『氷結操作』を使つて。

姉は、もっと単純だった。

「お姉ちゃんは弟君を守るのが役目なんだよ!! 義理でも何でもお姉ちゃんはお姉ちゃんなんだよ!!」

意味が分からない。理屈にならない理屈。

姉だから守るのが使命。姉だから弟に手を出す輩は焼き尽くす。

ダメだこの姉、早く行かせないと。教師すら灰にする。

ブラコンが骨の髄まで浸透している杠。

シスコンも含めるとただの過剰な愛情だ。溺愛しているというか。

そういう人間で、そもそも大能力者になったのも双子の妹が上がるならお姉ちゃんは負けてはいけないとかいう意味不明な理由だったぐらいだ。

何時か弟が来たら学園都市で結婚するんだとか、義理の姉弟は結婚できるんだするんだとか基本的に最早恋愛の類いにすら昇華されている。

杠にも見下すのに明確な理由などない。

そういう空気に染められて自然とそうなった。故に悪意もない。

然し弟は言った。差別するな。じゃあ止める。見下すのも気を付ける。

正義も言わない。自分の能力をかさに偉そうにしない。そう決めた。

杠はシンプルで、頭が良いが性格と人格に問題のある典型的な上位の能力者。

大なり小なり、上位の能力者は個性的と言うか、悪い意味で言えば目立つような問題のある奴も多い。

某空間移動の能力者は一名に対する変態的行為の数々。

電撃最強の中学生は最強の序列の中ではマトモと言われるがやはり弱者の気持ちに鈍かった。

最強は言うまでもない。外で言える、本当の普通が存在しないのが能力者とも言えるのだ。

杠は極端な家族優先。特に長女としての行動を己の意思で率先して選ぶ。

柳も家族に対する溺愛は強く、他人よりも家族を攻撃されると我を忘れる。

姉妹もこんな風に大能力者として、人格が未成熟のまま強大な能力を持つてしまった。

イビツなものも仕方無い。高校生に軍隊レベルの戦力を平気で持たせるのが学園都市。

言ってしまうえば、学園都市が普通じゃない。常人の生きていける場所じゃない。

それを知るのには闇の底に蠢く何かとか、あるいは外の何かと戦う誰かとか。

悲しいけれど、彼が望む平穏や日常と言うのは、学園都市には前提で存在しないのかもしれない。

力を渴望する弱者。力に溺れて傲る強者。その対極しかない世界の普通とはなんだ？

少なくとも、杠は知らない。弱い人間の気持ちなんか想像したことすらない。

自分が弱い頃？ 最初からトントン拍子でレベルがあつたので覚えていない。

そういう稀にいるような、要領の良さもあつて、杠は特に鈍感だった。

そんななか、出てきてしまった力をもて余す弱者という半端者。

無論、弱者も強者も目障りなその中途半端は狙われる。

だが、最も悪かったのは。

彼女たちが懸命に助けに向かつても……間に合わなかったことだった。

——ウオーター！

そのガイアメモリは青い。

化石のような武骨なガイアメモリではなく。

クリスタルのように純度の高い透明な青。

言うなれば、鉱石のような美しい外見で、絵柄はウオータークラウン。

落ちた水滴が、王冠のように見える模様だった。それが、Wを示す。

「大山君には、近付けさせない」

それを、張り替えたばかりのガーゼをわざわざ剥がして突き刺す。

背後にいた、鍊太郎は見えた。ガーゼの奥には、ケロイドがあつたのだ。

「!?」

顔に、大きな火傷の跡があった。

爛れてしまった右の頬。そこには彼女の顔には不釣り合いの傷跡が見えた。

あれは、隠すためだったのか。本来の傷ではなく。

分からなかった。最近負ったばかりの傷とばかり。

顔に火傷など人間は早々しない。それこそ、頬になど。

理由は分からないが、少なくともやはり雫は迫害されているサイドの無能力者。

確信した。突き刺したガイアメモリは取り込まれ、彼女を変貌させる。

大量の水を自らの身体から放ち、渦を巻いて変異する。

頭部には青い水滴のクラウンの意匠が象る。

大きなダークブルーの複眼と、スーツのように纏う漆黒の体躯。

その上に鎧のように装甲が現れる。

最低限の装甲で機動性を重視したような、黒と青のドーパントが現れた。

胸部も水色のクラウンの形になり、手にも漆黒のトライデントのような槍を構えてい

た。

「誰から倒されたい？ 手加減できないから、逃げてくれるのが一番嬉しいよ」

去ってくれば後追いつかない。いや、居なくなれ。

トライデントの切っ先を向けて、雫は……いや、ウォータードーパントは告げる。

その真ん中の刃には、何やらスロットがついている。

丁度、ガイアメモリがすっぽり入りそうな大きさと形の。

それに気がつく鍊太郎だが、連中は生意氣とウォータードーパントに一齐に飛びかかる。

変異したのも鍊太郎の能力だと思い込み、事実そうだが然しこの場合は先ずは警戒すべきだった。

「迷惑だから、帰って。二度と来ないで」

鉄パイプやらナイフやらで武装した一般生徒やスキルアウト。

弱いながら、放電やら発火やらで能力を使う能力者。

そう言った面々を、ウォータードーパントは一閃。

トライデントを大きく凧いで、発生した濁流が一面を飲み込んだ。

宛ら津波だ。大きな水の壁が、前方を見上げるほどの高さにまで立ち上がり、流す。

悲鳴をあげて流される。唾然とする鍊太郎。なんだあのパワーは。

自衛の次元を超えていた。想定以上の強さに言葉を失い、立ち尽くす。

一撃で全員流して出口に運搬。で、フェードアウト。

一部が上等だと泳いで抵抗する。流れるプールよりも遥かに速い濁流に逆らって服

を着たまま。

「うわあ……」

雫も、ドン引きだった。折角無傷で終わらせようとしているのに、まだ抵抗する。

然し、雫は油断していた。その一部に乗じて、立ち尽くす鍊太郎の近く。

数名のスキルアウトが、ナイフをもって走ってきていた。

「益々欲しいよなあ、多才能力ツ!! 女に守られてねえで早く寄越せつてんだよオツ!!」

スキルアウトの典型的なチンピラの台詞を吐き捨て、殺そうとして来た。

振り返る鍊太郎。そこには若干の驚きと、大半の苛立ちが浮かぶ。

油断していた雫が駆け寄る前に、接近するスキルアウト。

立っている鍊太郎は、鬱陶しいように口を開いた。

「……五月蠅いんだよ、お前らは。そんなに欲しいならくれてやる。堪えられたらな」

既に鍊太郎も構えていた。

持っていたのは銀色の装飾のガイアメモリ。

雫のとも違う、白銀の色合いだった。

「俺に欲しがるな。お前らにくれてやる義理はねえんだよクソ野郎共」

持っていたガイアメモリには、球体の中に入っているBの文字。

その記憶を呼び覚ます。

——バリア!

そう名乗ったガイアメモリは、覚醒した途端に鍊太郎の姿を歪めていく。人から変形、縮み、曲がり、膨れて捻れて、形を変える。

刹那の世界で、変貌する鍊太郎。飛びかかった彼らが見たのは。

「奪うって発想をどうにかしろ、このチンピラッ!!」

大きなシールドだった。

楕円形で、真ん中にはBという形に刻まれた白銀の大きなシールド。

ナイフを突き刺そうとしていたスキルアウトの一撃を吹き飛ばした。

仰け反って地面に転がるスキルアウト数名。衝撃が拡散して全員に襲った。

で、同じくガタンと墜落するシールド。

「大山君!」

慌てて変異を解いた雫が駆け寄り持ち上げた。

見た目以上に軽い。裏側には手を嵌める部分もあった。

取り敢えず自立できないようなので、装備する。

「あれ、バリアドーパントって自分で戦えないの!? シールドになってんじゃん!」

効果が見えないガイアメモリがある。

変身するまでどんなものかそもそも分からない。

混乱する鍊太郎こと、シールドドーパント。

起き上がるスキルアウトに、まだやるのかと溜め息をついた雫は、追い払うことにした。

解説。

ウオータードーパント。

月川雫が変異したドーパント。

全体的にクラウンなどの絵柄に似た模様や意匠が多く、トライデントを使用する。

主に大量の水の操作に長けるが、これはどうも特訓で使用できるようになっただけ。

所謂ウオータードーパントの能力は未だに発揮できていないが、これでもう上位の能力者とはある程度は渡り合える。

本領発揮には経験を積みつつ、雫が慣れていかないとまだ不可能と思われる。

然し、初期の時点で本来他のドーパントにはないスロットがついている事も特徴。

戦いは好まない雫であるが、敵対してきた者には遠慮なく追い払う。

但し、殺すなどの明確な敵意があつた場合は、戦争に発展する。

バリアドーパント。

大山鍊太郎がバリアガイアメモリにより変異したドーパント。

楕円形で、真ん中にBの文字が刻まれた白銀の大きなシールド。

バリアという割りにはシールドであり、攻撃を流動して拡散する防御機構を持つ。

あくまで飛び道具などを受けた場合に受け流すだけであり、物理的攻撃はバリアで軽減して受け止める。

見えないフィールドを常時展開しており、真つ向から立ち向かう場合は幻想をぶち殺すしかない程無駄に堅牢。

受け流す方向も適当であり下手すると被害が拡大する。

尚、自立できないタイプで要は武器としてのドーパントである。

因みにこいつも文字の間に二つのスロットが設けられている。

スロットの意味は……言うまでもないだろう。

解説終了。

加入、スキルアウト

その白銀の大きなシールドは、腕を庇うには十分な大きさがある。持ち上げるように拾い上げた雫は、睨み付ける。

先ほど、押し流した連中も変異を解いたことで水流が途切れてずぶ濡れになりつつ戻ってきた。

この寒い外でも、敵意は失うことがない。寧ろ余計に悪化したか。

「このガキ……調子に乗りやがって……!!」

吹っ飛んだ一人が呻きながら起き上がる。

戦意は一向に減らない。ある程度強大なパワーを見せてビビって逃げたのか数自体は減っている。

それでも、武装した人数は10は超えている。

雫とバリアドールパントになった鍊太郎では、一見すると不利に見える。

「退けつて言うのが理解できねえのか。次は容赦しねえぞお前ら」

雫が牽制する前に、本人が言葉を発した。

怒り狂う、我慢を強いられた被害者の声。

やり方を自重しない、彼を羨望と嫉妬で焦がす弱者に対してハッキリと言った。

「いい加減にしろつて言ってるんだよこのボケ。頭の中までレベル0とか言わねえよな？」

「あんだとっ!?!」

幸い重火器を持っているような物騒な連中はいない。

それでも、能力を使い遠距離攻撃が可能な相手もいる。

なのに、バリアード・パントは怯まない。

挑発するように、本音をぶちまける。

「常識がねえのかつて言ってるんだ。いきなり武器なんぞ持ち出して脅迫しようなんざ、やるのがガキなんだよ。ちゃんと常識学んでから顔出せ。それすら出来ねえなら今すぐ帰れ。じゃないと本気でぶつ殺す」

「デメエ……!!」

気に入らないなら力づく。そういう発想が野蠻で迷惑と言っている。

なのに言っても相変わらず聞かない。逆上する。聞く気がないと、雫は言った。

「……無理だよ大山君。こう言う人はね、自分が気に入らない展開になると直ぐに癩癩を起こすような人間だからさ。言うだけ無駄だし、本当に大怪我させておく? ……わたしは、やりたくないけど。相手が武器持つてるなら、過剰防衛になるかな」

哀れむように言うと、益々怒り狂う相手方。

そもそもなぜ、彼女だけ渡していると聞くと呆れたようにバリアドーパントは教えた。

「バカか。どこの世界に脅して追いかける奴に渡す人間がいるんだ。お前らは金を寄越せて自分よりも強い能力者に言われて素直に渡すのか? それならいいぜ? 俺も渡してやるよ。代わりに先ずは大能力者に脅されて笑顔で金を渡せよ? 無抵抗で、本心からな」

暗に自分のやっていることを棚上げしないでほざけと糾弾。

詰まりは、雫はそれ以外の方法で受け取った。そういう意味なのだ。

願望のみで行動するようなスキルアウトや無能力者と一緒にするなと彼は言う。

「うるせえよ! つべこべ言わずに渡さねえと、こつちも本気で」

「殺せると思ってるのか。この俺を? おい、身の程知らずも大概にしろよ。誰を相手していると思ってるんだ?」

あまりにも相手が退かないので、とうとう鍊太郎も脅しもダメなら学園都市の流儀で

対応する。

突然、冷えた声色で落ち着いたように口調を変えた。

「大山君……?」

「まったくよお、どいつもこいつも俺を侮っているんじゃないか?　なあ、月川。教えてやれ、お前が本当は何なのか」

「……」

「どうやら、戦いを避けたいのか脅しのやり方を変えたようだ。」

「雫もすぐに分かったので、歩調を合わせる。」

「……わたしは、ただのレベル0だよ。一応能力はあるけど、なんにも起こせない単なる底辺」

「嘘を言うな!!　じゃあさっきのあれはなんだってんだよ!?!」

「一人が責める。一閃で大半の相手を押し流す水流を起す無能力者がどこにいる。矛盾しているという指摘は当然分かっていた。」

「だからだつてこと。わたしは『水流使い』っていう、水流操作の完全上位互換……だつたんだよ。レベルが低すぎて、何もできないけど。でも本来は、水の操作に関して特化したそこそこ珍しい能力なの。習ったでしょ?」

「雫は彼を構えながら言った。ハイドロコントロール。そう、彼女は呼ばれていた。」

意識するのみで周囲の水分を自在に操る水流操作の上位互換。

最悪風呂場でも能力を使える、ハズのモノだった。現実レベル0。

名前だけで、努力したって成長しない悲しいものだった。

授業でも習う、ありふれた水に関する能力者の中では特化した一芸があったのに。

素質はあっても開花しない。それが、月川雫の能力だった。

「わたしは前提が操るだけならそれなりに意味があるんだって。自覚ないし実感もない。そうだよ、レベル0なもの。……けど、見たでしよう？ あれが、大山君の能力

……『星の記憶』。擬似的な多才能力と言われる、所以。わたしは大山君に救われたのだから、敵対なんか絶対しない。するぐらいならもう一回死ぬ」

最低限の素質があれば、あれ程のパワーを引き出せる。

どんなに弱くても、強くなれる。夢のような能力。

だが。

「でも、これは魔法じゃないから。結局副作用が……あるんだよ。無視できない、重大な欠点だ」

でつち上げ開始。以前あった似たような話から抜粋して付け加える。

視線を落として、悲痛そうな顔に意識して変えて、仕方無いと言うように。

本人は黙っているが、雫は体験者として言える立場。

上手い話には代償は付き物。そういう感じに仕立てあげる。

「代償……?」

「うん。これ、麻薬なんだよ。一種の。使う度におかしくなっていくけど、本当にいいの? わたしみたいに、こんなになるよ?」

恩人のためなら、自分の身体だって使ってやる。

怪訝そうにする彼らに、制服の袖を捲って腕を見せた。

……おぞましい肌をしていた。

縫合のあとだらけだった。夥しい傷跡が、彼女の細腕には刻まれている。

見えていない錬太郎は分からないが、見ていた彼らは息を呑んだ。

「分かる? 大山君の能力を使うことは、劇薬を体内に入れるのと同じ。ポロポロに内部も外部もなっていく覚悟があるんだよね? 最後には、死ぬ。脳死になって、学園都市の医療技術でも助からないぐらい、自分が壊れていく。精神もおかしくなる。結局頭が真っ先にやられるから当然だとしても。今まで何人か渡した人いるけど、その時は副作用は分からなかった。わたしが初めて、この間暴走したので判明したんだ。でも、スゴいよね学園都市。あそこまで大怪我したのにもう傷跡になったのは、流石って言うべきかな」

ペラペラ嘘を言っている雫は、袖を戻して聞いた。

以前あった、あの聞く麻薬よりも遥かに危険だけど、本当に良いのかと。

意識不明程度じや終わらない。壊れていく自覚すらないまま、死ぬまでガイアメモリを依存して使う。

理性が失われていき、正気を失い、認識が判別できなくなつて、病院から出られなくなる。

一気に死ぬる訳がない。毒はゆっくりじっくり、身体を侵食していく。

その恐怖に、堪えられるのか？ と、問う。

「気持ちいいよ、自分がおかしくなっていくのは。わたし、スキルアウトなの。誰も心配しないから、死ぬときはの垂れ死ぬと思う。変死体になつて、無縁仏行きも悪くないと自分じゃあ思つてるんだけど、どう？ 大山君の能力は、毒のある多才能力。麻薬中毒になりたい？ わたしはオススメしない。今はいいけど、夜になると……正気失つて暴れちゃうの。下手したら人殺しだつてするかも……」

「そういうこつた。俺の能力をほしいんだらう？ まさか、何にも支払いをしないで使えとか思つてねえよな？ 甘くねえんだよ、幻の能力者は。それでも良いなら、一時の夢を見せてやつてもいいぜ。但し、死ぬときは勝手に死ぬ。俺は知らん。くたばることも、受け入れてから騒ぐんだな」

雫の肌を分らない鍊太郎は、便乗しておく。

連中は勝手に戦慄していた。事の重大さを漸く理解したようだ。因みに、と雫は付け加える。

「大山君はこの範疇にないの。毒を持つ生き物は自分の毒じや早々死なないのは知っていると思うけど、大山君はリスク無しで使用できる事を忘れないでほしいな」

「俺だけ例外で多才能力に近いってことだ。まあ、あくまで作るのが本命なんで、俺自身は無能力者扱いだがな。やろうと思えば、この場で全員一方的に皆殺しに出来るが……試してみるか？」

ハツタリだ、こんなもの。

皆殺しにできるかどうかなど、知らないし試すつもりもない。

だが、コイツらも所詮は底辺の同類。

数さえいれば勝ると侮るようなら、こういう脅しでもしないと意味がない。

何せ相手は幻の能力者。存在しないと言われた多才能力。

そんなのが、殺すと脅せば大人しくすると……思っていたのだが。

「上等だぜツ……！ 元よりリスクなしじゃあ手に入ることはないと思ってた！ 説明ありがとうよ！ お陰さまで、腹も括ったぜ畜生！ やってやらあ!! 殺せるもんなら殺してみろよ多才能力！ 尚更欲しいってもんだぜ!!」

(ダメだこりや……)

全員、覚悟を決めてしまった。

追い払う算段が相手の腹も括った準備を手伝ってしまったようだった。逆効果。武器を構え、ならばその幻の能力を見せてみると叫ぶ。

死ぬ覚悟がないと思っていたのか。そんな次元はとづくに通過しているのだ。

命懸け上等。奪うしかやり方が思い付かないらしい彼らは頭の中まで本当にレベル0。

そこは穩便に済ませるなどとは思わない。

鬱憤の溜まっている底辺の共食い。やり方は暴力が真っ先に思い付くような集団。救いようがない。鍊太郎の感覚ではさっぱり理解できなかった。

喋っているうちに、バリアドーパントの能力が少し分かった。

雫が時間稼ぎをしてくれたのでその間に分かる範囲を手探りで調べた。

基本的には、シールドのような防具に近い。

バリアを展開して、攻撃を拡散、流動させる。

直接の場合は衝撃を緩和して受け止める。暴発すると、さつきみたいになるようだが。

見えないバリアとはまた珍妙な。しかも、このドーパントにもスロットがある。

しかも、二つ。文字の間の空間に蓋をされていた。

ここにどうやら、ガイアメモリを装填すると見た。

折角相手が覚悟を決めた。じゃあ、実験台になってもらおう。

「良く言ったな。良いだろう、なら洗礼を与えてやる。……月川、ガイアメモリを俺に入れてくれ」

「えっ?」

偉そうに言えばこういう手合いには、少なくとも侮られることがない。

と、思った鍊太郎。実際は自分が嫌う奴等と大差がないのが、悲しい。

突然言われた雫。然し完全に信じている彼女は言われた通り、ボタンを押してシールドの前面の上のスロットが開いていたので差し込む。

すると。

——ウオーター! マキシマムドライブ!!

「へっ……?」

マキシマム……ドライブ?

何そのどう聞いても最大出力。

呆ける雫。然し、シールドの前では近辺の大気中にある水分が凝縮されて、圧縮されて、眼前に丸く集まっていた。

巨大な水球になったそれは、見ていた全員が呆気にとられるほどのサイズに成長。

不思議と重さを感じない雫は、どうするべきか迷う。

これをぶつけるのか。どう見ても死にそうだけど。

「だから言っただろ、俺を侮っているってな。月川、良いよ。やっちゃえ」

「う、うん……」

本人も大変驚いていたが、毅然とした態度で攻撃を指示。

構えたシールドから、勢い良く水球は発射され、慌てて逃げ惑う彼等の背中に直撃して、破裂。

再度の激流になり、皆を押し流して数秒後にはその場には誰も居なくなっていた。

戸惑ってた雫も、その火力には絶句していた。

「月川、悪かったな。猿芝居に付き合ってもらって」

「気にしないで。適当なことを言っただけだし」

追いかけてきたバカが居なくなっただけで、変異を解いた鍊太郎は鎮座する建築材に腰かけた。

朗らかに笑う雫は、少し距離をあけて座った。

「これで少しは懲りてくれればいいけど」

「……無理じゃない？ 学園都市はそんなに甘くないよ。大山君が思っている以上に、レベル0のああいう感情は根本にあるんだ。言って素直に理解できるほど、叩かれて言

うことを聞けるほど、この場所は優しくない」

妙に実感が籠っている声で雫は教える。

簡単な問題じゃない。絶対にこのあたも続くと断言する。

「警備員も、風紀委員も宛にはならないよ。あの集団は個人は守らない。秩序を守るだけの存在を過信してもしつぺ返しを受けちやう」

「頼れる大人は居ないのかよ……」

ガツクリ項垂れる錬太郎。じゃあ、誰を頼ればいいのか。

自衛するしかないのか。こんなストレススマックスで胃痛がお友達になりそうな生活をしろと？

そんな空気を感じて、雫は言いにくそうに一瞬迷うが、恩人の窮地を黙っているほど彼女は薄情じゃない。

思いきって、彼に提案してみた。

「お、大山君！ スキルアウトに入る!! わたしのいるスキルアウト!」

「俺に不良になれと言うのか!?!」

同じチームにお誘いしてみた。

案の定不良と言われるが、そんなひどいことはしていない。

必死に弁解する雫。

主に雫のいるスキルアウトは、夜遊びとサボりがメインでありモットーは、無関係な他人に迷惑をかけない。

故にスキルアウトのなかでは大人しいどころか目立たない、地味な集団であった。

一般的なスキルアウトみたいなことはしないと。

雫は言った。味方になる。みんな雫の仲間であり、既に錬太郎の事を雫を通じて知っている。

「ここもスキルアウトの縄張り……というか仲間の親が経営する場所。許可は貰ってあるのだ。」

「い、一緒にいれば庇えるよ！ それに、学校よりも楽しいし安全だと思うー！」

「……いや、然し……」

もう学校も敵しかいない。それも事実。

四六時中狙われるよりも、いつそ逃げてしまえと言う雫の言い分。

それでも世間体があるので迷う錬太郎。魅力的ではあるが、猜疑心がある。

一生懸命に説得し、何やらその頃遠くでサイレンの音も聞こえた。

警備員と風紀委員のお出ましのようだった。

「あつ、そう言えば予め教えておいたんだった」

「変なところで律儀だね!? それじゃ大山君も補導されちゃうよ!？」

「俺も!？」

暴れたことで恐らくはご同行と言われて、被害者であつても遠慮がないのが連中。頼りにならないくせに、こう言うときだけ偉そうにするようだ。

「と、兎に角逃げなきや！」

「おう！ 取り敢えず、月川の事を信じる！ スキルアウトでも何でもいいこの際！」

バタバタしている二人。慌てて逃げ出した。

やましいことはしてないが、向こうが判断するかは別の話。

学校も外もダメ。あの二つは全ては護れない。

だったら、のうスキルアウトしかない。大人しくするならそれでいい。

平穩さえあれば。平和でさえあれば。

雫のお誘いに、最後は鍊太郎も了承した。

五人ほどの集まりらしいが、今はそこにご厄介になることにして、現場から二人は隠れて逃走したのだった……。

(ほおー？ あれが、つつきーの言う無能力者の多才能力の人ねえ……)

(ガイアメモリ？ 地球の記憶？ なにそれ分かんない)

(モーリッツが見る限り、本当に外の人な訳か……。怪しい部分もないし)

(……モーリッツが強能力者って、あの人知らないか。つつきー言っていないみたいだし)

(まあ、でも……つつきーのこと間接的に救ったわけじゃんこの人。何も知らないみたいだけ)

(んー……信じてもいいんだろうけど、モーリッツ的には男は信じたくない。仲間以外)
(自己紹介しろ？ つつきー、この人本当に大丈夫なんだよね……?)

「はじめまして、大山先輩。アーウエント・モーリッツ・ヴェルデイって言います。モーリッツで良いわよ」

解説。

コックローチガイアメモリ。

皆様ご存知ゴキブリの記憶を内包した例のあれ。

無駄に高性能、無駄に量産性が高い見た目以外は完璧なガイアメモリ。

「ゴキブリは速くて当然。しぶとくて当然。キッチンの黒き旋風は伊達じゃない。いいね？」

コックローチドーパント。

ゴキブリ。ゴキブリが人間になったドーパント。

超高速で学園都市を駆け回る害虫。手のひらから粘性の液体を飛ばす。

この早さは学園都市のビリビリもビツクリ、気持ち悪くて即座に攻撃するレベル。

尚、殺虫剤に弱いと言う致命的な弱点あり。あと、外見が生理的に嫌悪するので女子に嫌われる。

アーウエント・モーリッツ・ヴェルデイ、及び大山鍊太郎が使用する。片方は女の子……あれ？

解説終了。

風紀委員とスキルアウトに囲まれて

(何でなのですかッ!! 納得がいきません……!)

それは、助けに向かった翌日に起きた。

学校を脱走してでも助けに行ったのに到着後にはもぬけの殻。

水浸しの地面と、水流の残が残っていただけだった。

おかしい。兄が自分で連絡したのに、なぜいない。

結局周囲を搜索して、加害者と思われる連中を捕まえ、連行した。

事情を吐かせると、どうも同じ学校のスキルアウトと一緒にいたらしい。

風紀委員の権力で調べた。外見から割り出したデータベースに、その名前はあった。

(月川雫……? 過去、傷害の被害に四回、恐喝に七回、殺人未遂に……三回!?)

ドーパントに変身したらしい相手は、同い年の月川雫という生徒。

なんと彼女、過去に凄惨ないじめにあっていた被害者だったのだ。

見ているだけで恐ろしい。警備員にも顔を知られているスキルアウトのようだ。それは、悪い意味ではない。同情される意味だ。

彼女はスキルアウトでありながら、逆に一般生徒に陰湿ないじめを長年受けていた。内容は酷いものだ。大抵が能力を悪用した人殺し未遂。

柳は目を疑った。なぜ、こんなものが罷り通る。

彼女は幼少より、学園都市に暮らしているレベル0。

親はなく、捨て子のようなモノで、施設育ちだった。

その頃より、既にいじめは始まっており、小学校に入る頃には目に見えていた。だが、彼女は珍しい才能こそあつたが開花せずに教師はことなかれで無視した。

学園都市の悪習、レベルのみを優背する方針のせいだ。

最初の事件は、プールに能力を使って突き落とされて、挙げ句に溺れさせられた。

子供の遊びで彼女の訴えは聞かれずに加害者の能力者は無罪放免。

溺死寸前まで追い込まれて、結局自力で命からがら脱出した。

二度目はもっと酷い。高所から落とされて落下。

一週間、意識不明の重体。これも能力者は無罪放免で、寧ろ雫が悪者扱いされていた。

三度目は……柳は思わず目を見開いた。

(空間移動能力者による、首の血管を切断……?)

テレポーターと呼ばれる能力者に、首もとにガラスの欠片を転移させられ血管が切断。

その前に利き腕を同じ方法で潰されており、拷問を受けていたそうだと彼女はこの時中学生。

高いレベルの能力者と低いレベルの能力者が混在する学校の放課後に起きた、殺人未遂。

幸い、当時の風紀委員がいじめの現場に遭遇、今度ばかりは見逃さずに全員引っ捕らえた。

その時ですら、加害者は雫が悪いと主張したが、無論これ程行けば通らない。

そいつらは全員、更正施設にぶちこまれ、流石に二度と帰ってきていないようだ。

そういう風に風紀委員が訴えて、学校側にそうさせていた。

雫は高名な医者にかかって、何とか一命こそ繋いだが数ヶ月生死の境をさま迷って生還。

その頃にスキルアウトに堕ちたと記されている。

テレポーターが転移した物質は送られた座標の物体を押し退ける。

この場合、ガラスの欠片を体内に直接送られた雫は、一生消えない傷ができたことになる。

首の傷は名医が治療したが、腕の傷は敢えて残したという。雫の希望で。最新の報告のある事件は……。

(去年ですか。高校一年の夏に、同級生の発火能力者に右頬を焼かれ、大ケガを負っている……)

レベル2程度の有象無象が、彼女のいじめに参加して、皆で取り押さえて嫌がる雫の顔を焼いた。

今の学校の前。彼女も、現在の学校には転入している。

その時の傷も彼女が望んでガーゼで隠しているが、残っている。

その他細かい被害は数えきれないほど受けていた。

更に……。

(これって……白井? 何でこの人の所に白井の名前が……?)

後輩の知っている名前があった。以前に関わりがあった模様。

然しこれはデリケートな問題になりそうな予感がある。少なくとも柳は口出ししたくない。

見なかったこととしていこうと、ここは触れないでおいた。

その彼女は今の学校でも相変わらずいじめを受けていたが、兄が転入する頃に激変。なんと、反撃して加害者全員を病院送りにしたようだ。

その時は逃げてしまっており、怪我をしたバカが何か言っていたが後日別の警備員が処罰していた。

前科があつたと聞いているが、本当にどうしようもない。

その時にはドーパントに変身したように書かれている。つまり、鍊太郎がガイアメモリを渡したのだ。

なぜ？　とも思うがそこはいい。雫の状態も悲惨としか言えない。

問題は、その雫と鍊太郎が協力して連中を追い払ったこと。

気に入らない。スキルアウトと一緒にいる兄の判断が。

(どうして、家族を頼ってくれないのですか……!?!　赤の他人のほうが、あたしたちよりも信用できると言いたいんですかお兄ちゃんは!!)

風紀委員は仮にも秩序を守る組織。

確かに不純な動機で続けた。

然し、一応でも正式な組織よりもスキルアウトを優先するのか。

どうして、家族を頼ってくれないのか。そこまで嫌われているというのか。

(落ち込みますよお兄ちゃん……。あたしはそこまでバカじゃないのに……。お姉ちゃんなんか、こうなっているんですよ……。?)

因みに此処は、柳の配属されている支部。

同じ学校の姉は翌日に何事か教師に聞かれて家族の窮地だったと素直に謝罪して説明。

素行のよい姉と柳はレベル4だけあって、お咎めも無しに許された。

まあ、それ以前に杠の場合はブラコンが認知されているので納得されたに過ぎないが。

同席している杠は現在。

「お姉ちゃんはもうダメです……。弟君に嫌われるお姉ちゃんは、いつそスキルアウトになります……」

「杠先輩、無理です。ご自分のレベルを考えてください」

後輩の風紀委員に、ツツコミを受けていた。

然し、こんなことはしてられない。

最早猶予などない。直ぐに行動を起こすべきだと思う柳。

「お姉ちゃん、帰ったら身支度してください。もう、あたしたちも手段を選ばません」

「……んえ？」

情けない顔でソファアに埋もれる姉を、パソコンを落とした柳は言った。

スキルアウトと居る。気に食わないが、兄が決めたら否定はできない。

きつと、兄のことをその雫という人物は理解しているんだろう。

だから、命懸けで彼を助けたと信じたい。スキルアウトだとしても可
だけど、プライベートは家族が守る。それが、姉妹の役目だ。

「無理矢理でもお兄ちゃんの家に行きます！ 仕方無いでしょう、こんなことになれば
！ 四の五の言えた状況じゃないんです！」

思わず外行き呼び方を忘れて姉に叫ぶ。

家族一緒に住めばいい。義理でも姉妹だ、問題などない。多分。

学校には説明しておく。納得しないなら納得させる。

兎に角、柳は杠に怒鳴った。

鍊太郎の部屋に行くから準備しろと。

優等生を舐めてはいけない。その気になれば、学生寮を許可を得て出ていくことも可
能なのだ。

何せ正式な理由になる。家族がスキルアウトに狙われているので一緒に暮らす。

相手は無能力者。方便にはなるだろう。なので、建前はある。

本音？ ただの焼きもち。ブラコンは自分以外を頼られると嫉妬する。

「そ、そうだった！ お姉ちゃんは弟君を守らなきゃ！ 落ち込んでいる場合じゃない
！」

立ち直りが早いことで。流石は重度のブラコン。

見事に復活した溺愛の姉と共に。

姉妹は行動を起こす。彼の自宅へ、許可を貰ってレッツゴー！

鍊太郎は自分の部屋にいた。

あのあと、ブタに変身して雫にお散歩されるペットのような感じで誤魔化して逃げた。

注目されまくったが必要経費で我慢した。

学園都市の非常識でも、人間がブタになるといような例外は少ない。

おかげで、何とかギリギリ戻ってこれた。

驚いたのは、雫の部屋と鍊太郎の部屋は意外と近く、鍊太郎はアパートで雫は近所の別のアパートだった。

鍊太郎の部屋はシンプル。入り口入って証明に部屋が広がり、直ぐ隣にはキッチンが小さくついている。

家具は大抵中古の安物で、トイレと風呂は別だが小さい。ベランダも一応ある。ワンルームであり、室内もあまり広くはない。

そこに、戻つてくるときに雫が呼んでいた仲間とやらが夜になる頃に集合していた。

野郎三人、女子二人。のち一人が雫。

招いた鍊太郎は軽く夕飯を振る舞うと、意外と皆は友好的だった。

スキルアウトと聞いてチンピラと思つていたが、初対面とは思えないほど野郎三人はフレンドリーだった。

それぞれ、ハゲの巨漢が毒島、細いホステスみたいな優男が鈴木、老けているような髭面が上原という。

毒島は大学生、鈴木と上原は高校生であつた。

唯一の後輩は、なんと海外の学生。

「はじめまして、大山先輩。アーウエント・モーリッツ・ヴェルデイつて言います。モーリッツで良いわよ」

長いプラチナブロンドの髪の毛が目立つ、美少女と言うか。

顔立ちの目鼻立ちが整いすぎて一瞬等身大の人形かと鍊太郎は思った。

癖のあるプラチナブロンドも綺麗だが、よく動くエメラルドに似た瞳は印象的だ。

制服も有名な高校の派手なブレザーにロングスカート。

然し小柄だった。下手すると妹よりも小さい。柳はそんなに発育のよい方じゃない。……モーリッツと呼べと言うこの女の子は、成長期とはいえ、将来はあるだろうか？

「おい、誰の体型と背丈が小学生だ。悪かったわね合法ロリで。攻略する？ モーリッツ的にはお断り」

「リッツ、落ち着いて……。顔に書いてあっても言わない方が……」

鍊太郎は顔に出ているらしい。不機嫌そうな顔でモーリッツに言われた。

そもそも高校の一年生はギリギリ違法ロリである。手出し厳禁。

雫がリッツと愛称を呼び、モーリッツもつつきーと呼ぶ辺り、相当仲良しなのだろう。取り敢えず鍊太郎は謝っておいた。

「人を外見で判断するのはいけないんじゃないの先輩。そんなんじゃない、学園都市でやってはいけないよ」

「忠告が痛み入るな。さつき痛感したぜ」

毒島、鈴木と上原はスキルアウトとして仲間入りを認めているが、モーリッツは何やら警戒している。

これが、当然だと思う。普通、事情を聞いても厄介者を受け入れるとは思えない。

何せ、鍊太郎は噂の多才能力と思われているようだし。

「参ったもんだ。おかげでどこいっても襲われて、生きた心地がしねえよ……」

などと、もう安心したのか愚痴り始める鍊太郎。かなり精神的に疲れていた。

もういつそ、家から出なければ平和かと思わずこぼすが。

「そりやどうか、先輩。つつきーが言い訳しても、そんな簡単に諦めがつくような生徒じゃないんだな、学園都市の最底辺は。モーリッツ的に、先輩の平穩は無いわね。家に居ればぶつ壊して入ってくる」

「単なる強盗じゃねえか!？」

「聞く限りは先輩にはそれだけの価値があるんさ。モーリッツですら、そう思う。下手するとマジで命ないよ?」

鍊太郎の存在は強盗をしてでも手に入れたと思わせ、確実に動かないなら襲ってくる。

逃げ回るか、最低でも抗えとモーリッツや雫、野郎も口を揃える。

夕飯を食べ終えて、相談をしている彼にモーリッツは腕組みして教えた。

「先輩、自分で言ったけど身内に風紀委員いるつしよ? 家に居るときは一緒にいなよ。家族なら説得できるでしょ?」

「あいつらの見識が直つてればな。発想が向こうも大差ねえんだけど」

モーリッツはズバズバとモノを言う。

まるで、此方の悩みを見抜いてるように。

知った情報からの確に言うので会話も楽でよかった。

「風紀委員はそんなもんだよ。つつきも不細工もホステスもヒゲも、風紀委員嫌いだしね」

「風紀委員好きなスキルアウトは居ないと思うよ?」

「モーリッツ的にも風紀委員は無いわ。あれは天敵だから」

それぞれアダ名で呼ぶモーリッツは、鍊太郎に的確にアドバイスしてはくれる。

警戒しているようで、若干刺々しいのを感じた。

「先輩の場合はああだこうだつて言えないじゃん。まずは日々生き残ること。このままエスカレートしていけばその内ガチで命懸けになると見た。モーリッツの予感が外れられれば万々歳なんだけど、多分無理」

「嫌な予言するなよな……」

遠慮ない指摘に、然し有難い。

分かりやすく、どうすればいいか教えてくれる。

モーリッツは良い奴な気がしてきた。

参考になると、素直に聞けたのはモーリッツの可愛い割りに毒舌だからか。

買顔に出ていると、モーリッツに耳打ちされた雫が笑いながら言った。

慌てて表情を引き締める。

「モーリッツは可愛いんですー。つつきー程じゃないけどさ」

「絶対リッツの方が可愛いよ、うん。わたしじゃ勝てないって」

「謙遜しないのつつきー。モーリッツ的につつきーは最高よ」

「ええ……？」

本当に仲良しで、何だかじゃれあいを見ていて飽きない。

野郎三人もスキルアウトにも色々あるから、好きにしていこうといってくれた。

取り敢えず、先ずは不用意に学校に行くのを止める。

準備してから、行くべし。鍊太郎は皆のアドバイスを考え、過ごしていく事にした

……。

人物解説。

アーウエント・モーリッツ・ヴェルデイ。

本作品オリジナルヒロイン。スキルアウトのメンバーの後輩。

一応こう見えてレベル3の能力者。但し理由あつてスキルアウトに墮ちている。学校もそこそ良い環境だがモーリッツは行きたくない様子。

数少ない、能力者でありながらスキルアウトを好んで生活している変人。

スキルアウトの仲間が一番大事であり、新入りの鍊太郎はまだ信用していない。

口癖はモーリッツ的に。使用するガイアメモリはゴキブリや公害などの量産品。

因みに喧嘩などは結構強い。流石にそげぶには勝てないが、女の子にしては上々らしい。

解説終了。

姉妹たちの押し掛け

翌日から、意味もなく学校に行くのを先ずは止めた。

敵襲しかない学校生活は危険だと、高校の教師にも言っておきたい。

なので、雫が代わりに向かって、職員室で鍊太郎と通話して、変わった教師に直接事情を伝える。

不登校になります。申し訳ないのですが連中が大人しくなるまで暫く身を隠します。

そう、自分で言った。教師たちは学校での襲撃も所詮は子供同士と思っていたが今回は別。

集団でランチされそうになったと、警備員から一報が入っていたようだ。

自分達もこれ程に膨れ上がると庇うのは無理と諦め、申し出を受理。

授業などは隙を見て取りにくれば纏めて書類を渡してやると、保身半分事情を察して半分で許してくれた。

（先生たちは汚いよ……。大山君が襲われても知らん顔していたくせに、警備員から何か言われれば形だけの対策を取る。卑怯すぎるって、思えるのはわたしの気のせい？）
スキルアウトが預かるとは言わない。言えば尚更五月蠅い。

この保身的な対応に、先の雫の撃退も含まれるので思うことはあるがなにも言わない。

どうせ、雫の事も気にしないで放置をしていた集団だ。

外も中も、きつとこの大人の対応は変わらないだろう。

そういうのが、学園都市の大人と言うものであり、信じるに値しない。

学園都市の科学者も教師も風紀委員も警備員も、全部信用したら苦しむ。

雫は知っているから黙って去る。雫には教師もなにも言わない。

そんなもんだ。都合の悪い雫のことなど、スキルアウトの仲間と錬太郎以外が、誰が心配してくれる。

（大山君は特別なんだ。わたしを救ってくれた、特別な外の人。学園都市に染まっていない、貴重な人。わたしに出来ることは、しなきゃ。恩人だもの。戦う、力をくれた……無力なわたしに、光をくれた人……）

友情というのは、雫はあまり分らない。モーリッツは親友を通り越して仲間。

この掃き溜めみたいな学園都市で一緒に生きていける仲間。スキルアウトの彼らは

雫の全て。

それすら擲って死のうとしたこともある。知っても皆は責めなかった。終わりたければ、終わっていい。終焉の希望は奪わない。

風紀委員のような傲慢さで、痛みを知らない無神経な正義感もない。

彼らは雫の行動を肯定してくれる。だから、安心できる。

(風紀委員は万人の秩序を守ればいい。わたしに関わって、来なければ)

雫は風紀委員が大嫌いだ。スキルアウトだからではなく、個人的に。

ああいう自分勝手な正義と学園都市に洗脳された常識を振りかざす連中など死ねばいい。

消えてなくなれいつも思う。警備員もそうだ。塵になって二度と雫に関わるなど感じる。

下らない。その手で救える範囲が狭いくせに、何を偉そうにスキルアウトに語ると言うか。

雫はそういう人種も嫌い。正義感を押し付けて、何も分からないくせに正論を語る輩も。

正しいから救う。守りたいから守る。勝手に言っている。雫はそんなもの求めない。求めていない余計な世話をして誇る鬱陶しい輩。そういう奴ほど後ろにいる誰かの

顔を見ないから。

そんなのを何度か経験している。あの風紀委員然り、あの男子高校生然り。

（わたしは仲間がいる。スキルアウトは、支えあうから頑張れる。こんな腐った学園都市の底でも）

勝手に授業中でも出入りして、好きに動く。それが、雫の生活。

他人の都合なんかもう知らない。夢も希望もないスキルアウトには、現実のみが残る。

授業は受けても無駄だった。何年も空しい努力だけを続けて知ったのは強者の悪意だけ。

諦めてしまえばいい。レベル0はレベル0。種など芽生えることはもうないと、高校生になれば悟れる。

伊達に幼少からこの地獄で生きてはいない。誰よりも雫は現実を知っている。

憧れは色褪せた。欲しかったのは未来じゃない。安全。それだけでいい。

強いたげられる立場の雫にはそれが一番欲しかった。

だから、錬太郎の能力を貰ったときは嬉しかった。

もう、苦しまないで生きていける。能力者に怯えないで過ごせる。

結果として、強大な力を授かった。でもそれを誰かに自分から振るうなんてカッコ悪

い。

身を守る銃を強盗に使うようなものだ。本末転倒。それは、送り主の鍊太郎への冒瀆と裏切り。

雫は誓った。自分と仲間と居場所の為にしか使わない。

他人が死のうが苦しもうが振るわない。矮小な雫に他者を手を伸ばす義理はない。

弱者が利口に生きていくには、大人しくしていること。それだと信じている。降りかかる火の粉は吹き飛ばせ。迫り来る悪意は押し流せ。

鍊太郎も、そう言っている。自分勝手な人間しか学園都市には居ない。

そう、彼女は思う。紛れもない、事実として……。

一方、自宅の鍊太郎は。

襲撃を受けていた。

「お兄ちゃんの家に着です。お姉ちゃん、お兄ちゃんと一緒に荷物を搬入してください」

「了解ッ！ 弟君と同棲なんだよー♪」

「同棲じゃねえよ色ボケ枉」

「お姉ちゃんの事だけ酷くないッ!?!」

義理の姉妹が押し掛けてきた。

先の騒ぎを聞いて、モーリッツの言う通り本当に来てしまった。

頼んでもいないのに、このブラコン姉妹は……。

権力を無駄遣いして、特定したらしい。

余計なお節介とは言えないが筋は通したようで、正式な許可を自分の学校から貰っている。

証明書まで持ってきた。傲慢気に見せる枉に、頭痛を覚える鍊太郎。

追いつ返す訳にもいれないが、三人で暮らすには手狭すぎる。

が、気にしないと姉妹は言って、勝手に荷物を搬入。

慣れない独り暮らしよりも、家族水入らずで暗そうと言われる。

尚、スキルアウトに加入したことも調べがついていると柳は言った。

「安心してください。レツテルで連行したりなどしません。お兄ちゃんに叱られて目が覚めました。お礼を、言わないといけませんから」

「そうだよ!! 弟君を守ってくれた月川さんという人にはお姉ちゃんは感謝しかないんだよ!」

因みにあの騒ぎの後で二人も駆けつけたと言うし、その前のあれこれも躍起になっていたそうだ。

裏方で、二人は彼の為に尽力した。それを言われて、益々追い返せない。

「酷いこと言つて、悪かった。柳も、枉も」

知らない間に、家族に迷惑をかけていた。

雫がああ場ででつち上げも言ったことも聴取で聞き取りをしていた。

副作用などまだ分からない。釘を差すという意味では有効かもしれないが、逆効果にもなり得る。

慎重にしていけと二人は言った。

「分かった。肝に命じる」

鍊太郎も、その辺は定住してそこそこになる皆に従おうと思う。

兎に角荷物を入れていくと、ふと柳は言った。

くれぐれも、一部の風紀委員には近寄るなど。

一部の風紀委員には柳で言う杠のように、外部の協力者がいる。

そういう連中は基本的に、学校の校則以外では縛られることが少ないので能力を率先してスキルアウトに使う。

手出しはしなと思うが、危険なのが何人か居るので注意しろと。

「特に、常磐台の超電磁砲には近寄らない方がいいです。あいつは学園都市の上から三番目の怪物ですから、スキルアウト相手じゃ話なんか聞きません。見かけたら直ぐに逃げてください。感電死します」

柳は、ある一名を例題に言った。常磐台中学と言う超のお嬢様学校に通う化け物。

学園都市の最上位、超能力者というレベル5の規格外の一人。

電撃を使う能力者では間違いなく最強だが、同時にスキルアウトには恐らく聞く耳持たず。

一部じゃレベル5は人格の破綻した人間しか居ないと言われてさえいる。

レールガン。そんな通り名の中学生が、風紀委員の味方にいるらしい。

「聞いた話じゃ、一部では英雄扱いされていますが、素行はあり得ません。自販機を蹴飛ばして破壊している、知り合いかはいえ一般学生に怒って電撃を浴びせる、一度でも敵対すると誰であろうが超電磁砲をぶちこんで周囲を巻き込み派手に破壊する、なぜか分

裂したように授業中なのに外で見かけられる……。噂はいくつもありますが、どれもこれも常識外ですよ。レベル5の中では、比較的マシな分類とよく聞きますが、それです。後は空を走って飛ぶ序列七位、そもそもこの誰か分からない都市伝説の六位、同じく常磐台に通う最高の精神系能力者の五位、めちやくちや美人で凛々しいそうです。めちやくちやおつかかないという四位、二位は詳細は不明で一位は最近小さい子供をつれ回すロリコンだとか言いますし……」

「大丈夫か学園都市……」

風紀委員に聞こえてくる話ですらこれらしい。

ろくな人材が居ない気がするのには鍊太郎の気のせいかな？

それが秩序を維持する組織に手伝いをすると言うが、お前が先ず秩序を守れと言いたくなる。

特に自販機を蹴飛ばして破壊しているとかやっていることがスキルアウトと同じだった。

「お姉ちゃんは実際会ったことあるけど、普通の子だよ。御坂さんって言うんだけどね、弟君みたいな多才能力みたいなモノなんだって」

「違いますよ。あれは、ただの電撃使い。汎用性が他に比べて広いだけです。お姉ちゃんは直ぐにお兄ちゃんと比べて……。別枠ですよ別枠。ガイアメモリとは全く違いま

すし、そもそもガイアメモリは道具。お兄ちゃんは精製能力が主だったものだって言っ
たじゃないですか」

「そだっけ？」

顔を知っている杠は、御坂というその超電磁砲の能力者は、普通と言っていた。

この極度のブラコンの姉が言うのは信用できないと思うのは何故だろうか？

取り敢えず、その風紀委員などには近寄らないことと言ってから、危険人物という意
味でまだ一人。

「あとは、アーウエント・モーリッツ・ヴェルディ。この人物も気を付けてください」

「……はいっ？」

「……今、何て言った？ モーリッツ？」

鍊太郎は思わず聞き返す。なぜあの後輩の名前が出てくる？

「知り合いですか？」

「いや、顔知ってる。ってか、俺助けてくれるスキルアウトの一人」

「……………」

柳はマジか、という表情になった。驚きが浮かぶ。

「モーリッツが何だっけ？」

「いえ、風変わりな学生でして。何がしたいのか、風紀委員も理解できないんですよ彼

女

変人で予測できない事をしそうで、怪しい。

柳は風紀委員も、警備員も警戒している学生と教えた。

雫は何も言つてなかつたが……もしかしたら言いたくないのかもしれない。

と、好意的に錬太郎は解釈した。

「彼女……アーウエント・モーリッツ・ヴェルデイは、一応私立長谷川高校のいう所の同系統の能力者が通う学校の最もレベルの高いレベル3なんですよ。スキルアウトは大抵レベル0なのですが、彼女は色々なスキルアウトのチームに混ざっては、手助けしている能力者でしてね。スキルアウトの方の味方と聞いています。何度も警備員と風紀委員とは揉め事を起こしているんです。特に彼女が何かした訳ではなく、あくまでスキルアウトに情報を流す形で手伝っていた……そんな感じですよ」

スキルアウトに情報を流しては、またフラリと消えていく。

スキルアウトの間じや情報を求める場合は、モーリッツもよく頼られているとか。

それでいて、一般学生にもコネクションがあり、一般学生も時々助けているようでもある。

彼女は連行されるようなことはしない。その情報を知ったスキルアウトがバカをす

情報と言えど、大したモノじゃなくどこに誰がいて、どんなことをしているかとか、簡単なものだけ。

決して機密を取り扱うなどの情報を持っているわけでもない。

自分も一般学生の癖にスキルアウトの生活を好んで続ける、そんな変人。故に何がしたいのか、理解できない。

「へー……」

「お兄ちゃんも、彼女が何をしたいのか分からないと思いますが、まあ今ですので言いませんが悪人じゃないですよ。小物ですけど」

柳も随分と好き勝手に言っている。

能力は精神感应。テレパスと呼ばれる受信専用で相手の思考を聞くらしい。

苦勞しそうな能力だった。

「弟君もそういう子は、どう付き合うかは考えてね？　危なくなったらお姉ちゃんに何時でも言うんだよ。焦がすから」

「おい、自重しろその怪獣」

杠は悪くは言わないが、信じるかどうかは自分で決めると言っていた。

詰まり、一方的に思考を聞かれることを踏まえて、という事であると後で彼は知ったのだった。

そんなこんなで、風紀委員の味方も無事に鍊太郎の部屋に住み着いた。当然、スキルアウトと科学反応を起こすのは言うまでもなかった……。

人物解説。

大山杠。

本作品オリジナルヒロイン。変態の粹。

鍊太郎の義理の姉であり、同い年。再婚した際に姉になった母の連れてきた娘。高校入学に合わせて学園都市に住んでいる。

とにかく性格に問題があり、ブラコンとシスコンの極めつけのような人物。家族に対する溺愛が激しく、頭は良いが中身はバカ。挙げ句変態。

鍊太郎と結婚するのは自分だと本気で思っているので、色々な意味で危険。実際義理の姉であるので可能らしく、異性として既に彼を意識している。

お姉ちゃんであることを常に意識しているので意外と何でもできる。そもそもなにか言われると喜んで行う。

但し焼き餅が激しいので、怒らせると面倒臭い。あと無視しても拗ねる。

これでも大能力者。能力は発火能力。

大して珍しくもない炎を起こす能力だが、レベル4故に過剰な威力で全身何処でも発火できる。

特に得意技は口から火炎を特訓して鍛えた肺活量で一気に吐き出す。通り名は怪獣。

広範囲、射程も長く幅もあり、その辺の道路の道幅程度ならば覆い隠せる。

温度も怒ると上昇し青白くなる場合もあつたりする。

双子の姉であり妹の柳はもう少し自制心がある。

関係ないが外見の成長は姉のほうがずっとよいとのこと。

解説終了。

女子たちの流れ

こうして、鍊太郎は家族と再び生活を始めた。

二人は俗に言う、エリートエリートの学校に通っているらしい。

学校に行かない、いや行けない鍊太郎は見送りながら朝を過ごす。

日中は暇なものだ。不登校とは即ち時間が余る。

適当に雫と野郎三人と駄弁駄弁つて昼食昼食つて帰つて家族が戻るのを待つ。

部屋にいと、どうも監視監視をしているの輩輩が居るようで、警備員警備員が連行連行しているのを見た。

そもそも連絡が来た。ストーカーストーカーがいるといふのでおちおち部屋にも居られない。

なので外出しては時間を潰す。

殆ど遊んでいるのと大差無い。というか遊んでいた。

遊んでいても案の定バレれば襲つてきた。慌てて逃げたが。

モーリッツは普段居ないらしく、別行動で出歩いていると聞いた。

「風紀委員が……居るんだ」

雫はどこか嫌そうに、話を聞いて呟いた。

妹が風紀委員であり、向こうは反省して偏見はないと言うけれど。

雫は信じていない様子だった。

「リッツには嘘は通じないよ」

「それは、モーリッツが精神感応だからか」

そう聞くと、やっぱり知ったかと彼らは表情を変えた。

黙っていた、と言うことになる。

理由を鍊太郎が訊ねる。すると、雫が答えた。

「リッツは知られたくないんだよ。自分が精神感応だつてこと。出来れば黙つててくれって、お願いされちゃつてて」

「……事情は分かつてるよ。苦勞しそうな能力だと思ふしな」

昼間、適当に入ったファーストフードの店でハンバーガーを皆で食べて、窓際の席に座った鍊太郎は言った。

皆、私服になっており、一見するとスキルアウトには見えない程度には外見には気に使っていた。

ジャンパーを着ている雫は頬のガーゼをなぞりながら、言う。

「分かってくれるんだね、精神感応の気持ちの事……」

「それなりにはな。受信専用だつて言うじゃねえか。詰まりは、心の盗聴。近くにいる人間は溜まつたもんじゃない」

一方的に考えている思考を読み取られてしまう。

外から来た人間からすれば思考の自由さえ奪う恐ろしい能力と言える。

悪いのは、それが傍目には使っているかいけないかの判断ができない。

疑心暗鬼、それすら読み取るのが精神感応の能力なのだ。

無論それは人間関係におけるズルいことをしている。そう思われても仕方無いのだ。

同時にプライバシーも何も無い。敬遠されても相手が悪いと、果たして言えるだろうか。

予防手段も、聞く限りは自前では用意しにくいようだし。

「リッツの学校は、長谷川高校つて言うんだけど……その先生は、精神の能力者に対応して、電磁バリアつていう装置を持つてるの。ピアスとかネックレスとかである、微弱な電磁場を発する装置なんだ」

彼女が言うには、精神系統の能力者は知らぬ間に干渉されて操られる可能性がある。

それを防ぐために、電磁場を用いたバリアのような物を常備しているという。

結局精神に干渉するのも物理的。それを防げれば、腕つぶしの弱い連中は大したことはない。

そういう類いに対抗する手段があるのは、流石は学園都市と言うことから。故に傍に居ても大丈夫。心配がないと分かるから。

「それがあるよね、精神系統の能力者は何もできなくなる。物理的に弱いから、精神感応みたいなモノは」

苦笑する雫は、気を悪くしないでほしいと頼んでくる。

モーリッツなりの世渡りなのだというが、一応でもレベル3。

皆は気にしないのか聞くと。

「しないよ。仲間だもん」

一同、しないと即答。疑いを持ってば、精神系統の能力者を誰も信用できなくなる。

だから、仲間内では隠し事はしない。……錬太郎を除いて。

「除け者にした訳じゃないよ。ただ……リッツも、辛いことあったから」

「……分かった。詳しく聞かないことにする」

それほどまでに、知られたくない。そう言うことか。

ただ、錬太郎も言った。自分の思考を読み取るのもやめてほしい。

これでも、感覚は外側。プライベートなどの事もあるので勘弁願えないかと。

「初対面の時はどうも読み取つたらしいからな。顔に書いてあるで誤魔化したようだけ
ど」

「バレちゃつてる……よね。ごめんなさい」

雫も皆も謝つた。疑つていたのだと、知られば良い気分にはなるまい。

ポテトを摘まむ雫は、それだけ言つて欲しいと言うので了承してから窓の外を見る。
行き交う人々をどこか冷めたブルーの瞳で見ている。

「話が脱線した。で、俺の身内は成り行きで一緒に暮らしている」

戻すと、風紀委員の妹は雫にお礼を言いたいが、雫は拒否。

気にすることじゃない。仲間だから庇うのも助けるのも当然だと断言する。

ただ、家族として礼を言うなら聞いてもいいと、妥協する。

「あくまで、大山君のご家族としてなら聞くよ。風紀委員の立場を一切出さないなら」

暗に調べたであろう事も口に出さないという条件なら同席しても良い。

姉も手伝いをしている立場を出さないと約束するならば、顔を見せると。

野郎三人も、腕組みして頷く。モーリッツには雫が携帯で連絡。

『風紀委員？ ああ、先輩の身内の？ 雛菊女学院の怪物と氷柱姉妹ね。別に良いよ

モーリッツ的には。嫌がらせしないなら、って条件だけどさ』

と、返答が来た。雛菊女学院というのは二人の通う女子高。

レベル4などのレベルの高い能力者のみで構成されているエリート高校。

その怪獣と氷柱と言うのが通り名の姉妹が二人のようだ。

柳の言う通り、色々知っている。渡り歩いたのは伊達じゃないか。

「妹さんから聞いていることは、何も言わないで。リッツはそういうの、凄く気にしちゃうから」

「オツケー。あいつらに關しては大丈夫だ。俺が言えば黙る。何故なら根つからのブラコンの姉と妹だ。自慢じゃないが、昔から溺愛され過ぎて死にそうだけ」

刹那、鍊太郎の目からハイライトが消えた。

皆は思う。極度の溺愛が招く男一人の息苦しさ。

共に生活するのは恐らく苦行なのだ、直ぐに察してくれたのは……幸いだったかもしれない。

で、その日の夜。

鍊太郎の部屋に総勢8名、押し込まれていた。

ワンルームには狭い。荷物も増えたし、折り畳み式ベッドもあるから尚更。

先に戻ってきていた姉妹は、歓迎すると張り切っていた。特に姉。

「今回はお姉ちゃんの奢りです!! 死ぬほど食べてくださいー!」

姉が張り切つて夕飯を買いまくつたせいで、中央に置かれたテーブルの上にはオードブルが鎮座する。

大きな皿も持ち込んで、何なら泊まっていけとか言つて寝袋まで持つてきている。

気前良すぎてドン引きだった。

各々好き勝手に座っているが、スキルアウトの皆は唾然としていた。

本当に姉も妹も友好的で、モーリッツも開口一番。

「敵意がまるでねえ!」

と、姉に向かって叫ぶぐらいだった。疑り深いのが、全然無いので寧ろ驚いた。

軽蔑も見下しも、全然ない。とのこと。

鍊太郎に知られたことも、一応伝えたがモーリッツは苦虫を噛み潰すような顔で仕方無いと諦めたようだ。

それよりも、モーリッツは杠が怖いらしく。

(な、なんて可愛い子……!!? なーちゃんと同じでちっちゃい! 可愛い! ぬいぐる

みたい抱き締めたいなあ……！)

「ひいつ!？」

恐怖の思考が流れてきた。欲望だらけのロリコンだった。

なーちゃん、つまりは柳の事だろうが恐ろしいことを考えている。

ヤバい、身の危険を感じる。慌てて雫の後ろに隠れた。

「や、やべーよつつきー……この人ロリコンだよ、マジもののロリコンだよ……！ モー
リツツ的に身震いを感じられずには居られないんだけど……」

「……」

雫が言葉を失い、柳が自重しろとたしなめた。

いつもの制服姿のモーリツツは、癖毛のプラチナブロンドが毛先から波打ったのを鍊太郎は見た。

皆は私服のまま、姉妹は何故か肩の露出したセーターとミニスカートときハイソックスという服装。

寒くて暖房をしているのに何で軽装なのかと呆れている鍊太郎。

じゆる、と物欲しそうに姉がヨダレを垂らしたようだ。

途端にビクツと過剰に反応するモーリツツ。

子供に怯える子猫のような可哀想な感じだ。

「枉。俺がぶん殴る前にその考えをやめろ。さもなければ礼を言えない口にするぞ」

「バイオレンスな事を言うのはダメだよ弟君。落ちて着こうね？」

「お前がまず落ち着け」

気配を察知した鍊太郎が殺気を放つと姉は素直に黙った。

流石はブラコンの犠牲者。手綱はしっかりと握っている。

ベッドに座った鍊太郎に、背凭れのように足元で寄りかかり座る柳が呆れていた。

「本当にすいません。こういうお姉ちゃんなので……。今は、あたしもお兄ちゃんの妹として、この場に居ますのでお気遣いなく」

ちやんと、自分の立場を理解して強調しておく。

言いたいことがあるなら好きに言ってくれという譲歩だった。

パクパク勝手に飯を食う野郎三人と違って、女子は空気が重たい。

聞けば野郎三人は、それほど重たい過去じやない。大抵ドロツプアウトしただけのようだ。

問題は雫とモーリッツ。二名は、結構重い人生を送ってきている。

故に、他人を警戒する。

「……まあ、今回は招いてもらったし。何かしてくる気配もないから、モーリッツ的には気にしないんだけど……」

「何かありますか、アーウエント・モーリッツ・ヴェルデイ？」

「フルネーム長いから、略して欲しいんだけどさ」

モーリッツは柳に対してはやはり思うことはある。

風紀委員の立場を出さなくても、大能力者としての立場がある。

格上の能力者。雫も、劣等感を感じてしまい俯いて黙ってしまふ。

長年刷り込まれた学園都市の常識が、こちら側の感情を圧迫する。

「レベル4は、信用できませんか。仕方ないとは思いますがね」

分かっていると、柳は肩を竦めてホットスナックをかじる兄を振り返り、見上げる。

自分とはあまりにも環境が違う。

本来であれば、関わりは避けるべきだと思うと腹を割って素直に彼女は言い出した。

「ただ、勘違いしないでください。あたしは、レベル4である以前に、大山柳という人間

です。人らしく接するなら、礼儀を通すのは当然でしょう？ 軽はずみな事は言いません

んが、お二人もあたしやお姉ちゃんを、能力者と見るのも控えて頂けると非常に助かり

ます。結局あたしは、お兄ちゃんの妹なので」

「そだよー。お姉ちゃんは別にそういうの、ダメって分かったからね。失礼な事をする

と、弟君に叱られるし。愛想尽かされたのかなったら、お姉ちゃん発狂する自信あるし」

「そのまましていろダメ姉」

「酷いんだよ弟君!!」

細かいことは互いに気にしないようにしないかという提案だった。

此方は個人的な人間として接するように心がける。

なのでスキルアウトも、レベルとか風紀委員とかの立場を気にしないでほしい。

無論何かあれば、その時は敵対する天敵同士だ。

然し、こんなときまで仲違いする必要はない。

何故なら鍊太郎の恩人に何かするほど、家族として無礼ではないから。

と、柳は騒いでいる姉と兄を無視して二人に聞く。

譲る部分があると、ハッキリと二人も分かった。

差別などしない。特にモーリッツは、思考を読んで聞いて嘘じゃないと理由も含めて

分かった。

ブラコンである柳は兄に叱られ反省している。嫌われるのはいや。

そういう理屈が見えていた。故に、信じるしかあるまい。物証があるのであれば。

「……そう。そつちがそう言うなら、モーリッツは良いよ。今ぐらいいは」

「リッツが言うなら信じるよ。ただ、忘れないで。わたしたちの事を、誰にも言わないこ

とが条件だから」

雫は最後まで頑なに退かないが妥協はした。

モーリッツも渋々認めると、姉妹に言った。

柳もそれでいいと、それ以上はなにも言わない。

「お兄ちゃんが本当にお世話になります。一応此方でもどうかしますが、ご迷惑をおかけします」

「……気にしないで。わたしたちは、仲間を守って生きていく。それだけの話だから」

柳と雫は、そんな風に話していた。

一方モーリッツと杠は……。

「はあ……はあ……もう我慢できない!! もーちゃんはぬいぐるみにする! お姉ちゃん
の二人目の妹にするんだよオツ!!」

「みぎやあああああ!? 頭の中まで全部変態ワードで埋め尽くさされているうっ!?
つつきー、先輩! 助けて! 変態に凌辱されちゃうよお!!」

部屋の隅っこで、小動物が変態に追い込まれていた。

涙を溜めたエメラルドが、怯えを隠せない。発情している変態杠。

抱き締めようと腕を広げて、迫っていた。

「モーリッツ。これ使え。飯の最中に使いたくはないが杠には効果覷面だぞ」

仕方無く、ガイアメモリを即席で精製。山なりに投げて手渡す。

放物線を描いて姉を越えて落ちてくるガイアメモリ。

それを見た柳が絶句し青ざめた。目線を追って雫も見た。描かれた……油虫を。

「もーちゃんの抱き心地はどんなのかなあ？ お姉ちゃん気になつて眠れないよ……ぐへへへへ」

「みぎやあああああああ!!」

野郎三人は飯に夢中で助けない。

優雅にコーヒを啜る鍊太郎は行動した。

柳は白目を剥いてバツタリ倒れて気絶した。

目を丸くする雫は呆然とした。

ピンチのモーリッツ、降つてきたガイアメモリをお守りのように迫る変態に見せつけた。

——コックローチ!

ボタンを押して威嚇。

コックローチ。即ちゴキブリ。

音を聞いた瞬間、杠も白目を剥いて突然気絶。

倒れて動かなくなつた。

「へっ……っ?」

恐々目を開けると死んでいる変態。

鍊太郎が、バカを見る目で教えてくれた。

その理由を……。

追記解説。

コックローチガイアメモリ。

ゴキブリの記憶は、姉妹にとっては悪夢の記憶。

一番最初に鍊太郎が作って変身したものがコックローチであり、そのグロテスクな外見に二人は多大な精神ダメージを受けている。

以降、ゴキブリが大の苦手な姉妹はコックローチガイアメモリを見るだけでトラウマになり、気絶する。

殺虫剤に弱い弱点もその際に半狂乱になった二人に叩き込まれたことが切っ掛けである。

解説終了。

すれ違い

彼らはこうして、日々を過ごす。

然し学園都市というのは、住んでいて退屈しないと、黒いツンツンとビリビリと悪党が言っている。

その通りで、事件は毎日起こっているもので。

今回の事件は、モーリッツ、雫、そして鍊太郎。

この三名のスキルアウトが、巻き添えを受けることになった……。

この日はモーリッツが学校でトラブルを起こしたらしい。

関わりたくない、風紀委員と。

雫が、連絡を受けて長谷川高校に迎えにいくから一緒に来てくれと頼んできた。

「び、ゴメンね……大山君。あの学校、わたし一人で近づくの、怖くて……」
精神系統の能力者しかいない学校だ。

過去に隠したいことを持つ雫には、精神に介入されたら溜まったものじゃない。
自衛の出来ない雫が怖がるのも納得できる。

モーリッツは友好関係が広く、一般生徒にも懇意にしている人物もいる。
スキルアウトから何でも例の中学生のいる学校から、先生まで幅広い。

モーリッツいわく、

「コネクションは持つておいて損はないわ。まっ、インスタントな広くて薄い関係なら
モーリッツ的には大得意だしね。人間は八方美人には弱いもんなのよ」

とのこと。精神感応を使った人心掌握術。

そんなところか。専門知識はないが、そんな真似事ぐらいはできると言う。

コツがあると言うが、そんなものはどうでもいい。

鍊太郎も、雫が心配なので共に行く。

情報源はそういう人脈と思うが、本当に何がしたいのか。

鍊太郎には、多分理解できないと思いつながら迎えに向かう。

一応制服を着て、トレンチコートにグラサンかけてマスクをする鍊太郎。完全な不審

者だった。

雫は制服にジャンパー、そしてマフラーをして毛糸の帽子を被って急ぎ足。

「リッツ、大丈夫かな……」

「心配しすぎると心労になるぜ。深呼吸して」

落ち着かせながら、バスなどを使い向かった。

座りながら、流れる町並みを眺めている雫。

今日も顔のガーゼは健在で、見た目が相変わらず痛々しい。

丁度放課後。姉妹には、揉めているから少し顔を出すと云っておいた。

柳が時間見つけて加勢するから、待つてゐるなら待つていてもいい。

最低でも後始末はすると言うので遠慮なく頼る。

別に家族に関しては何も嫌悪感を感じない。

反省してくれるとわかった以上は信じる。

下校時刻に合わせて乗車する生徒たち。

見慣れない制服に、無能力者と誇る声が聞こえた。

この辺はエリート学校のエリア。鍊太郎たちが近寄る場所じゃない。

モーリッツは世間的にはエリーートの仲間。雫はこれも踏まえて行きたくないと言つたみたいに見える。

軽蔑的な視線を感じる。弱者がここになんの用事だ、と言わんばかりの視線。

雫はとうとう俯いて黙ってしまふ。鍊太郎は最早開き直る。

因縁つけてきたら速攻で、柳にチクる。それをしろとも言われたし、最悪雛菊女学院の姉の名前を出してもいい。

身内にレベル0が居ることを知られても枉は気にしないと云った。

……そのレベル0が、連中が喉から手が出るほど欲しい星の記憶の相手なのだ。

柳は逆にバカにしたら即、説教を風紀委員として行おうと言いつ切るほど。

職権濫用にも程があるが、ブラコンなので気にしたら負けと言ふことで。

気にせずに、慣れてしまったのかペットボトルのコーヒーを飲みながら、バス停につくのを待った。

雫には何も言わない。言えない。彼女の心の傷は、鍊太郎がどうにか言える次元じゃない。

詳しくは知らないが、柳が言うには優しく接しろとのこと。

決して脅したり、怖がらせる真似はしないでくれと言われてしまった。

鍊太郎もバカじゃない。彼女がいい加減酷い迫害を受けているぐらいは気付いている。

頬の傷跡もそうだし、初対面でのあの怯えも、言動も。

鈍感にはなれそうにない。気付いていなければ、無意識で雫を傷つけるかもしれない。

鍊太郎は、モーリッツと雫にはなるべく意識して優しく接しようと心掛ける。雫に何を言えればいいのか、鍊太郎は分からない。

結局、彼女の傷に触れる資格が彼にはない。それが出来るのはモーリッツやスキルアウトの仲間だけ。

距離をちゃんと見よう。安易な言葉は刃にしかならないと思うから、彼は黙って待っていた……。

バス停に到着。長谷川高校前。

下校の生徒たちが乗ってくる前に、素早く降りる二人。知らぬ間に感知されたくないの、さっさと向かう。

数名、鍊太郎に気付いた。驚いて、トレンチコートの変質者を見返した。

……いや、あからさまに怪しいソイツを驚いたただけかも知れない。ともあれ、足早に現場を目指す。モーリッツが一報を入れた際に、裏口にいるのでそちらに急ぐ。

すると、何やら女子生徒同士の揉める声が聞こえた。

正門を迂回し、反対側を目指す。

大きな学校だが、至って外見は綺麗な印象しか受けられない普通の高校。

帰り道を逆に走る二人は、裏手の道路の方の歩道で二人に背を向けて口論する数名を発見。

腕には風紀委員の緑の腕章。成る程、多勢に無勢か。

わざと声を出して、鍊太郎は呼ぶ。

「モーリッツー！」

呼ばれて振り返ったプラチナブロンド。不機嫌な顔が一転、安堵したように綻ぶ。

バタバタ走って彼女も合流する。慌てて追いかける風紀委員の女子生徒。

「先輩、つつきー！」

「お待たせ……」

漸く味方がついたと、雫に飛び付くモーリッツ。

受け止める彼女も安心したように笑顔になった。

「ちよつと、話の途中で移動しないでくださいませ！」

妙なお嬢様言葉で、小柄な女の子がモーリッツにそう言った。

短いリボンで結んだ……ツォーテールの生徒。

制服は例の有名お嬢様中学の物の上に防寒具。

腕章をして、背後には数名違う学校の生徒もいた。

「……!!」

その顔を見た途端、雫が目を見開いた。

そしてその風紀委員も、気づいたのか明らかに渋い顔になった。

直ぐに雫の顔が変化した。鍊太郎も絶句する……猛烈な怒り。

「リッツに何の用なの、空間移動者ツ!!」

突然怒鳴り声をあげて、その少女に叫ぶ。

テレポーター……彼女の能力名か。

怒りを見せる彼女に、少女はなんと言うか……やりにくそうな顔をした。

躊躇いや後悔、そんな表情にも見える。

「……い……い……いつつきーの知り合いだったんだ！　じゃあ、あの時余計なこととして

つきー苦しめたのお前か！」

モーリッツも雫が居るからと、反撃に出た。

思考を読んだようで、何かを言う前に的確に相手の出鼻を挫く。

精神感応に、舌戦を挑むとこうなうのかと言うぐらい、一方的に言い負かされていた。ポカンとしている錬太郎。知り合いだったのか分からないが、取り敢えず背後の風紀委員に事情を聞いた。

すると、どうもモーリッツが風紀委員に対して何か宜しくないことを企てているというリークがあった。

で、事情を聞きに来たら本人が怒って話をしない。というか話にならない。

その代表が後ろの風紀委員。

揉めているのは心配してついでにきたそのツーター、名を白井黒子と言うらしい中学生。

「……はあ？ 確証あるのか？」

ただタレコミあっただけで押し掛けた来たのか？

証言だけで確証は無いとその風紀委員は戸惑って説明する。

白状するわけがないと分かっているのになぜ素直に来たと、逆に聞く。

「阿呆かお前ら……」。聞いて素直に答える精神系統の能力者がいると思うか？ 普通の人間だって答えねえよ。要するに任意の聴取に来たんだろ？ なら、嫌がるならとつとと退散しろ。せめてなあ、こういうのは物証持って、相手に反論を許さない程度には足

元を固めてから来た方が効率よくないか？」

曖昧な情報で動いて、白状しないなら叩き潰すつもりじゃ無かろうかと心底呆れて聞いた。

それで冤罪ならお得意の権力でどうにかする気かとグラサン越しに睨むと凄みがあつたのか、若干腰が引けていた。

相手を問い詰めるなら徹底的にやれと言いつつ、証拠がないなら先ずは調べろといった。

調べた結果なのかと言えはそうでもなく。取り敢えず本人に迫っていく方針だったらしい。

因みに黒子という彼女も止めろとは言つてたそう。聞けよ。

「……はあ」

研修していてこれだから、困るといふか。

コイツらも中学生。物事のやり方が杜撰すぎて笑えない。
溜め息しか出てこなかった。

「もういいよ。お前らじゃ話にならん。帰れ。違うやつを連れてこい」
鍊太郎はせめて、同年代を連れてこいと要求。

最低でも高校生。話が短絡的過ぎて相手の心証をまるで考慮しない。

「な、なんの権利があつて風紀委員に口出しするんですか!? スキルアウトの癖に!」
「風紀委員の前にお前らはただの子供だろうが。立場を出す前に、自分等のやつてる稚拙さを自覚しろ。それとも、何か?」

本当に、こういうことはしたくなどない。何がよくて自滅の方法をするのか。

だが、開き直れば威圧するという意味ではどうせ広まった悪名だ。モーリッツの為なら、多少は使う。

ゆつくりと、マスクとグラサンを外して笑顔を浮かべて問いかける。

「俺とやろうつていうのか? どうなつてもいいんだらうな?」

顔を見せて自信満々に告げる。丁度、その時。

誰かが彼に苦言を呈する。

「兄さん、はいストップ。後輩相手に凄まじいください。怖がつているでしょう?」

知っている声だった。振り返ると、そこには口論を止めた制服に腕章姿の柳がいた。

「なんだ、来たのか柳」

「来るつて先んじて言いました。まったく、先走つてあたしの仕事を増やしてくれて……」

溜め息まじりで、黒子と雫、モーリッツを取り敢えず離しておく。

未だに威嚇するモーリッツ、激しい怒りを見せる雫。柳も何かを知っているのか何も

言わない。

糾弾される彼女は、何も言い返さなかった。黙って、下を向いている。

兄と聞いて、風紀委員たちは思い出す。無能力者の多才能力。柳の兄がそう呼ばれていると。

一瞬で青ざめ、制止に來た妹に泣きそうな顔で寄っていく。

「落ち着いて下さい。とにかく、月川はもう戻って。モーリッツも構いません。今回は此方の不手際ですし、ご迷惑をおかけしました」

解散を命じる柳が手を叩いて帰れと皆に仕切って言った。

場を納めることに尽力するが、雫が嘔みついた。

「まだ、自分勝手な正義感を振りかざしているんだね、空間移動者」

「……違いますわ。わたくし、そんなつもりでは……」

俯いている彼女は弱々しく反論している。

自覚があるのか、あるいは悔いているのか。

兎も角、雫には一切悪くは言わない。

「嘘だ。こいつ、嘘言ってる。……先輩の前だし言わないけど、お前あの時、瞬間的に助けただけでしょ。何も考えてない。自分だって理解できてるから、責められても言い返すことはしたくない……。違う？」

精神感応に嘘は通じない。雫の言う通り容赦なく心境を暴露されて、黒子は悲痛な顔になった。

分かっている。自分の行動が、少なくとも雫には歓迎されず、寧ろ拒絶されていると。「……ふざけんな。そう言う、可哀想な生き物を見ているような同情が一番モーリッツ達は頭に来るのよ!! 理屈だけで知った気になる! 感情を言葉だけでわかつたつもりでいる! 何様のつもり!? 勝手なことで此方に介入して、好き勝手にモーリッツたちの希望をぶつ壊して、アフターフォローもしないで捨てていつて!! 救いを求める人間とそうじゃない人間の区別も出来ないわけ!? 出来ないなら風紀委員なんか辞めちゃえ!! お前みたいなのが、一番此方には辛い仕打ちする!! 反省するぐらいなら最初から救おうと思うな!! 責任負えないなら関わるな! そのまま、他の奴みたいに見捨てろ!! その方がよっぽどスキルアウトの為だつての! 安い正義感でモーリッツたちを惨めにしないでよ!! 救う相手の事情を少しは考えるこのあんぼんたん!!」

最後には泣き叫ぶように、怒鳴り散らすモーリッツ。
雫も、凄く辛そうな顔で立っていた。泣きそうな、苦しそうな。

黒子という彼女も、悔いているように見えた。浅はかな自分の行為を。

「……すみませんでしたわ。本当に、謝罪しか出来ませんが……」

「謝って済むかクソツタレ! 必要なのは謝罪でも反省でもないつて、自分で分かるな

らもう少し行動を考えろって言って……!!」

罵倒を続けるモーリッツに、不意に

上から、声がした。

「もーちゃん、言わないでいいよ。それ以上は、互いに傷つくだけ」

「黒子……迎えに来たわよ」

ドスンツ!! と突然上から姉が降ってきた。

両足で踏ん張って、誰か抱えて。

米俵みたいに抱えられていたのは、黒子同じ制服短い茶髪の……女の子?

「お姉ちゃん!? それに、御坂!! あんたは何で来るんですか!!」

驚く柳が、場違いな乱入に抗議するが無視される。

鍊太郎は唾然としていた。

土煙をあげて着地した姉は、大人びた表情で彼女を降ろした。

そして、モーリッツに話しかける。

「もーちゃん、もういいでしょ? 止めようよ、言つて悲しくなることは。月川さん

も、帰りたいなら帰ろう? 風紀委員の皆も、なーちゃんが指示したら早く戻るんだよ。

お仕事はまだまだあるから。御坂さん、白井さんとお願ひね」

「分かりました。……黒子、戻るわよ。ほら」

連れてきた女の子が、黒子の腕を掴んだ。

顔をあげた少女は痛みを堪えているような表情で。

モーリッツも、雫も、今にも泣き出しそう。

杠が乱入して、全員を分散するように言った。

良いから散れと命じる姉に、一同は戸惑いながらも従った。

だが、モーリッツは帰り際に、迎えの彼女を横目で見ていた。

「御坂……。もしかして、常盤台のミコチュー?」

モーリッツの言葉に、吹き出す鍊太郎。そして柳。

何を言い出すのかこの後輩は。

「ミコチュー!?!」

本人も大変驚いていた。酷い呼び名もあつたものである。

ぶはつと、柄にもなく雫まで盛大に涙と鼻水を飛ばしていた。

驚愕の表情で、本人……。御坂は、モーリッツを見た。

「あー……。御坂、それ長谷川高校でのあんたの通り名ですよ。有名ならしいです、常盤台の

ミコチュー」

「柳先輩、それどういう意味ですか!?!」

食って掛かる彼女に、柳は空気がぶち壊しと含み笑いをしながら語った。

街中でよく放電している姿がこの生徒には目撃されており、それが某有名な電気ネズミにそっくりらしい。

「ミコチュー……ミコチュー……」

鍊太郎も思わず笑いが漏れていた。

確かにあの不機嫌そうにビリビリ放電しているのは似ていても違和感はない。

腕組みして苛立っているのか、火花を散らしている。

あれが、柳が言っていた学園都市の上位三位の少女。

「おいそこ!! 私の渾名で笑うな!」

鍊太郎を指差して怒鳴る御坂。

結構怒っているがこれまた放電してるのが笑ってしまう。

「ああ、悪い悪い。親しみあっていいなこれ」

「あるかあ!! あんた私に喧嘩売ってんの!?!」

一応年上だが、なんか面白い子なので気にしない。

「バカにしてはないけど、杠の言う通り普通の学生だったな」

などと言いながら、文句を言う御坂に背を向ける。

待てと怒鳴っているが、これ以上居たら爆笑するのでさっさと帰る。

「じゃあな、ミコチュー。杠の事、頼む」

「訂正しろお!! 私を面白電気ネズミに扱うなごるああああ!!」

バチバチと怒っているのを杠が笑いながら止めていた。

そそくさと逃げ仰せ、辛い出来事でこの日は終わった。

これが彼女と彼の出会い。割りと、酷い出会いなのは言うまでもない……。

人物解説。

御坂御琴。

とある科学の超電磁砲の主人公。本作では今回初登場。

学園都市の序列三位の超能力者。通称、超電磁砲。

が、此処ではミコチューという謎の渾名が浸透している。

いわく、街中で放電している姿が某有名な電気ネズミに似ている。

そんな範囲とパワーなので定着化したとのこと。

10万で済むほど実際は優しくない。億は余裕で越える程強い。

ツンツン相手ではないので言うほど非常識でもない。寧ろ常識あり。

黒子とは相棒のような存在であり、同時に雫の事情を黒子を通じて知っているようだ。

尚、なぜかお姉ちゃん属性が悪化しており、沢山の妹に加え黒子、挙げ句には幼女まですぐ一緒にいるとか居ないとか。

更に幻想御手事件を経験しているので多才能力の実態も知り、スキルアウトへの事情も自分で見て知っているのも偏見もない。

要するにパーフェクトミコチュー。凄く良い人。正に能力者の鑑。

但し色々弱点ありとのこと。

解説終了。

副作用

辛い記憶は封じたい。

それは、誰もがそうであるように、多くの能力者が抱えている。

最強ならば、己の過ちを。超電磁砲なら、彼女たちの存在を。

大きさに差異はあれど、結局人間は心に痛みを抱えると苦しむことになる。

レベル5であろうが、レベル0であろうが変わりはしない。

規模が抱えきれないモノであったり、取り返しがつかないことだったり。

あるいは、購う事すら許されないほどの大罪だったり。

皆、抱えているのだ。心の痛みを。

時間すら癒せそうにない、その記憶。

そして、誰かが言うように強大な力にはリスクが伴う。

ガイアメモリ。誰でも強くなれる夢の力。

それにだって、いい加減出てくるものだ。

副作用、と言うものが……。

あの場に杠が駆けつけたのは、偶然じゃなかった。

モーリッツが揉めていると聞いて、相手が黒子と知り相棒の美琴を捕まえて連行。内容を聞いて、雫の知り合いと知るや美琴も了解して向かった。

空から降ってきたのは、杠は実は空を飛べる。

稀に見る大火力の炎をなんとポニーテールの先から放ってロケットの要領で舞い上がるのだ。

純粋な出力で、彼女はブーストをすることで滑空や突撃などの芸当も可能。

いくら変態の姉でも大能力者。その看板は伊達じゃない。

取り敢えず仲裁して、然しモーリッツも雫も凄まじいストレスを抱えてしまった。

おかげで、明らかに様子がおかしくなっていた。

「ガイアメモリ……そうだよ。これさえあれば、苦しくなくなるんだ……」

「モーリッツ的にはこれ最高っ……!! はあ、気持ちいいなあ……」

受け取った水とゴキブリのガイアメモリを刺してドーパントになっていた。

雫は高揚を感じているのか、物騒なことを言い出して。

モーリッツは恍惚として、のめり込み始めていた。

二足歩行のゴキブリ、コックローチドーパントになったモーリッツはそのまま学園都市の中を意味もなく走り出していた。

コックローチドーパントは、規格外の速さを持つドーパントの一体。

ゴキブリと侮るなかれ、総合的な性能は量産が可能と最近自覚した鍊太郎の作るガイアメモリの中では高水準。

速度は特化した能力者を凌駕し、手のひらからは粘性の体液を吹き掛ける。

これは窒息させたり、相手の動きを止めるのに便利な攻撃方法である。

シンプルに纏まりつつ、特化した一芸のおかげで、ゴキブリとなった彼女は現在虜になっていた。

対して、雫はもつと悪い。破壊行動に走りそうになっている。

鍊太郎がストレスで引きこもっている雫を気にして、様子を見に行つた。

すると、アパートの近くの河川敷で暴れているウオータードーパントを発見。

川の水を使って河川敷を穴を開けて喜んでいた。

単純に穴を開けて遊んでいるだけだが、ぼこぼこになった河川敷は酷い有り様だつ

た。

終わったら埋めていくあたり、多少理性はあるようだが……。

「あははははははははははっ!! わたしなんか死んじゃえはいいいんだ! わたしなんか死んじゃえばあ!!」

悲しそうに、苦しそうに、八つ当たりのように叫びながら笑って、暴れる雫。

憂さ晴らし……なのだろうか? 驚いた鍊太郎は、声をかけることが出来なかった。

ガイアメモリを悪用している? 違う。作った本人だからか、何となく分かった。

彼女は、ガイアメモリに使われている。道具が明確な意思を持ったのか、人間を使役している。

そんな風を感じ取った。

多用するようになってから、めきめきと成長する雫とモーリッツ。

物理的に強くなっていくのはいいが、平行して明らかに窶れていった。

目の下に濃いくまを作って顔を見せるようになった。

「先輩、モーリッツにもっとガイアメモリくれない? 何でもしてあげるからさ、ね?

お願い」

モーリッツはどこか甘えるように刷りよってくる。

新しい快感が欲しくて、ガイアメモリを求めてきている始末になった。

物足りないのか、泥沼にハマっていくようにモーリッツはガイアメモリが欲しいと繰り返す。

「ねえ……大山君。わたし、なんかもう……疲れちゃった。大山君の力で殺してくれる？」

雫に至っては殺してくれと頼み込む。

土気色の彼女は、自分はもう無価値だから死なせてくれと。

最早目に見えておかしくなっている。鍊太郎は慌てて、医者にスキルアウトの面々と連れていった。

彼らもなぜこうなったのかは分からないと言う。

少なくとも、ガイアメモリが原因であることは間違いない。

毒島が、良い医者を知っておりそこに放り込むと、信じられない事を言われてしまう。麻薬をやっているのか。そう、言われた。

調べた結果、よくわからない中毒を起こしており、何に中毒を起こしているかはさっぱりだが精神の均衡が崩壊していた。

本人たちは強いストレスから逃避するべく麻薬にでも手を出したのか。

そう聞かれても、鍊太郎はガイアメモリを出して白状した。

医者も調べてたが案の定解析不能。悪影響は出ているが、一応一度毒抜きすれば回復

する。

ある程度そのガイアメモリというのを二人から引き剥がせと言われた。

麻薬と言われて、自覚する鍊太郎。

ガイアメモリは……重度のストレスがある状態で使うと、依存性を発露してしまう。ストレスを吸ってガイアメモリと本人が更に同調して適合している。

二人のガイアメモリを手にしたとき、直感した。

ウオーターもコックローチも、二人の痛みを喜んでるように感じる。

一度離さないと、体調が戻らない。治らない。

元気になれば、ガイアメモリの中毒性も対応できる。

然し弱った人間の心身にガイアメモリは麻薬になる。

それが、体験した限り分かった鍊太郎の能力。

雫の言ったでっち上げが、一部とはいえ事実だった。

追い込めたり、壊れかけた人間の心身にガイアメモリは危険。

そう、翌日科学者の所に向かって報告をした。

その際、サンプルに蓄えていたマグロやらエナジードリンクやらのガイアメモリを渡した。

科学者も似たような症例を、此方でも確認したので引き続き頼むと言われ、報酬金を

受け取った。

帰り道、グラサンに金髪のチャライあんちゃんに、此方にもガイアメモリを売って欲しいと研究所で声をかけてきた。

「こんな格好で悪いな。一応、ここの科学者やってただけどにや?」

「はあ……」

違う支部だか何だか知らないが、適当にピラミッドやらメイドやら幾つか渡した。

そういう気分じゃないので適当な対応であったが、鍊太郎は疲れたようにそのグラサンに言った。

「これもサービスで持っつけ。使えねえからさ。研究にでも使っつてよ」

「……これは?」

投げて寄越したのは、壁に矢印が跳ね返ったりしている絵柄のガイアメモリ。

大文字でBと書かれていた。

「一回実戦に使うために作ったけど俺にも使えねえんだ。ベクトルガイアメモリっていう、研究用のガイアメモリだよ。意味は分からないが、役立つかもしれないぜ」

拒絶反応のように、使おうとしても弾かれてしまう。

作っておいてなんだが戦えるガイアメモリの筈なのに自分ですら使えない。

ずっとしまっておいたのだが、モーリッツや雫に見せるといけない。

なのでここいらで処分しておこうと思った。

「ベクトル……だど？」

その単語を聞いてグラサンは訝しげに鍊太郎に問う。

ベクトルの意味すら理解しない鍊太郎は、頷いた。

彼は暫し見下ろして、謝礼金は弾むと大量に支払っていった。

「……最高のオマケをありがとうよ」

「？」

どこか上機嫌なグラサンは、受け取ったまま去っていった。

これが後に、闇に流れてマグロになった第二位とか、エナジードリンクになった世紀末帝王とか、最強に与えちゃいけない、一時的に全盛期のパワーに戻す物を与えてしまったとか、そんな事は知らない。

と言うか、闇の連中も極力一般人を巻き添えにすると後始末と後味が悪いので第二位以外は基本的には彼に関わりは持とうとしない。

精々エージェントを差し向けて代理で購入するぐらい。

ビジュアル系レベルも、マグロにされたせいでもう要らんとお断りになっている以上は、こちらには来るまい。

となれば。残っているのは……毒に蝕まれたモーリッツと雫の二人の女の子。

入院を数日余儀無くされて、翌日には。

「ないっ……ないっ!! 大山君がくれたウォーターガイアメモリが消えちゃった……!!」

パニックになっていた雫。病室の中を懸命に探している。

引っくり返して大騒ぎになっていた。心の拠り所が急に消えた。

喪失に耐えきれないのか、誰彼構わずどこかにかかないか聞いている。

「わたしの! わたしのお守りが……大事なものが無いんです!! 探してください!!」

泣き叫び、ガイアメモリを探し続ける。

あまりに不憫で見えていられないので、事情を説明した医者。

すると、雫はそれでもいいと言った。

「それで構いません!! 返してください、わたしのガイアメモリ!! あれは……ッ!!」

あれは、恩人がくれたわたしの、わたしだけの希望なんです!! 奪わないでください、あれがなきゃわたし……わたし!!」

逆に合ったものが消えたせいで、情緒が極めて不安定になっていた。

懇願するように医者すがりつく雫。

医者も途方に暮れていた。既に雫はガイアメモリに依存している。

取り上げるとこの様に、禁断症状と思われる状態に陥ってしまう。

少し毒抜きをして、体調を安定させると言っているのに理屈が通じない。

返しての一点張り。話にならない。まさに禁断症状。

対して、モーリッツは。

「誰なの？ モーリッツからガイアメモリを奪ったの……？ 誰なの!？」

攻撃的になっていた。元来他人を信じない疑り深い性格であり、能力を用いて思考を解析。

結果、関係者に襲いかかった。無理矢理奪い返すと怒鳴り込んできた。

「このヤブ医者！ 毒が何だつてのよ!! 知るかそんなもん!! いいから返せ！ 返さないなら死ぬ!!」

精神系統の能力者にしては腕つぶしが強いモーリッツ。

キレて医者に事情を知って逆上。ぶん殴つても強奪しようとしていた。

精神の弱かった二名はガイアメモリの魔力に魅了され、結局副作用が発生してしまった。

恐らくは最も重度。完全な、依存症。文字通り麻薬になってしまったのだ。

モーリッツは、居合わせた警備員に捕まって無理矢理戻されて暴れている。

数日軟禁され、その頃には……。

「殺してやるツ!! モーリッツから何か奪う奴はぶつ殺してやる!!」

理性が飛んで、捕縛されて強引に中毒を抜かれていた。

依存症を発祥していると思われるが、逆を言えばガイアメモリさえ手元であれば、普通に今まで通りやっていける。

鍊太郎も流石に躊躇った。これ以上この二名には与えないと医者に言うのと。

「逆効果だよ大山君。与えた方がいい。君が彼女たちの管理をしないと、このままじゃ最悪モーリッツ君は特に、人を殺す。分かるかね、君の能力なんだろう？　なら、管理は君がしなさい。君の責任だ」

「……………」

分からないまま、安易に与えた結果が……これだった。

メンタルの弱かった二名は、ガイアメモリの毒に侵食されてぶっ壊れたのだ。

……まだ、鍊太郎以外には医者は言わないと言った。

仲間にも姉妹にも言えない。モーリッツも雫も家族は居ないらしい。

研究の結果も知った。分かったことは、精神の脆弱な人間にはガイアメモリはただの毒。

強大な力に抗える意識がハッキリしないと依存症に至ってしまう。

そういう結果で、モーリッツと雫はギリギリ手遅れ寸前。

与えておけば依存症は進行しないが、離れると悪化する。

治癒は彼女たちの心の傷が癒えれば、あるいは脱することも可能かもしれない。有り体に言えば、だ。

鍊太郎は、モーリッツと雫に、責任を果たさないといけなくなったのだった。

用語解説。

副作用。

ガイアメモリを使用する人間に現れる、本作品オリジナルの副作用のこと。

ガイアメモリは本来、原作にあるようにそもそも毒素が混じっている。

それをフィルターであるドライバーを用いて薄めることで長期の使用が可能。

が、ドーパントに変身する彼女たちはその毒素が体内に直接入る。

コネクタの概念がないため、直に突き刺して使用する負担は大きく、本作品の場合人間のストレスをガイアメモリが吸収。

能力の大幅な上昇を見込めるが同時に心身への負荷が増大し、麻薬に似た症状と依存症を発症する。

健康な状態ならば何ら問題はないのだが、ストレスが積もると一気に悪影響が発生。ガイアメモリを手離せなくなり、個人差もあるが麻薬と同じように一過性の快楽を得ながら自滅してしまう。

当然奪われると取り返そうとするので安易な対策は逆効果。

治療をする場合は、精神の安定が必須になるが極度の依存症の場合、手遅れになると……ドーパント状態で倒れると、ガイアメモリと共に、その運命を共にする事になるだろう。

ガイアメモリ解説。

エッジガイアメモリ。

詳細不明。

エッジドーパント。

詳細不明。

解説終了。

暴走

鍊太郎は抱え込む。

家族にも言えない。自分の能力が、他者に麻薬を渡す能力などと、誰が言える。秘密にしよう。そう決めた。

もう、彼の回りにはガイアメモリの使用者が多いのだ。

不安を与えれば、麻薬になってしまう。健康でいれば、問題はない。

それが不幸中の幸いか。知らなければ多少は先伸ばしに出来る。

然し他人に渡すのは考えよう。やめるといふ選択肢が選べない。

何故なら、科学者たちが情報を欲している。誰か犠牲にしないといけない。

自分でもいい。然し自分には、二人の責任がある。

健康な人間には、手渡すときに付け加えよう。

責任逃れ出来るしまうのが鍊太郎の能力。

希望を求める人間に、毒と知っていてばら蒔くのは悪だろう。

でも選ぶのはソイツ。毒がある希望。代償を支払えば強くなる。麻薬という言い方は的確だった。健康である限りは、何も無い。

だが、ひと度傾くと天秤は人間を破壊する猛毒に様変わり。

リスクのある希望を、使うかは自分次第。

こうやって言えば、求められた鍊太郎には言い逃れてしまう。

周囲もそう求めている。どうしろと言うのか。

従えば犠牲者になる可能性がある人間が増える。

科学者たちは言った。鍊太郎は悪くない。使ったソイツらの自分の因果。

分かつて了承をとつて、相互理解した上で受け取つたならば合意と見る。

彼らは言うのだ。大丈夫、学園都市の学生はたくさんいる。

それでも気が引けると言うならば。

追い回されるならそれを使い。シチュエーションを味方にしろ。

奪われればいい。失えばいい。彼らが強奪させてしまえば向こうが悪い。

欲しいのなら奪わせてしまえ。一石二鳥だろう？

連中はガイアメモリが欲しい。我々はデータが欲しい。

鍊太郎は平穩が欲しい。なら、保身しつつ全てを満たす方法を教えよう。

バカなモルモットに、わざと渡すのだ。いや、奪わせる。逃げる際にガイアメモリをばら蒔き囿にする。

どんなものか知らないまま、我先に飛び付くバカを無視して鍊太郎は逃げる。

使用して暴走しても、鍊太郎は奪われた被害者。決して責めることなど出来やしない。

此方としても、それで良くないか。いや、そうしろ。そうするべきだ。

次第に脅迫のような凄みを見せられて、参っていた鍊太郎は思わず頷いた。

彼もまた、自責により精神が病んでいた。

元より人付き合いは苦手で、普通の外の世界で生きてきた。

それが突然、周囲が全て敵になり、執拗に追い回すストーカーに狙われて。

平凡な学生の鍊太郎は徐々にストレスを抱え込み、雫やモーリッツと同じように蓄積したダメージが確実に残っていた。

毒抜きが必要なのは、彼も同じで。然し柳や杠はそれには気付けない。

レベル4はストーカーされても、戦うという選択肢はある。抗える実力がある。

レベル0はそれが無い。強者には従うしかない。それが能力者か、科学者の違い。

学園都市に適応している姉妹には、鍊太郎の気苦労は理解できない。

守ることは出来ても、支えることなど出来るわけではない。

何せ学園都市の上位が最底辺の彼のストレスがわかるというのか。

ナンセンスな話である。面白味もない当たり前の能力の杠。

貴重でも所詮は似た種類の分類になる柳。レベル4の現実。

道具に頼り、そもそも解析不能な生まれつき。レベル0の錬太郎。

何もかもが違いすぎて、二人には同調ができなかった。

ストレスにも無縁で、慣れきった荒れる学園都市になにも感じない。

本来であれば錬太郎のように追い込まれていくのが当たり前なのに。

学園都市内部は弱肉強食、実力主義の地獄なのだから、珍しく弱い立場は自ずと逃げ場を失い、病んでしまう。

塞ぎ込んでいる錬太郎に杠が聞くも、なにも言わない。

守ると言っても、守って欲しいじゃない。支えて欲しいのに見当外れの事を繰り返す。

柳も懸命にサポートするけれど、それも彼の心を癒すには程遠い。

悲しいことに、家族といえども環境が異なりすぎた。

学園都市の実力主義は、二人が思う以上に下の存在には重くのし掛かる。

勝ち組のレベル4と、這い上がることすら出来ないレベル0。

凡百の杠、少し珍しい柳。貴重すぎる生まれつきの能力の錬太郎。

完全に他人に理解できる能力。完全に他人に理解できない能力。何処を見れば交わることができると言うのか。

鍊太郎も、共に滅び行く。

普通の高校生には、学園都市の日常は……厳しすぎるのだった。

二人は数日経過した頃に退院。

直ぐに鍊太郎は、変装をして会いに向かった。

待ち合わせに使う場所で、待っていたモーリッツと雫。

制服姿に防寒具。雫は右頬のガーゼ。モーリッツは癖毛のプラチナブロンド。

顔色も回復しており、談笑しながら待っていた。

今日は野郎たちには控えて貰った。大事な話があると、二人には連絡してある。

鍊太郎が顔を出すと、二人は何処か罪悪感を滲ませた顔で挨拶した。

「お、おはよう……大山君……」

「先輩……おはよ」

気まずい。鍊太郎もぎこちない挨拶をして、取り敢えずその場を離れる。

人気がない場所で、話をしたかった。

適当に向かつていく彼らの後を……科学者たちの悪意によって雇われた影が追つていくのを、知らぬまま。

適当に大きな川の堤防に到着。

暖かい日差しの下で、コンビニで購入したお茶やコーヒーなどを手に、草むらに腰を降ろす。

この時間帯は皆学校だ。近くには誰もいない。スキルアウトは分からないが確認はした。

鍊太郎はずっと道中黙っていた。内容が纏まらない。

言わなければならないこと。分かっているのに言葉に出来ない。

二人も、何か言おうとする鍊太郎を待っていた。

モーリッツは読もうと思えばできる。でも、モーリッツは誓ってそれはしない。

卑怯なことだ。そして、何よりも、やってはいけないことだから。

「月川……モーリッツ。ゴメン、俺のせいであんなことになって」

鍊太郎は、無理矢理纏めた謝罪の言葉を口にす。

分からないまま安易に与えたガイアメモリが、麻薬のような中毒性依存性を発露させてしまった。

それは、鍊太郎が知らないから起きてしまったこと。

退院直前には手元に帰ってきたガイアメモリのおかげで落ち着いていた二人も話は聞いている。

概要も、自分の状態も。もう知っている。

何度も謝る鍊太郎。だが、モーリッツが口を挟んだ。

「先輩。こればかりは、先輩のせいじゃないよ?」

頭を下げていた彼は、その言葉に驚いた。

何を言い出すかと思えば、彼女たちは苦笑いしていた。

「謝るのはモーリッツの方なんだよね、これがさ。モーリッツ、勝手にガイアメモリ使っちゃった。これ、そもそもあのロリコンを撃退するために借りたのに、何がよくてその……ドーパント? っていうのに変身するのに使ってたんだろ。分かってるよ、依存性を発症していることは。けどさ、その原因はモーリッツの因果応報。先輩のガイアメモリを勝手に使ったこうなった自滅。先輩が気に病む理由はないし、後悔もしてない」

モーリッツは、そもそも正式に貰ってないのに勝手に使つて勝手に壊れた。

元々ロリコン杠を追い払うために貸してくれたもの。

それを、勝手な理由で使用した挙げ句に依存性を引き起こす。

どう見ても自分の責任だと言つていた。彼は被害者。巻き添えを受けたのだ。

「わたしも……これは、わたしを助けてくれるために大山君がくれたもの。わたしが弱いから、自分でのめり込んだんだよ。大山君は悪くない。自分の判断で、使つていたんだもの。何かあれば、自分が悪いんだよ？ 副作用は分からないって、最初に言つたじゃない。わたし、聞いてて受け取つた以上は自分のせいだと思う。だから、気にしちゃダメだよ。わたしの責任を背負わないで大山君。益々、申し訳なくなつちゃう……」

雫も言つた。自分が悪い。

己の行動が引き起こした依存性。迷惑をかけているのは雫の方だと逆に謝る。

モーリッツは自覚している。ガイアメモリが、これだけじゃ足りない。

僅かであるが、欲求があると言つた。まだ欲しい。新しいガイアメモリ。

「モーリッツ、多分快感感じてると思うのよね。コックローチだけじゃ物足りない。新しいガイアメモリが欲しい。病み付きになつてゐるって」

仮に二人にガイアメモリを複数与えても、大した問題にはならない。

生身に投入して使えるのは一度に一個のみ。

ドーパント状態で同時に使えないのは皆同じ。

ドーパントは変異した怪人。他のモノに変化は出来ないのが救いだった。

寧ろ同じ刺激で何時までも持ちそうにない、と素直にモーリッツは白状した。

「わたしは、何とかなりそうだよ。リッツとは違って、あくまで……自分の事を自衛したいだけだからかな。我慢できると言うか、一個に依存しているみたい」

逆に雫はウオーターガイアメモリのみでいい。

彼女のために作ったものだ。専用ならば、満たされている。

「だから、わたしは気にしないで大山君。壊れたら壊れたで終わるから。良いの、その時は……学園都市の誰も見てない隅っこで、の垂れ死ぬ事に決めているし。自分の最期の、希望だもの。死ぬることは」

「……………」

雫は笑った。笑って言った。自分が死んでも鍊太郎は悪くない。

鍊太郎の事に関係無く、勝手に死ぬ。野垂れ死にしたいと言うのだ。

何を言えば良いのだ。笑顔で、死を望む相手に。死にたいから鍊太郎のガイアメモりは希望の象徴。

依存性すら受け入れて、光なのだと励ますように雫は言っていた。

「ん……。実を言うとモーリッツもさ、別に生きること自体に未練はないんだ。死に急ぐ訳じゃないけど、特にみんなという以外は面白くもない人生だし……。楽しいことして散々生きてきたんで、今更麻薬程度じゃ動じないわ。中毒死も酔狂じゃん？ 死に際ぐらい派手に死んでも、それもアリかな。面白おかしく見世物でお祭り気分で大往生とか、そんなのでも後悔はない」

生きる理由なんかない。

死んでも別にそれでいい。

モーリッツはケラケラ笑っていた。乾いた笑い。虚ろな笑い声。

何がしたいのか分からないと言うが、一瞬だけ見えた気がする。

モーリッツは、空っぽなのか。そんな気がした。

そんな悲しい会話をしていると。

「……で、なんなのあんたら？ 先輩とモーリッツ達に何か用？」

不意に不機嫌な顔でモーリッツは立ち上がった。

気がつけば、後ろには誰がいる。気配もなく、立っているスーツ姿にグラサンの男たち。

何人もいつの間にかそこに居た。

どう見ても怪しい。モーリッツの問いには答ええないで無言で、銃を懐から取り出し

た。

銃口を、鍊太郎に向ける。

「!?」

「えっ……」

硬直する鍊太郎。呆ける雫。

背後にいたスーツ姿の男たちは、全員三人に拳銃を向けてきた。

「チッー」

舌打ちしたモーリッツが、堤防を降りる。続けと、素早く鋭く叫ぶ。

「つつきー!! 殺されるよ、いいの!?!」

鍊太郎は雫の腕を掴んで、弾かれたように立ち上がり、走り出す。

我に返った鍊太郎が、反応の鈍い雫を引っ張る。

直後、銃声。発砲されていた。

雫は漸く頭が処理できた。今、自分達は殺されかけた。

「きゃあああああ!!」

絶叫した。錯乱したように、恐怖で悲鳴をあげて、自分から走り出す。

動かないよりは遙かに良い。鍊太郎も冷や汗を流していた。

いきなり銃殺か。笑えない。襲撃された。今度はなんだ。

「あいつら、モーリッツ対策に精神防御してる。何も聞こえない。多分、プロだよ先輩。他のスキルアウトにいる頃、ああいう手合いは見たことあるのよ。あいつら、誰かに雇われた殺し屋だ。此方の情報を知ってる」

モーリッツが走り出して、後ろから白昼堂々威嚇射撃する黒服を見て言った。

本物の殺し屋。狙いは錬太郎。此方の事をクライアントに聞いていると説明する。

「ど、どういうこと!?! リッツ、あの人たち何?!? 何なの!?!」

「先輩のガイアメモリ狙いに来たんだよ! 今度はスキルアウトじゃない! プロの殺し屋! 邪魔なモーリッツたちは殺される! 手に負わないわ! 警備員のところに逃げよう! うまくいけば逃げ切れる!!」

経歴上知っているモーリッツの言葉に一般人の雫はパニックになりながら聞く。

要するに人殺し。邪魔な二人を殺して錬太郎からガイアメモリ奪う気なのだ。

「ああっ、そうかい!! じゃあ勝手に持ってけクソ野郎がッ!!」

本当にこんなことになるうとは。

走りながら錬太郎が持っていた荷物からガイアメモリを取り出して投げ捨てた。ばら蒔くそれを囿にして、さっさと走る。

「大山君!?! 良いの!?!」

「大丈夫だ、クソの役にも立たないただのガイアメモリだからな!」

駆け抜けて堤防をあがる三人。雫が適当にぶちまけたガイアメモリを振り返る。拾つて回収する人間と追いかける人間で分かれている。

向こうはなぶるようにゆっくりと追いかけてきた。

時折威嚇して銃声を放つ。

道路に出てみれば車に乗っていた別動隊に発見されて追い回される。

流石はプロの殺し屋とモーリッツが見立てた事はある。手慣れている。

兎に角逃げる三人は大通りに向かつて駆ける。

向こうは乗用車で追跡してきていた。

細い路地を細かく走つてを繰り返す。

「いくら何でも、殺されるとか嫌だよモーリッツ的には！ 自分の命は自分で落とすし前

つけるんだからさ！」

などとキレながら彼女の先導のもとで警備員に通報している鍊太郎は聞く。

「わ、わたし……また、殺され……!?!」

「落ち着け月川！ お前は俺達が守つてやる！」

ダメだ。過去に殺人未遂の経験がある雫は恐慌に陥っている。

このままドーパントになると、また副作用が出てしまう。

警備員は通報に出て、居場所を聞くがそんなものわかるか。

現在進行形で追われているのに。モーリッツが住所を叫ぶ。

それを伝えると巡回の警備員が近くにいるから、合流しろと言われた。

「畜生がッ……！俺は殺されなきゃいけねえ理由なんかねえんだぞクソツタレ!!」

「そうだよ先輩、モーリッツたちは殺される理由なんか最初から無いんだよ!」

雫の腕を引いて脱力する彼女を引っ張る錬太郎の悪態に、モーリッツが答える。

そんな覚えなどない。そうだとしても、現実は変わらない。

何でこうなる。いつもこうなる。毎度錬太郎は追い込まれる。

いい加減腹が立った。許せない。ムカつく。頭に来た。

大通りに出た。連中も諦めずに追いかける。

乗用車が追跡を続ける。しつこい相手に我慢の限界に達した錬太郎。

歩道を走っている三人。警備員はまだいない。窮地になっっている現状。

殺されるという極度のストレスが、彼にまで副作用……いや。

暴走を、誘発する。

(死んでたまるか……！意味も分からず殺されて、納得なんか出来るかクソツタレが

ああああ!)

激情。学園都市に来て初めて怒りを強く感じてしまった。

結果、持っていた荷物からガイアメモリが突然、何本も宙に飛び出してきた。

「なに!？」

モーリッツが何事かと急停止。鍊太郎は雫の腕を離して、立ち止まった。

そして呆然とする雫の前で、鍊太郎が一本浮かぶガイアメモリから乱暴に掴んだ。

「おおおおおあああああああつ!!」

雄叫びをあげる鍊太郎。目は血走り、怒り狂う獣のように、荒々しくそれを解放する。

——エツジ!!

刃の記憶。

殺しの記憶。

戦いの記憶。

争いの記憶を覚醒させた。

銀色で、小文字のeの軌跡を描く刀。

それが、エツジガイアメモリ。

発動するや、強い煌めきを放ち、鍊太郎を包む。

目が眩むモーリッツは腕で目元を庇った。

雫も目を閉じた。

唐突なガイアメモリの解放。

それが、モーリッツの庇った右腕に伸びる。

「えっ!？」

長い鎖だった。

腕に絡み付いて、締め付ける銀の鎖。

大きく武骨なコンバットナイフに繋がり、肉厚な刃のナイフを逆手でモーリッツは持っていた。

柄がスロットになって、刃の鏢にも大きな横向きのスロットが一つ。

合計二つのスロットがある、ドーパントがそこにいた。

啞然とするモーリッツの手に……暴走したソイツは、武器として。刃として……存在していた。

ガイアメモリ解説。

エッジガイアメモリ。

刃の記憶を持つ殺しをするための武器として機能するガイアメモリ。

純粹に戦争に特化した作りになっており、バリアガイアメモリとは対極的な存在になる。

雫がバリアガイアメモリを装備して身を守る存在ならば、エッジガイアメモリはモーターリッツが装備して、相手を殺すための力になるだろう。

エッジドーパント。

大型のコンバットナイフを模したドーパント。

武器としての機能に特化した、戦争をするための姿。

スロットを二つ持ち、装填することでドーパントに変異せずともその効果を使用者に与える。

一種の、使用者に擬似的な多才能力を強引に付加するとも言える。

但し、使用者には莫大な負担がかかり、一切の安全が考慮されないため人間が扱うことは非常に難しい。

またマキシマムドライブも同時に発動可能であり、様々な攻撃を行う。

現状、攻撃的な思考のモーターリッツにのみ装備を許す。

解説終了。

多才能力の真髓

巻き付いた鎖は、モーリッツの細腕に力づくで食い込んでいく。

「痛ッ!!」

束縛の痛みが彼女を苦しめる。

呆然と立ち尽くす雫。その目の前で、鍊太郎が変異した。

ドーパント。だけど、この形は何？

コンバットナイフ一本で、銃を持ち出す相手に戦えとでも言うのか。

いくら喧嘩に慣れて、数々のスキルアウトを渡り歩いて多少の武器の扱いにも知っているモーリッツだとしても。

勝算の可能性は、高くはない。

浮遊するガイアメモリが地面に落ちた。慌てて彼女は全て拾い上げる。

何が起きたかは見えないけれど。

戦うなど毛頭無理。

物理的に無理があるものは不可能だ。

こんな小さな刃で、あの人数に抗えるなど……。

(……違う)

……いいや。

違う。モーリッツは気付く。

このドーパント、普通じゃない。

身体が軽く感じる。前に雫が言っていた、武器になるドーパントの一種と見る。

コンバットナイフなど、明らかに戦争をするためのモノだ。

モーリッツの能力、精神感応が変異した鍊太郎の心を読み解く。

既に思考すらない。あるのは、強く、純粋な感情。

烈火の如く燃え盛る……怒り。

こんな人通りの激しい往来で、怪物に変異して。

周囲が何事かと見ているなか。

追っ手は実に清々しく堂々と乗用車で此方に突っ込んでくる。

口封じも含めて共倒れする気か。自分達も死ねば証拠も減る。

徹底したプロ意識と言うかここまでくれば最早洗脳の類いとすら思えた。アクセル全開で、自爆でも企んでいるのか。

突っ立つモーリッツ。雫が気付いて逃げろと叫んだ。

丁度、巡回の警備員も駆けつけているのも視界の端に捉えた。

ガードレールを貫いて、モーリッツと鍊太郎を殺すつもり。

分かっているとも。例えば思考の声が聞こえなくとも。

モーリッツには鍊太郎の怒りは、理解できるものだから。

「分かった。モーリッツ的にも、構わないわ」

乗用車？ ああ、確かにただの人間相手ならば致命傷は免れない。

でも、やり方をどうも鍊太郎は本能的に分かっているようだ。

モーリッツの精神感応を通じて、流れている。

聞こえるじゃない、見えるでもない。感じる。

このコンバットナイフは、こうやって使うのだ。

突っ込んでくる乗用車。右腕を、突っ込む車に向ける。

「リッツ、危ない!!」

僅かな時間で雫は自分で離れている。大丈夫。

じゃあ、先ずは……。

「コイツら、取り敢えずぶっ潰そうか」

……何が起きた。

突っ込んでくる乗用車の軸から逃げずに立っていたモーリッツ。

あの右腕に絡み付いている鎖とコンバットナイフは鍊太郎のドーパントなのは分かる。

でも、バリアードパントじゃない。あんな衝撃、堪えられる訳がない。

突っ立つモーリッツは、左手に何か持っていた。ガイアメモリ？

何かを呟き、切っ先を向けたナイフを。

柄に差し込み、指先で触れて押し、軽く一閃した。

ペット！ マキシマムドライブ!!

そう聞こえた。あれは、鍊太郎のペットガイアメモリ。

一閃した軌跡から、何か半透明のエネルギーが生まれていた。

巨大な……ブタ!?

そのブタが、突っ込んでくる乗用車に突進していく。

同じサイズのブタと乗用車が正面衝突。轟音を奏で、乗用車のフロントが潰れた。

「……ブタ?」

思わずすつとんきような言葉が漏れた。素直な感想。

殺し屋にブタで迎撃した。正面衝突して、消える巨大なブタ。

黒煙を上げて倒れる乗用車。ソコから、黒服が何人か這い出てきた。

「なんだ。やっぱり生きてるんだ。まあ、いいや」

軽くナイフを弄くるモーリッツは、見たことないぐらい冷たい目で、車を眺めて言う。

牽は駆けつけた警備員に真っ先に保護されて、無事を確認されるとモーリッツはこちらに目をくれる。

「警備員! 悪いけど、つつきーの事お願いね。モーリッツたちは、このクソツタレをぶちのめしてくるわ。狙いはこつちだから、なるべく遠ざけてみる」

保護を頼むモーリッツは簡潔に見た人数、得物の種類、状況を説明して背を向ける。

まだ別に連中は残っている。ソイツを倒すと背中で語っていた。

「ま、待て! レベル3の精神系能力者じゃ無理だ!! ここは警備員に任せ……」

「警備員は信用しない。事件が終わる頃に駆けつけるような連中でも、組織で被害者守るぐらいはできるでしょ。それぐらいはしなさいよ給料泥棒」

モーリッツは提案を一蹴した。

警備員がよく言われる陰口だった。

事件が終わってから到着する。有事に反応が鈍い。

拳げ句には逃げ腰のやつもいて頼りに出来ない。要するに宛にしたくない。

そういう事をモーリッツは言っていた。

「一応治安維持するなら、最低限の仕事はしてよ。これ以上妥協はしないわ。コイツらは、先輩とモーリッツが潰す」

殺しに来るなら、遠慮はしない。出来ない。自分で撃退してから差し出す。

そっちの方が、确实。雫に最後にモーリッツは顔だけ振り返って、モーリッツは告げる。

「つつきーは戦つちやダメだよ。また、副作用悪化して辛くなるじゃん？　ここはさ、荒事に慣れているモーリッツとキレた先輩にお任せあれ。マジものの多才能力の活躍、期待してて？」

「リッツ……。うん、分かった。お願いね」

暗にモーリッツはストレスこそ溜まっているが発散かねて仕返しをしようと書いてい

た。

雫も自分が足手纏いになると理解して、避難をする。邪魔になりたくない。

「君達……!」

「うっさい! 良いからそこに転がってる殺し屋速く捕まえろ! じゃあね!!」

そう言つて、モーリッツは走り出す。

もぞもぞ動いていた連中は直ぐに警備員に現行犯で拘束されていた。

怪我はしているようだが、意識はある。……ある?・

ともかくも、モーリッツと鍊太郎は他人を巻き添えにしたいために広い場所に向かう。

雫が無事なら、最悪怪我させてでも生き残る。その覚悟を決めて。

走るモーリッツは怒りしか感じない鍊太郎……いや、エッジドーパントに問う。

「先輩……これ、結構キツイんだけど……」

先ほどは格好つけて言っていたが、モーリッツはかなり苦しい。

どうもこれ、本当に他人を多才能力にするような武器としてのドーパントらしい。

その分だけ当然、自分の能力じゃないモノを無理矢理後付けにして使用する。

負担は全部使う人間に来るのか、ブタを発射しただけで、目眩がする。

マキシマムドライブは最大出力。反動も大きいのは想像できたが、然し辛い。

なのに走れるのは、装填しているコックローチのお陰か。

スロットに突っ込んだガイアメモリの特性もそのまま今のモーリッツは使える。

但し本来は持っている能力に相応しいようにドーパントに変異して使うのを生身で使用した。

人間の身体にバイクの速度は出ない。出せば骨折するし、耐えきれない。

でも使えている。恐らくはゴキブリの速度と体液に加えてしぶとさが再生能力として発揮されている。

消耗したのを初っぱな治して稼働する、ギリギリの均衡。

高いところから落ちて、負傷しても数秒で治癒する。

そう言う能力者じゃないのに。体力は消耗するが、動けない訳じゃない。

目眩がするが、戦えない訳じゃない。殆どエッジドーパントに使役されている。

モーリッツがナイフに武器にされていた。

感覚は生きている。詰まり、疲弊するし痛みもある。

ビルの外壁を跳躍して屋上に着地。そのまま柵を飛び越えて屋根伝いに移動する。

足が痺れている。負担に軋み始めていた。

「先輩聞いちゃいないよね……」

相変わらず怒りしか感じないし、そもそも多分意識がない。

暴走している。エツジドーパントは攻撃衝動に任せて変身したんだろう。

一応提案は聞いているが苦言は無視。戦いに役立たないものは全部聞いてない。周囲を探ると言えば、鍊太郎のイメージが伝わる。

精神感応故に言葉が通じなくとも思考は分かる。

今度はなんだ。目玉……？

「アイズガイアメモリ？ オツケー」

鞆から器用に左手だけで取り出す。

いったい何れだけ溜め込んでいたのか、肩掛け鞆がパンパンに膨らんでいる。

取り出したのは気持ち悪い目玉の描かれたガイアメモリ。

試しにエツジドーパントに差し込む。

すると、脳裏に映像として何か見える。

犯人たちの車。追跡者の様子が上から見下ろすように映された。

同時に頭痛がしてきた。吐き気もする。

(ヤバッ……！ これ、そっちの能力か……！)

頭の演算処理を増やす能力のようだ。

後付けに強引な接続で行う能力。思わず立ち止まり、膝をつく。

「うえっ……!!」

さつき飲んでいたお茶を嘔吐。胃液も共に結構吐き出す。

ガンガンと殴るように酷くなる頭痛と吐き気。慌てて引っこ抜く。

(こ、これが多才能力……？　　こんなん、普通に使えるわけがないわ……。　　人間のできる範囲を越えてる……)

ゴキブリのおかげで何とか復活。また立ち上がって走り出す。

体験して分かった。自分以外の能力を後から付属するもので使うと必ず強烈な反動が来る。

ゴキブリは言うなれば、身体への負担を自前で補える特性があった。

他にも辛いならばと変なガイアメモリをイメージされた。

あくまで続行をするために回復しとけと言う意味か。

まったく、今の鍊太郎は容赦の欠片もない。

これが、学園都市で言われている幻の能力者。

人間の頭を複数繋ぎでもしない限りは絶対に実現不能という触れ込みはよく分かった。

個人で使えるとすれば何れだけ演算能力を高めて脳ミソ自体を巨大化でもさせない限りは行えない。

エッジドローパントは、ドローパントにその能力を一つに内包するようだし、負担は使用

者が背負う。

今はモーリッツが痛みを我慢している。

このままいけば消耗でモーリッツが倒れる。それは回避できても、倒しきれない。速めに対処しないと。また、回復したら使えばいい。

モーリッツは地理を思い出す。この辺は無能力者の通っている学校が多い。

適当に校庭でも間借りして、迎撃してみるか。一般人を巻き添えにするよりかは都合が良さそう。

モーリッツは無駄に広い交遊関係で、この一帯で知り合いがいる場所を割り出す。携帯で軽く探した。知り合い発見。レベル0の女の子。

アプリ起動、連絡する。追われてる、ちよつと校庭貸してと送った。

返信が直ぐ様返ってきた。誰も授業で使つてはないが、教師が居るけど大丈夫？

再度返信、殺されそう。相手警備員でも風紀委員でもない。多分武器持ったチンピラ。

すると、慌てたように電話が来た。応答すると、スキルアウトか何かかと焦つて相手聞いていた。

「ゴメン、話している暇ないんだ。今も追われててさ。つつきー知ってるじゃん？うちのスキルアウトの仲間。その人、警備員に預けてきたんだけど。向こうの狙い、モー

リツツなの。拳銃持ってたし、乗用車で轢き逃げしようとした。警備員じや遅れてて間に合わないんだよねえ。ゴメン、マジで校庭行つてもいい？ 本気で、死ぬ」

真面目なトーンで言う。余計なことは言わない。

最低限伝えると、相手も分かつたと言つて電話を切つた。

住宅街に入り込み、屋根伝いに走ると並走して黒い乗用車を発見。

追つてきていた。多少距離があるから撃つてはこない。

携帯に通知。教師に許可を貰つた。受け入れるから早くこいと一報を確認。

(素行は良いからね、あいつは)

助かつた。これで、迷惑かけずに迎撃できる。

「先輩、近くの学校いくよ！　そこで全員ブツ飛ばす！」

エッジドールパントに行き先を示す。

そこは、ある高校。レベル0が通う、珍しくもない学校。

屋根を飛び越え加速する。

数分かけて走り抜き、追つ手も見えている状態で示された正門を目視で確認。

一気に近くの住宅の屋根から飛び降りて、駆け抜ける。

追跡者も、問答無用で正門を突つ切る。

校舎では派手に追いかける車に、何事かと生徒たちが窓から見下ろしていた。

モーリッツは息が上がっていたが最後の気合いで校庭まで走り込む。

スライディングするように、校庭に滑り込み。

……勢いを殺せずに派手に転んだ。

「ぶべっ!」

汚い悲鳴が出てしまった。

乗用車までそのまま、乗り込む。

起き上がる頃には、背後に停車していた。

出た鼻血を乱暴に袖で拭って、強気的笑みで対峙する追っ手の黒服と向き合った。

「ここなら、思う存分暴れてもいいよね……。追い込まれたスキルアウトのやり方、教え

てやんよ」

苛立ちを最大にまで高めたモーリッツが、不敵に笑う。

彼女は知らないが、実はここ。

ドーパントとガイアメモリのことを知っている、鍊太郎と面識あるグラサンのチャラ

い生徒が通う学校であり。

モーリッツや雫は確実に毛嫌いするであろう……。ヒーローの通っている高校でも

あつたのだった。

人物解説。

上条当麻。

とある魔術の禁書目録の主人公。

目の前に困っている人がいると己がひどい目にあっても助ける稀に見るお人好しの善人。

色々な事に自分から関わった結果、豊富な人脈と様々な味方が混在する独自の勢力へと成長したらしい。

その右手には触れた異能を善悪関係無く打ち消す能力、幻想殺しを備えている。

次回に案の定、自分の高校に突っ込んできた見知らぬ少女を助けようとするが彼女はどうかやら当麻が気に食わない様子。

尚、チャライ生徒とは知り合いでありそこでガイアメモリとドーパントについて聞いているので概要は知っている。

口癖と決め台詞は、その幻想をぶち殺す。

どんな困難でも右手で男女平等にぶん殴る、素手で武器に立ち向かうインファイターであり、徒手空拳では恐らくドーパントよりも強い。

あと救った女は大半惚れる。モーリッツや雫は無理だったが。
解説終了。

ドーパント誕生

乗用車から降りてきた人数は、思っていた以上に少なかった。

運転席、助手席、後部座席から合計四人。

モーリッツは訝しげにそいつらを見た。

堤防でガイアメモリを回収していた連中に似ている。

相変わらず黒いスーツに、グラサンと見分けが付きにくいのが、体格までは誤魔化せない。

帽子を被って極力外見の情報を与えないように全員同じ格好をさせる。

挙げ句には何処に電磁バリアを仕込んでいるのか分からないが、少なくとも内面の思考は聞こえない。

(一 体誰に雇われたんだが……。モーリッツたちは普通のスキルアウトだつてのに、武

器まで持ち出して。モーリッツたちが邪魔なら迷わずぶつ殺すようなおっかない奴を敵に回した覚えはないんですけど)

モーリッツは自覚する限り、俗に言う危ない連中と一切関わりは持っていない。

確かに過去には重火器を扱っている真面目にテロリストみたいな人達と知り合っていた。

然し、それはあくまで外部として。

単純に情報を超越せと言われて、探しに代わりに行つたぐらいで、そのお礼に簡単なプラモデルやらのオモチャで使い方を教わつただけである。

本物の拳銃の扱いなどやったことはないし、武器と言えど刃物の立ち振舞いや、間合いの取り方、チンピラ流儀の喧嘩戦法を教えてもらう程度にしておいた。

襲われる謂れはモーリッツにはない。詰まりはガイアメモリ目当て。

鍊太郎が目的と推察する。人数が想定よりも少ないのはばら蒔いたそれらを持ち帰ったからか。

今なら、四人なら勝てるとは思ふ。校庭と言う広い空間で、基本的に身体能力が向上しているモーリッツならば。

拳銃なんか怖くない。そう、怯える心を奮い立たせて立ち向かう。

その様子を、校舎の中から見ているヒーローがいた。

「おい、あの女の子銃を向けられていないか!」

黒いウニみたいなたんたん頭の男子生徒は、近くにいた訳ありの友人に聞く。

あれは、知っているかと。裏側の連中かと。

此方もグラサンの金髪の彼は首を神妙な顔で振る。

知り得ている限り、あの連中は此方には全くの無関係。

即ち、彼の取り巻く厄介な事とは違う方向の騒ぎ。

ただ、事情は知っている。あれは、ガイアメモリという存在を求めている奴等の事。

「ガイア……メモリ?」

人混みのできる窓際から離れ、奥でこそ二人は話をする。

金髪が説明すると、あの少女は最近外部から転入してきた生徒の知り合い。

で、あの恐らく装備している右腕のコンバットナイフはドーパントと呼ばれる怪物。

ガイアメモリとは、人間を変異させてしまう解析不能の道具の事。

それを作るのが、星の記憶という生まれつきの能力を持つ、その生徒。

あの女の子はスキルアウトで、恐らく彼の親しい関係なのだ和金髪は予想する。

スゴいのは、そのガイアメモリというのは金髪のような人間でも使用できる道具。

受け売りならば誰でも使える能力の付与。

実際、向き不向きはあるようだが、大抵の人間は何かしらのガイアメモリが使用でき

る。

但し、この黒いウニみたいなたんたん頭は不可能だろうが。

その話を聞いて驚愕するたんたん頭。それは要するに、ある意味万能と言うことか。

当然、デメリットだってあるとニヤリと腕組みして金髪は笑った。

一番大事な中身の問題なのだが、そもそも製作者からして使ってみないと分からない。
い。

あと、かなり大半がしようもないもので役に立たない。

日常にあるようなものばかりで、戦闘には役立つものは稀少と言う。

あるいは、ソイツが役に立たないものを研究に差し出しているか。

学園都市は基本的には価値がないので狙わないと決めているようだが、興味のあるバカが研究ほしさに狙うかもしれないと言った。

彼には本来は関わる理由などないし、助ける義理もない。

だが、この男……上条当麻という人間は、ピンチになっている奴がいると、損得勘定抜きに、助けに行く。

因みに相手の心境もあまり気にしない。言ってしまうえば余計なお世話になる場合もあつた。

取り合えず助ける。そのあと文句を聞くなり、謝るなりをする。先ずは行動。

自分の利益などならずとも、自分が危険になろうとも、他人の窮地を無視できない。そう言う人物だからこそ、多くの人脈を築き上げてきたのだ。

まあ、そんなものはあの少女には知ったことではないのだが……。

金髪は試すように聞いた。彼女を助ける気か？ 自分達の陣営にも、なんの意味がなくとも？

不利益になろうとも？

「助けるに決まってるだろうが!!」

その問いかけに怒鳴るように叫ぶ上条当麻。

突然、教室から走って飛び出していく。金髪は行かない。

彼はあの刃物のドーパントと顔が割れている。

誤魔化して接触した以上は、安易には接近できない。

折角、暗部には関係ない小競り合いで終わっていいそうなのに、此方から近づけば要らぬ被害が出る。

それは金髪としても、本意ではない。

故に見守る、傍観者に徹していく。これ以上の掛け持ちはリスクもあるので控えておこう。

何より、あの少女。上条当麻との接触でどうなるか興味もあった。

知っている女は大半が上条当麻と良好な仲を続けているが、彼女はどうかだろうか？
たまにはスパイとかそういうのを関係なく、上条当麻の近くにいる一人として、行方を見ておこう。

……もしも彼等にちよつかいを出す阿呆がいた場合は、知らぬ間に消す為に。

ガイアメモリは彼の組織にもまだまだ使える便利な道具だ。唯一の生産者を殺させる訳にはいかない。

そんな思惑も、あるのだった。

校庭で対峙するモーリッツ。

エッジドーパントは、相変わらず怒り狂っているままだ。

拳銃を向けている敵対者。モーリッツは、聞こえるように震える足を踏ん張って強

がった。

「い、今更後悔したって遅いわよ！ 此方はガイアメモリ使っているんだから！ 先輩がいる限り、あんたらなんか怖くないわ！ 拳銃なんかでモーリッツを殺せるもんか！」

ハツタリ、ただの虚勢だ。本当は怖い。

スキルアウトだって、色々いったが銃口を自分に向けられたことなどない。

況してや、殺されるような状況なんか有るわけがない。

殺される理由などないと鍊太郎にも言った。

それはモーリッツの紛れもない本音だ。

丁度この学校の教師が何人か警備用の武器を持って走ってきた。

有りがたいが……なんか変なのがあった。

「あ、あなたたちは一体何なのですか!? 乗用車で乗り込むなんて非常識ですよ!」

あなたの方が非常識だよ、とモーリッツは内心想った。

何かちっこい先生みたいなピンク色の髪の毛の幼女が怒っている。

どう見ても子供。大人に混じって何やら応戦なのか説得なのかをしようとする。

が、連中も教師たちに反転すると、突然発砲。四人揃って殺意を込めて撃った。

透明な盾を持っていたジャージ姿のゴリラに似ている教師が防弾のそれで受け止め

るが、ヒビが入った。

教師たちは当然ビビる。既に警備員には通報されているようだが、然し無謀な事をしてくれる。

「ちよつと!! 死にたくないなら引つ込んで! コイツらは本気で殺しにくるんだよ!
! 狙いはモーリッツ達だから、悪いけど関わらない方がいい!」

巻き添えになっている教師を気遣うモーリッツ。

若干腰が引けているがまだ立ち向かう教師。

銃弾が暫し、銃声と共に飛び交う。

全部ありつたけ叩き込んだのか、拳銃をしまいこみ、再びこちらに向く。

そして、まさかの事態になった。

「ちよつ……!?!」

全員、まさかのガイアメモリを取り出した。見たところ、さつき回収したやつか。

やり方を知らないはずなのに、平然と使おうとしている。

「あんたら、ガイアメモリ使う気なの!?!」

副作用も知らない、効力も分かってないのにいきなり実戦に使うのか。

正気の沙汰とも思えない。モーリッツもエッジドーパントに振り回されているのは
言えないが。

だが、男たちは当たり前のようを使用した。
ボタンを押し込み、構える。

フィンガー！

マスカレイド！

エッグ、チキン！

クラブ！

それぞれ、自分に躊躇わずに突き刺した。

そして変異するドーパント。現れる四体は、異形だった。

マスカレイドはまだいい。

服装は変異せずに、頭部が黒く変色して、白い百足がへばりついたような模様の顔になった。

クラブは上半身が蟹に似たシルエットに変化。

分かりやすく言えば、茶色の蟹の着ぐるみか。

下半身はそのまま上半身が蟹になり、腕はハサミに変化している。

親子丼！ と軽快に叫んだそれは雑なもの。

身体に変化はなく、頭部が大きな顔のある丼になり、お手元と書かれた割り箸を構え、
邪悪に舌を出して笑う表情が腹が立つ。

フィンガーは端的に言えば巨大な左手。そのまま、人間の左手が鎮座して拳を握る。これは酷い。ただの怪物になってさえた。

「原型がマスカレイドしかないんですけど……」

モーリッツが絞り出した答えがそれだった。

なんと言うか、やる気が無くなる。またろくでもないガイアメモリを使ってるようだ。

教師たちも絶句している。

侵入者が一人は悪の戦闘員に、一人は井、一人は蟹の着ぐるみ、一人に至っては単なる巨大な手その物なのだ。

どう、リアクションしろと。弱体化しているようにしか見えない。

指、仮面舞踏会、親子丼、蟹。これが追跡者の使用したドーパント。

……敢えて言おう。彼らの名誉のために。

決してふざけてなどいない。寧ろ外見に反して危険なものが多かった。

それを、モーリッツはこれから知る。外見で判断すると、危ないと……嫌でも理解するのだった。

ドーパント解説。

フィンガードーパント。

フィンガーガイアメモリを使用して変異する、巨大なドーパントの一種。

見た目は完全に人間の左手。乗用車並の大きさがある。

おおよそ、強そうとは思えないがこう見えて握力が異常に強い。

その為、握られたら最後生身ではそのままぐしゃつと潰されて即死する程のパワーがある。

ロケットパンチやデコピンなど指を使った多彩な戦いが得意である。

クラブドーパント。

クラブガイアメモリで変異したドーパント。

分かりやすく言うなら蟹の着ぐるみ。

甲殻類だけあり打撃には滅法強く、ハサミによる切断攻撃が得意。

口から泡を吹いて襲ってきたりもする。威力は低いが、牽制や目眩ましにはなる。弱点として加熱に弱い。熱せられると真っ赤になって倒されてしまう。

解説終了。

裏側の出来事

……少し、時間を遡ろう。

鍊太郎は今まで、多くのガイアメモリを科学者に渡してきた。

研究と言う手前、厄介な事を警戒して使えないものを選んで渡していた。

だが、お忘れではなからうか。

鍊太郎は自分では使えない、または用途が分からないもののみを譲渡してきた。

確かにその判断は正しく、今回も追っ手が使用したのは彼らが使うような戦闘用ガイアメモリではない。

つまりは戦力とするならば、彼らが使うエッジガイアメモリやバリアガイアメモリ、ウオーターガイアメモリの方が遥かに強力無比。

親子丼やら仮面舞踏会やら蟹やら指やらでも、一応は戦えるが使い方はピーキーその

もの。

然し。

鍊太郎は自覚がなかった。

生産者、大山鍊太郎。ガイアメモリを作れる現状唯一の能力者。

彼と言えども果たして、己の作るガイアメモリを正しく判断できているのか。

生まれつきの才能は学園都市にて初めて、本格的に使用を開始している。

それまでは手品程度の把握しかしてない素人が、完全に自分を理解していると思えるだろうか？

答えは、否だった。彼は自分の勝手な感覚的基準で選んだのみ。

自分が使えるのか。常識的に考えて戦いに応用できるのか。

死線も大して知らない学生がイメージだけで選別して渡ってしまった。

当然、彼ですら自覚なく渡ってしまったガイアメモリは多々ある。

問題はそのガイアメモリが、人間以外にも作用すると言うことを、誰も分からないままだったこと。

生きている人間に使えない、研究にすら役に立たないガイアメモリ。

ガイアメモリは人間を変異させる道具と言う思い込みがあった。

そう言うものは科学者たちは杜撰に管理していた。元より解析不能の代物。

適当に放置されるように管理されていたガイアメモリの一部が、いつの間にか消えていることに誰も気付かない。

何故なら無くても困らない。無いことすら記憶の彼方に忘れ去る。

どうしてもこの道具の本質が気になった一名が、余っていたガイアメモリを無断借用。

そのまま、外部に持ち出しパンドラの箱を開けるような実験を始めてしまう。

好奇心を我慢できない愚かな科学者。その結末は言うまでもなかった。

その人物は皮肉なことに、真実の一端に最初に辿り着いた人物でもあった。

乙の単語を刻むガイアメモリを、そんなバカなと思いつつ残酷な方法で実験してしまう。

結果的に、学園都市で最も早い人間以外のガイアメモリ適合者は、好奇心を満たすために誕生してしまったのだ。

彼女は悪くない。そう、本当になにも悪くない。

強いて言うならば、命の尊厳を踏みなじり、静寂を奪われてさ迷うことになった。

ただ、それだけの話で。そんなものは学園都市には腐るほどある。

例えば、第三位のクローンとか。それを五桁殺した第一位とか。

そのクローンに実は少しだけ関わっていた第五位とか。

闇の底では大して面白くもない、ありふれた話である。

当人からすれば、トラウマも良いところだった。

第一位は取り返しのでないことを仕出かした。

故に誓った。絶対にもう彼女たちを殺さない。償いにはならないだろうけれど、何かをしたい。

そうしたことで打ち止めと呼ばれる上位個体を彼は引き取り、口では文句を言いながらも世話を焼いている。

彼女に汚い手で触ると彼は激怒する。彼女は彼の聖域であり、現状最も大切な守りた者。

誰であろうが何であろうが、あの存在を穢す相手は殺してでも守る。

そういう固い決意をするし、第三位はクローンたちにちよっかいを出すと反撃する。

普段の温厚で常識的な判断を一切やめ、超能力者特有の暴力で全てを殲滅しても、後悔はないと言いつける。

間違っているでもいい。過ちでもいい。死なせるよりは、これ以上無意味に命を消耗されるよりはずっといい。

場合によっては、過ちを犯した第一位と結託だつても構わない。

思うことはある。許す気もない。

だが、もしも約束を交わした妹が死ぬなら、それよりもプライドを捨てる。第一位もそれは変わらない。

プライドよりももしも、彼女たちが自分ではどうしようもない場合は、頷くかもしれない。

今の彼はまだ、最強で居られる。弱体化しても尚、そうしないといけない理由がある。学園都市は命を弄ぶおもちゃ箱。科学者たちの悪夢の巣窟。

細かいことは気にしないで、好き勝手に自分の好奇心を満たしては利益にしていく外道の集団。

彼女の誕生は歓迎されないものであった。過失がない彼女は生まれてしまった。

世界の摂理を半端に引っくり返して、出来損ないの命を引き摺って。

恐怖した科学者が逃げ出す前に、彼女は……いや。

彼女を象るガイアメモリは判断した。

足りないものが多すぎる。

欠損した身体。必要な記憶や感覚、自衛するための能力に、それに使用する演算機能。補わなければ。幸い、それが可能なガイアメモリをその人物は持っていた。

メモリ。ダミー。コンピューター。ゼロ。リバーズ。

記憶の記憶。偽物の記憶。電子機器の記憶に、虚無の記憶。再生の記憶。

必要最低限を自力で吸収、身体を構築して動くために補強する。

鍊太郎が使えないと判断した役に立たないガイアメモリ。本当は違った。

役に立たないのではない。役立つ場面が極端に狭かった。

片っ端から飲み干す、補う。それでも足りない。

次第に関係無いガイアメモリまで、求めていた。逃げ惑う科学者に、言う。

「よ……………ぜ……………」

ガイアメモリを寄越せ。お前が行った行動の責任を取れ。

逃げるな。お前がやったんだ。お前が殺ったんだツ!!

「い……………ぎ……………ぜ……………」

責任を取るのは道理だろう。

まさか、逃げるつもりか？

幼い子供を殺しておいて。無責任に、捨てるのか？

落ち度のない相手を殺しておいて、そんなことを許すと思うのか？

ふざけるな。ふざけるな!!

「……………ぎやああああああああ!!」

……………愚かな科学者。その末路は、相応しいものだった。

ある廃墟の隅で殺人の復讐を行われ、然し法で裁くには無理がある。

何故ならば、犯人が持っていた血塗れのガイアメモリを奪い尽くして、ふらりと立ち上がったそいつは。

殺されている、少女だった。

これから、どうしすればいい？

居場所もない。宛もない。そもそも生きてすらいない。

途方に暮れるは、生きた屍。魔術と呼ばれる連中ですら思わず目を背ける半端な命が起き上がる。

悪意で死んで、悪意で生き返る。何とも救えない彼女の行方。

見れば誰もが目を疑う。生きるはずもないそいつは泣いた。

なぜこうなった。なぜこうならないといけない。

自分の不幸を自覚する。嗚呼、なぜ彼女なのだ。自分に罪があるのか。

無能力者だからか？ レベル0だから、死ななければならなかったのか？

思い出す生前は、それなりに満たされた幸福な時間だった。

もう戻れない。人を殺した。殺してしまった。大罪を犯した。

悲しい慟哭が、廃墟に響く。

そんなとき。生きる屍に、善意が忍び寄る。

騙す善意を騙る悪意ではない。本当の善意は、手段など選別しない。

本人には何も悪くないのに、起きてしまった悲劇から導く救いの光。それは上条当麻には決してできない、出来るわけがない方法で。

生きた屍に、その善意はこう問いを投げた。

——生きたい？

呆然とする生きた屍は涙を瞳に浮かべて何度も頷く。

全てを失った。失った上で挙げ句に生き返り、この様だ。

一体何をすればこんな仕打ちを受けなければならぬ。

分からない。何もかも、もう分からない。

どうすればいいのかも、どうやればいいのかも。

善意は聞く。過去はもう、取り戻せない。

死んでしまった扱いの生きた屍は、居場所がない。

でも、やり直しは出来る。新しい存在として。

その気持ちだが、絶対に諦めないで生きることには執着すると、約束できる？

最後にどうにかするのは自分の感情。まだ、生きることが諦めないと、誓うなら。

逃げ出さずに、絶望せずに、君自身の未来を新たに切り開くなら。

自分で明日を作ると言うのであれば。

一時の仮初めの立場を、貸してあげてもいい。

最後まで面倒を持つ。君が自立するまで何度でも。

君がこの不幸に、打開を。脱出を。

救いを求めるのなら。代わりに、終わりまで責任を持つ。

半端な救いは、意味なんか無い。無責任な救済は、相手に失礼なだけ。

偽善者と言いたいなら言えばいい。

その通りだ。偽物の善意、否定はしない。寧ろ肯定する。

それでも、善意が無ければ学園都市はただの地獄。

地獄にだって、一つくらい善があつたって、良いじゃないか。

故に、善意は聞く。どうしたい？

生きた屍は要求する。

地獄はもう嫌だ。戻れないならせめて、新しい未来がほしい。

生きたい。全部過去は捨てるから。自分の現実を受け入れて、前に進む。

だから、助けて!! そう、囁れた声で叫ぶ。

善意は言った。分かった、じゃあ君を全力で助ける。

君がそうしてほしいと願ったのだから、途中下車はもうできない。

何故なら、君が背負ったものはとんでもなく重たいモノ。

けれど、絶対に生きられる。存在を許される、認めさせるだけの効力があるモノ。

大丈夫、もう安心していい。

君は生きていい。未来を進んで構わない。

自分の足で、自分の生きる明日を作り出せ。

その支援を、影から応援していく。

君の居場所を、提供しよう。仮初めの名前と、止まり木の宿を。

君の、今から教える名前が、君の今の名前。

そう。その名は……。

「僕の名前は、藍花。藍花……悦」

人物解説。

藍花悦。

学園都市のレベル5、序列六位の名前。

その正体は不明であり、全てにおいて謎に包まれている。

少なくとも風紀委員の権限でも検索不可能。

藍花悦を名乗る人物は過去に何名も存在しており、彼女もまた藍花悦の一人に過ぎない。

この藍花悦は少々特殊な事情らしく、仲介に人間が立ち会っておらず、どうも機械を通じて別の藍花悦と接触した模様。

藍花悦は学園都市における、ピンチになった人々に名前と必要なモノを貸し出すという意味の分からない奇特な事を繰り返している。

他のレベル5が言うには、ロリコンは一度別件で世話になったらしく。

垣根は相手すると面倒臭いので関わりを避けている。

美琴は何でも、悪党から救った少女の関係で大きな借りがあるらしい。

ビーム美女は臆病者の偽善者と蔑み嫌っている。

お嬢様は、相変わらずよくやると呆れているようである。

ナンバーセブンは、あいつのことは信用できるので問題ないと笑って豪語する。友人だそうだ。

と、意外と顔が広いようだ。但し、世話になった連中は絶対に口を割らない。というか、割らせるのは恐らく無理だろう。物理的に。

本作に登場する藍花悦は、歴代藍花悦の中でも戦闘の意味ではレベル5に匹敵しており、自身の言動に説得力を持たせている。

ナンバーセブンと同じく訳の分からぬ多才能力に近い能力をポンポン使うため、藍花悦は多才能力だったのかと騒がれるほどだが、真相は不明。

彼女が言うには、ナンバーセブンは恩人の一人であり大山鍊太郎は、自分の兄のようなものと言っている。

尚、別の藍花悦から聞いたのかどうかは定かではないが上条当麻を毛嫌いしており、出会ったらず先ず襲いかかる。

いわく、無責任に救済を繰り返す彼に苛立ちを覚えるらしい。

解説終了。

幻想殺しは殺虫剤ではない

知り合いの学校で対峙するモーリッツ。

少し離れた目の前には親子丼と左手、戦鬪員にカニの着ぐるみ。

数では不利であり、況してや此方は……。

(どうするかな……。モーリッツ的には、正直気込みは良いけどめっちゃ窮地なのは認めるしかないわね。怖い、怖いけど……。誰かに殺されるほど、恨み買った覚えはないよ、本当に)

校庭でにらみ合いをしているが、周囲は邪魔になっっている腰を抜かした教師たちがいる。

助ける気は更々ないが、死なれたら目覚めも悪い。避難しろとは忠告してる。

ドーパントとなった追っ手と戦うのは成り行きとしては兎も角、普段とは状況が違

う。

精神感応が連中に効かない。何時もなら、能力込みで争うが今回は極めて不利。

モーリッツは確かに精神系統の能力者の中では腕っぷしは強い。

それは、強能力者として自分の能力を正しく理解し、使用できる技量。

過信せず決して相手を侮らない慎重さと疑り深さがあるからこそ。

モーリッツの精神感応は最大10人まで同時に思考を読み取れる。

至近距離なら尚更詳細に正確に高速に解析できるし、受信専用ゆえに此方の思考は読

まれない。

よく、モーリッツの能力を心の盗み聞きと揶揄される。

彼女の能力は一種の特化で、本来は双方で思考の交換が出来るのがテレパスの能力。

モーリッツの場合は、受信のみのせいで、強能力者として出来損ないと笑われる。

モーリッツはそれが嫌だった。どいつもこいつも彼女に言った。

モーリッツが常に誰かの心の中を聞いている。

そういう風に常日頃言われてきたせいで、人間不信になつて言われた通り盗聴を繰り返すようにした。

返すようにした。

どうせやつてないと言つても物証がないから信用しない。

逆にこれみよがしに、電磁バリアを用意してモーリッツを信じてくれないと態度で示

す。

だから、スキルアウトにいる。この能力を悪用して、好き勝手に過ごすために。そんな使いなれた精神感応。乱闘にはもってこいで、思考を読み取る事に慣れている彼女はそれを難なく行える。

経験値も十分あった。聞いて、推測して観察して予想して、行動に持っていく。

その作業が精神系統の能力者はしない。その前に頭を弄くって終わりだから。

モーリッツはそれを出来ないから物理で半端に強い。それが理由だった。

然し今回は部が悪い。

ドーパントと戦うのは初めてで、身体的に向上した能力以外は鍊太郎すら分からない能力と来た。

此方は複数の能力をガイアメモリを切り替え戦えるが負担がある。

数のアドバンテージを奪われている以上は休む暇などない。

消耗したら、終わりだ。袋叩きにされてモーリッツは死ぬ。

(逃げる? でも、何処に? 頼れる連中なんかいない。スキルアウトを助けるような物好きなんか……)

どうする。応戦するためにここに来た。

だが、ドーパントに変異した時点で目論見は潰えた。

打開するにも暴走する鍊太郎は負担を考える余裕がない。

どん詰まり。いつそ、柳と杠を巻き込むかとも思うが止める。

何が良くて天敵に頼るのだ。自分達は自分達で戦う。そういうのがスキルアウト。

助けを求めれば来るだろう。然し、よく考えればそれは鍊太郎が心配だから。

鍊太郎は謝ったじゃないか。副作用の事を、自分の責任だと。

そんな風に背負ってしまう彼を、仲間と認めないほどモーリッツは酷くはない。

いい加減、信用はしている。少なくとも、杠以上には。あのロリコンは絶対信じない。

姉妹は彼の味方。モーリッツの友達でも何でもなし。

スキルアウトに任せると言ったのは自分達だろう。ピンチになったら直ぐに呼ぶなんてカッコ悪いのだ。

(良いじゃん。一丁前に、言ったことの責任は持つてことだよ)

信用されなくてもいい。こっちは変わらない。鍊太郎を庇うのは仲間として当然だから。

だから、立ち向かうのは自分だけ。怖くても、ビビっても。逃げられない。逃げたくない。

にらみ合いを続けると、マスカレイドが動いた。

武器はない。徒手空拳らしい戦闘員は、走り出してこちらに来る。

運動神経は変わってないのか、多少速くなった程度。

問題は後続だった。フィンガーが巨大な拳になって、真っ直ぐ突っ込んでくる。

(ロケットパンチ!?)

宛ら巨大ロボットの必殺技か。迫り来る鉄拳が背後に続く。

どんな原理で動いているのか、若干浮遊していやがった。

カニの着ぐるみは、両手がハサミになりながら泡を吐き出して牽制して向かってくる。

親子丼に至っては一番最後に動いたのに、残像が見える速度で移動。真っ先に接近していた。

目を擦らないと見えないほど、然しギリギリモーリツツにも目で追いかけることができた。

お手元と書いてある割りばし宜しくの長い棒切れを振り回して、気がつけば眼前。

(!?)

一瞬、反応が遅れる。一閃される一撃。

咄嗟に右に避けると、牽制の泡に自分で突っ込んでしまった。

顔面にシャボン玉のようなそれがぶち当たる。

「みぎやっ!?!」

弾ける泡に吹っ飛び、仰け反って校庭をバウンドして転がる。

一閃を回避したが、起き上がる頃にはマスカレイドの蹴りが襲う。

腕を交差して防御したが、衝撃でまた体勢が崩れ、ロケットパンチが横合いに飛び退いたマスカレイドに変わって迫る。

(ちよ、これは無理!!)

あんな大質量の拳を受けたら、モーリッツの華奢な体躯など粉碎されてしまう。

こんな無理矢理な体勢では、直撃する。

ダメだ、そう思った。間に合わない。

回避も防御も、コンバットナイフにガイアメモリを装填する前に引き飛ばされる。

見事な連携と言えよう。親子丼が速度で攪乱、カニが牽制、マスカレイドが補助、止めはロケットパンチ。

完璧なコンボだった。お手並みは大したものだが、生身の少女にやることじゃない。それだけ殺意が籠っていた。

(嘘だよ……一方的にタコ殴りにされただけじゃん)

勝てるか。身体的に能力は向上しても数に勝てるわけがない。

結局数か。数字か。こんな子供に大人が何人もなにも言わずに襲ってきて。

最低だ。最悪だ。救いがない。モーリッツは悔しかった。

(ごめん、先輩……。多分無理っぼいや)

頑張ろうと思った。けど、案の定ダメだった。

諦めるのは早い。当然だ。スキルアウトは所詮負け組。

現実を知るから、誰よりも理不尽を受け入れる事に抵抗がない。

モーリッツは投げ遣りに錬太郎に謝った。彼の思考は相変わらず怒りだけ。気付いてすらいない。

暴走している相手に言うだけ無駄か。雫を待たせておいて、この様は笑えない。

でも、後悔はない。見栄でもいい。カッコつけていい。モーリッツたちはそういうもんだ。

自分の譲れないことは、譲らない。絶対に誰にも。

仲間以外は絶対に信じない。それがモーリッツの譲らないこと。

せめて、錬太郎を切り離す。巻き添えはいけな。ここはモーリッツが人柱になって、時間を稼ぐ。

彼だけは死んでも助ける。庇うと決めた以上は筋を通す。

「先輩、逃げてよ。モーリッツが時間稼ぐから。怒つてないで、早く……」

一瞬の間でも声に出しておく。気づいて、お願いだから。

聞いて、この声を。じゃないと錬太郎まで……。

「——うおおおおおおおっ!!」

雄叫び。焦るような、それでいて怒り狂うようなそんな声が聞こえる。

なんだ？ 死に際の声にしては聞き覚えのない声。

突き飛ばすように、衝撃。横からタツクルを受けた。

というか、突進。凄い力で小柄なモーリッツをブツ飛ばす。

「べぎゃ!?!」

不安定な体勢の所に不意討ち。余計に校庭の地面に後頭部から突っ込む。

ロケットパンチは、そのタツクルして一緒に避けた誰かを横をすり抜けていった。

で、倒れるモーリッツ。自分の上に加重される。

鈍痛に顔をしかめて、何事かと思わず閉じた目を開ける。

すると……。

「おい、大丈夫か!?!」

……自分を見下ろす知らない顔。

心配そうに見ている、ウニみみたいなツンツン頭の男子生徒。

黒い学ランにオレンジのインナーの、誰こいつ。

顔近くない？

「……」

待て。何がどうなった。

モーリッツ、横たわる。こいつ、自分の上にいる。

直上。真上。近い。……つまり？

「みぎやあああああ……」

「ぐふあつ!？」

押し倒された。顔を刹那で真っ赤にしたモーリッツ、思わず絶叫。

見知らぬ男に突然襲撃。襲われた。押し倒された。こんなお外で。

で、恐怖のあまり左手でツンツン頭の顔を殴る。頬にめり込む拳。

横に飛ぶ男。慌てて立ち上がるモーリッツ。混乱と羞恥で頭がパニックになる。

拳げ句にこいつも精神感が効かない。思考が聞こえない。

「な、なによあんたは!?! あいつらの仲間!?! いきなり何するのこの変態!」

押し倒された事実、身震いをしながら怒鳴る。

よろよろ起き上がる知らないツンツン頭は、頬を擦って此方を振り返る。

「い、いや誤解……」

「喧しい!! 死ねロリコン!!」

よくわからないがこの乱入してきたのは連中の仲間。

どさくさ紛れでモーリッツに襲いかかったロリコン野郎、即ちぶつ殺す!!

「先輩、こいつロリコンだ!! 本物の性犯罪者! ぶつ殺すから力添えして!!」
追っ手が構わず突っ込んでくるが、そっちはもうどうでもいい。

邪魔立てしてくるロケットパンチは適当に避けて、親子丼は五月蠅いからナイフから出した粘液で足止めする。

マスカレイドは殴りかかるので怒りのままに蹴り飛ばしてフェードアウト。

カニはなぜかツンツン頭を狙うが知るか。一緒にぶつ殺す。

「いや待ってお嬢さん!? どう見ても俺コイツらに襲われてるよね今現在! 冷静になつて落ち着こう!?! そもそも俺はロリコンじゃ」

「喋るなアツ!!」

涙をエメラルドの瞳に溜めたモーリッツは、ゴキブリの最大出力で取り敢えず撃退。

ロリコンはゴキブリに喰われて死ぬと怒りで逆上した乙女の逆鱗が炸裂した。

コックローチ、マキシマムドライブ!!

恐ろしい単語を聞いたのか、ツンツン頭の顔色が真っ青になる。

コックローチ、言い換えればゴキブリ。

台所黒い旋風によい顔をする奴は早々いない。

で、最大出力を放つと……。

「ぎゃあああああ……!?!」

それを見ていたモーリッツが自分の腕を見て悲鳴をあげた。

ツンツン頭、上条当麻も絶叫した。

追っ手たちも思わず動きが硬直した。

校舎から見ていた生徒も雄叫びをあげた。

言うなれば見ていた、放った、受ける全員が大声を出した。

なんと小さなコンバットナイフから次から次へと大量のゴキブリが現れて、ポトポト校庭に落ちて大移動を始めていたのだ。

幸いモーリッツの腕には発生せず、あくまで刀身から発生しているらしい油虫の群。

タイムリーで言うなら、某バツタが銀色になつて食い荒らしていたのは皆様知っているだろうか？

金属のバツタが敵を食い尽くす、あの災害みたいな光景。

その、黒くてゴキブリになったのが同じ物量でわらわら出てきて周囲を埋め尽くしていた。

正しくマキシマムドライブ。ゴキブリの本懐、大量発生。悪夢の光景だった。

金属のバツタなら、カッコいいで終わりだが……黒いゴキブリの場合は単なる地獄絵図。

ながら思い出す。

然しですね、皆様。イマジンプレイカーは、殺虫剤じゃないんです。

知っているとありますが、相手の継続的な攻撃の場合、彼の右手は大本に触れないと完全に消すことは不可能。

決め台詞、その幻想をぶち殺すを行わない限りは、このナイトメアは収集しません。で、ヒーロー上条当麻と言えど大量の迫り来るゴキブリ相手にそげぶをする勇氣はございません。

右手は頑張つて処理してます。でも相手の物量は右手さんより遥かに多かつたんです。

半狂乱のモーリッツが振り回すコンバットナイフから湧き出る無限の悪夢。

上条当麻の前にわらわら迫る、這い出る混沌には、精神が太刀打ち出来ないのです。

見てください。ドーパントがゴキブリの波に飲まれて次々と爆発して倒されています。

上条当麻も速攻で逃げようとして……ああ、自前の不幸で躓いて転んでしまった。

先生たちも避難してるし、広がった黒い絨毯は上条当麻一人に集まっている。

当然だ、アーウエント・モーリッツ・ヴェルデイにとつて、上条当麻も敵だから。

さて、じゃあそろそろ何時ものあれを聞くとしよう。

そげぶ以外の、もうひとつの決め台詞を。

「不幸だあああああああ………!!」

用語解説。

幻想殺し。

詳細は恐らくは知っていると思われるので、此処ではガイアメモリに対しての幻想殺しについて解説する。

結論からすれば、幻想殺しはドーパント及びガイアメモリの天敵である。

あらゆるガイアメモリとドーパントは、鍊太郎の能力の一部。

それが道具か、あるいは変異した怪人かの違いに過ぎないので一律そげぶされて破壊される。

右手で殴る、ドーパントは死ぬ。以上。即死攻撃を上条当麻は持っていることにな

る。

例外が、幻想殺しの弱点。処理速度以上の物量で攻められる場合。

コックローチのマキシマムドライブが一例であり、大本を破壊しない限り物量で負けてしまうので対処が難しい。

あと上条当麻は不屈の闘志を持つが恐らくは感覚は一般的。

リアルなゴキブリの無限増殖は相当堪えたらしく、姉妹と同じくトラウマになってしまっている。

ヒーローにはゴキブリの無限増殖が効果的。上条当麻を倒したいならコックローチガイアメモリをオススメする。

言っておくがガッツで超えてきた場合のそげぶパンチが威力があがるので注意。

解説終了。

動き出す裏側

結局、襲撃のその後は。

先ず、ゴキブリの津波によって上条当麻は飲み込まれて身体中をかじられた。一部は幻想をぶち殺したのは良いがやはり物量には勝てなかつたらしい。

いわく、

「気色悪い上にインデックスさんよりも遥かに痛かつたんですが!？」

とのこと。痛いに決まっている。

因みにゴキブリと比べられたと激怒したシスターさんによるかじりつきも追加されたのは言うまでもない。

不幸だ？ いい加減同棲している彼女かミコチューかどっちかに決めない彼が悪い。
閑話休題。

上条当麻は病院に送られ、検査したが心配していた感染症などの心配はなく、無事だった。

発生させたアーウエント・モーリッツ・ヴェルデイはドーパントが解けた鍊太郎共々担ぎ込まれた。

此方はより重症で、消耗による風邪に似た発熱を発症。

入院などにはならないものの、現在も自宅療養を余儀無くされている。

尚、雫は無事に保護されており、事が事だけに警備員なども本腰を入れて捜査した、らしいが……。

「詳細不明!? どう言うことですか!!」

翌日。鍊太郎の部屋にて。

騒ぎを聞いて大慌てだった姉妹が看病をして甲斐甲斐しく世話を焼いている最中。

柳に、警備員から一報が入る。捕まった黒服たちの聴取が終わった。

同時に粗方捜査もしておいて、身内なので説明できる範囲で聞けばこの有り様。

結果は、詳細不明。何でも事前に薬品投与による洗脳と心理操作をされており、本人たちは操られていた。

決して怪しくないその辺のスキルアウトが犯人だった。連行された過去の記録もない。

学園都市だからこそ出来る怪しいお薬による襲撃。

結論は、闇の中。事故つたそれも盗難車を使う、犯人たちは操られ、何も覚えてない。少なくともガイアメモリの使用方法を知っていることと、それなりの規模の相手だと言うことだけが判明した、後味の悪い襲撃事件。

アフターサービスまでバッチリときた。これは警備員に追跡されるのを想定した前提の計画。

そう考えるのが妥当だろうか。

「そんな事だろうと思つたわ。学園都市の深淵は覗きたくないから、それ以上捜査しないで。どうせ、また来る」

近所だから一緒に面倒を見ると、モーリッツは自宅から雫の部屋で寝ていたが、杠が話を聞いて誘拐してきた。

現在は身の危険を感じつつ、姉のベッドを借りて寝ていた。

布団に潜る彼女は慣れない匂いに緊張しつつも、額に張った冷却シートを交換する。やはり使えない能力の行使は心身にダメージを与える。

鍊太郎もぐったりしつつ、ぼやいた。

「マジで勘弁してくれよ……。此方の身体が持たねえ」

消耗は鍊太郎のほうが激しい。今も起き上がるのも辛いようで、虚空を眺めては眩

く。

これが科学者の言っていたことか。普通の連中以外にも狙われるとなると、暗殺の対象の気分になる。

無論、言うわけにもいかない。ガイアメモリをばら蒔いたことは柳は陽動程度なら許すとは言うが、

「あんまり捨てないでくださいね、お兄ちゃん。最近、スキルアウトや一般生徒の中でも有名になりつつあるんです。ガイアメモリが、高値で取引されているとかいう話も聞きました。研究所が要らないものを廃棄する際に、闇ルートか何かに流れてしまったようですが……」

わざとやっているのか、レア物扱いで裏取引されているとか風紀委員に入ってきているという。

連中も研究のためなら何でもする。まさかこれもその一貫かと思うが鍊太郎は思考を放棄。

正解であるが、彼にもそこまで行けばどうしようもないのも事実。彼はミコチューではない。物理でどうにか出来る立場ではないから。

電話を切った柳が雫に説明した。野郎たちは邪魔になるので、見舞いに大量の食料と医薬品を置いて帰っている。

現在は、五人しかいない。

暴走の一件は鍊太郎の記憶になく、完全に吞まれていたとみていい。

エツジガイアメモリ。暴走する多才能力を他者に強引に付与するガイアメモリ。

試しに柳が使うも、手にした瞬間。

「痛!..」

静電気のような音をさせガイアメモリが自衛していた。

触ることすら拒絶しているのか、鍊太郎以外が触れると皆こうなる。

バリアガイアメモリは起動しないのに対して、エツジガイアメモリはそこまで強く拒否する。

攻撃的と言うか、なんと言うか。戦闘用ガイアメモリは想定以上に強力と見る。

話を聞いて、鍊太郎は謝罪してきたのは気にしない。ああしないと本当にモーリッツは死んでいた。

雫も無事だったか分からない。故に、仕方無いのだと彼女は受け入れた。

モーリッツはこういう厄介なことは増えると思う。素直に皆に言った。

一度でも強硬手段を用いたら、後続は必ず来る。

どうせ追跡も不可能。とかげの尻尾切りになるだけと言いながらも、雫にも警告する。

「つつきー。もう、四の五の言えない。戦えるようにしないと、モーリッツたち邪魔だから殺されるわ。……今更先輩追い出しても、関係性があるから逃げられない。多分、不細工たちもそうだけど。知られているんだらうね、モーリッツたちのこと。同じスキルアウトのチームである以上は、庇うだけじゃダメだよ。ぶつ殺す気概で抗うべきだとモーリッツは思う」

「……………やりたくないよ。わたしは、死にたくないけど……誰かを殺すのも嫌」
雫は首を振った。叩きのめせばいい。それ以上の過剰な暴力は怖いのも痛いのも知っている。

故に他人にしたくない。しつぺ返しに戻るのを避けたい。お礼参りが怖い。

経験上、雫は相手に攻勢に出るのを極度に避けたいと思う。

「……………申し訳無いです。風紀委員でありながら、こんな事態になるまで間に合わず」
「お姉ちゃんがその場にいたら全員灰にしてやるのに！ 弟君を殺そうなんて百年早いんだよ！」

項垂れる柳と憤る杠。

大能力者ならばドーパントにも対抗できるだろうが、生憎と学校の違う姉妹はここから一番離れている。

連絡してくれば助けに行つたと言われても、モーリッツは適当に誤魔化したか信用

はしない。

相変わらず、死にかけてもそれだけは言わない。争わないだけで、信じる信じないとは別の話。

モーリッツを助けたい訳じゃないし、勿論スキルアウトの為でもない。

家族のために過ぎない。友達でも何でもない奴に助けてなど言いたくないのである。鍊太郎は既に認めた。だから、命懸けでも文句はない。

だが、杠と柳は所詮風紀委員の面々。簡単には、彼女たちはモーリッツは近寄らない。「つつぎーの気持ちはわかるわ。けど、そんな相手に通じないって分かるじゃん？」

「……………そうだね。リッツの言う通り」

「けど、つつぎーはそれは出来ない。したくない」

「……………うん」

モーリッツはぶっ殺してでも生き残る。身を守る。仲間を守る。

雫は過剰なことは控えたい。追い払う程度にしておきたい。

この場合甘いのは雫だが、無理もない。

いつも痛い思いばかりの雫は相手を倒すほどの反撃の意思が潰されて欠落している。横になるモーリッツに、包丁でリングを剥いている雫はどこか消沈した顔で俯いてい

る。

制服姿の彼女は、今日も右頬にガーゼをする。

その傷跡が、雄弁に語るの、雫が長年叩き込まれている恐怖や痛みとの記憶。

反抗は過激の一途を加速させるといふ経験。避けるのに何かおかしな部分はあるだろうか？

「死にたくはねえけど、あんなのはごめん被るわ。マジでさ、俺そのうち死ぬんじゃないかな」

「縁起でもない、つて言えないよね……」

鍊太郎も荒事にはまだまだ慣れないし、殺される日常など真つ平ゴメンだ。

こんな消耗するまで抵抗しても、大本には結局届かない。また来る。

どうすればいいのか。警備員も分からない、風紀委員も後手になる。

彼らは悩む。日常に生きる表の彼らは、悪意に対応できなかつた……。

だが、彼女は違う。

闇にある程度は手が届くし、情報だつて手に入る。

「ん？ どうした？ 出掛けるのか？」

ある男に、彼女は問われた。

高級マンションの一室、毎日のように開けて留守にしがちな家主に変わつて居候する彼女は、家事をてきぱきとこなしつつ、恩人に拾われて平穩に過ごしていた。

然し、そうも言つてはいられない。どうも、彼らがピンチのようだから。

怪しげなローブを被る彼女は笑つて答えた。

「ああ。悪いね、軍さん。ちよつと野暮用さ」

「おう、そうか。気を付けていけよ」

「そうするよ」

黒い変質者は、白いハチマキに特攻隊のようなシャツと学ランの男に告げて出ていく。

情報は、あの人から受け取つた。

彼女にはしたいことがある。生きる場所を作る。そして生きていく。

この学園都市の隅つこで、おとなしく、慎ましく。細々と。

「根性入れていけよ。生きるためにな」

「分かつているとも。軍さんほどじゃないが、仮にも僕とて拝借しているんだから、レベ

ル5を」

出ていく彼女に、恩人は詳しく聞かないで見送る。

知り合いの友人が路頭に迷う少女を拾った。訳ありの、居場所がない少女だった。

友人が言うには、邪悪な悪の組織によって甦ってしまった彼女。

元々は半分死んでいるような虚弱な女の子らしく。

何時もみたいに助けるけど、暫く匿ってあげてくれと言われた。

二つ返事でオツケーだった。悪の組織に利用され捨てられた彼女を見捨てるほど彼は薄情じゃない。

詳しく聞く必要などないのだ。困っていれば助ける。出来ることがあれば、彼は全部する。

生きたいと願う少女の為に、戦う術を自己流で叩き込み（スパルタで）、特訓と称して日々弟子のように鍛えまくり（間違った方法で）、出来上がったのは友人にも負けない力強い能力者。

根性で彼の一撃を堪えられるまでに成長するのは、教える立場として楽しかったものだ。

……蛇足だが、こいつの鍛え方は我流で根性論だったが、彼女は真面目に根性だけで乗り越えた。

彼女が強いのは、教えた相手が規格外の一人であったから。

パンチ一発で謎の大爆発を起こす男が先生やってるのだ、弱いわけがない。悪の組織に関しては、友人がそっちは此方でどうにかするといっているので一任。レベル5で恐らく最も善人であろう二名に救われたある少女は数時間経過した頃。ある高校の前で、ロープ姿で待っていた。放課後の事だった。

「……ねえ、君が上条当麻って人かい？」

「はいっ？」

知り合いの女子生徒と話ながら出てきた彼、上条当麻にそう問うのは不審者。

夕暮れ時に、真つ黒なロープ姿で彼に用事があるので話したいと申し出た。

「失礼ですが、どちら様ですか？」

顔見知りじゃない、完全な赤の他人と思う女の子らしい声に訝しげに、上条当麻は聞く。

知り合いたちを先に行かせて、背丈の小さな女の子に言う。

「……質問を返さないでくれるかな？ 質問をしているのは僕なんだから」

思い切り苛立つ声で、その場で足踏みした。

途端、アスファルトが派手な音をさせて陥没。

周囲に行き交う生徒が驚いてこちらを見た。

「ちよつ!？」

「言うことを聞くのか、聞かないのか。それだけが今君が言うべきことだよ上条当麻。これ以上余計なことを口走るなら、さっきのあの人たちが血塗れになる。警告は一度だけだ。次は返事をしてよ」

殺気に放つて、脅す。

上条当麻も相応の相手と瞬時に判断して、慣れていたので対応を変える。

鋭く睨み、低く言う。

「あんた、俺に用事があるなら他の奴を巻き込むな。いいぜ、話でもなんでもしてやる。代わりに俺の知り合いには一切手を出すな」

「命令するとは良い度胸だね。それを決めるのは僕だ。君じゃないんだよ、上条当麻。荒事にしたくないなら大人しくしてくれないか。不愉快なんだよ、君みたいな人間を見ていると。僕をイラつかせないでほしい。傷付くのは君じゃなく、君の周囲にいる君の知り合いになるんだから」

単純に上条当麻という人間が気に食わないから周囲に傷つける。

そういう理由だと彼女は言った。

「何なんだよお前……何がしたいんだ」

「五月蠅い。聞いたことだけ答えると云ったはずだ。まだ何か言おうと君の家を吹っ飛ば

すよ」

混乱する上条当麻を引き連れて、ローブ姿の変質者は歩き出す。

背を向ける彼女はかなりイラついているようで舌打ちして、人気のない河川敷に案内した。

心配そうに見ている同級生に愛想笑いを浮かべて対応して、上条当麻は黙ってついてきた。

見たことのない子供みたいな言い分の相手。

ただ、何か言えば本気で実行する気なのは肌で感じる。

背を向けて、立ち止まる彼女は漸く聞きたいことを口にした。

「上条当麻。君の学校に、この前女の子が駆け込んできたはずだ。ナイフを持った、プラチナブロンドの髪の毛の女の子。知り合いでもなんでもないのは事実なの？」

「……？ ああ、あの子か？ 俺は全然知らないけど」

思い出すはゴキブリフェスティバル。ぶるつと身震いして彼は答えた。

全く知らない。面識のない彼女は名前すら聞いていない。

「何で助けたんだい？ 僕には理解できないよ。相手が何なのか君は知らないはずなのに、襲っている相手のことも君は何なのか、分かってないのに。どうして助けたの？」

「……何が言いたい」

暗に責められている。そう感じ上条当麻は先を促す。

己の行動を、他人に責められる謂れはない。悪行をしたわけでもあるまいに。

「ガイアメモリで変異した大人が相手なんだぞ。なんで助けに入るのが間違いのように……」

そして、上条当麻は最大の地雷を踏んだのに気付かない。

その知り得ない単語を口にしたのは、完全な間違いだった。

「待つて。なんでガイアメモリって知ってる?」

突然、振り返り彼女は鋭く問う。

「僕は今、一度もガイアメモリなんて言っつてない。なのに今、君は自分から言っつた……。上条当麻、君は何を知っている? 何故知っている? ……誰からガイアメモリのことを聞いたッ!? 答えてよッ!!」

ガイアメモリ。その単語は、上条当麻は何を意味するかは詳しくは知らない。

知り合いが教えてくれただけ。だが、相手の剣幕は明らかに普通じゃない。

焦りと、怒り。ハッキリと上条当麻は分かった。

彼女は、恐らくあの連中の関係者。

「お前こそ、何を言っつてる!?! あの女の子とお前は何か関係あるのか!?!」

「黙れッ!! 聞いているのは僕だ! 吐け、教える上条当麻! お前は何者だッ!?!」

「お前の想像するような人間じゃないのは確かだ！」

何やら互いに認識に齟齬があると気付いて指摘しようとするも、

「ふざけるな！ お兄さんの敵か！ お前もお兄さんと僕の敵か！！ だったら、ここで始末するしかない……………」

「お、おい落ち着け……………!!」

「落ち着けるか！ なら、今すぐここで死ね上条当麻!! お前は僕の……………藍花悦の敵だ!!」

ロープのフードを取って、顔を見せる少女。

怒鳴る彼女の、その顔は……………。

「……………御坂妹っ!!」

彼のよく知る、女の子によく似ていた……………。

ガイアメモリ解説。

エンジンガイアメモリ。

機関の記憶を内包する複数の能力を使用できる珍しいメモリ。

スチーム、ジェット、エレクトリックの三つの能力を持つているが出力が高すぎるため、反動が発生している。

藍花悦が蒸気、加速化、電撃を使用できるのでどうやら関係しているらしい。

尚、これらは常時最大出力のため、コントロールが非常に難しいが藍花悦は難なく使用している。

解説終了。

偽者との戦い

「御坂妹!? 何してるんだお前!」

「……御坂?」

顔を見せた途端、上条当麻は動揺した。

明らかに驚愕の表情。予想外の反応だった。

御坂妹とは誰かは彼女は知らない。だが、覚えはある。

「へえ……レベル5の序列三位には妹さんとお前は知り合いなんだね。そうか、そうか」
成る程、模倣した相手の顔見知り。知り合いの顔をして襲ってくれば誰しも驚きもする。

彼女は吐き捨てるように独白した。

「やっぱり、お前は普通の学生じゃないね上条当麻。尚更、生かしてはおけなくなった

「よ」

本当に、腹が立つ男。心底そう思う。

こいつの言う、御坂妹という彼女は普通の能力者じゃないから、安易に触れるな。

それは、レベル5における、痛みの記憶だから無闇に刺激してはいけない。

そう、あの人には言われていた。

この姿も、悪いとは思っているけど間借りしている仮初めの外見。

御坂と言う人物は、恐らくは妹と上条麻が呼ぶ存在のお陰で目撃情報が多い。

隠れ蓑という意味では、適しているので使っている。

一応その程度なら、根回しはしてくれている。あの人が、全員に知らせてくれたらしい。

一位は凄く渋い顔をしたが、彼女のことを聞いて今回は特別に見逃してくれた。

三位の御坂という人物も当然知る。悪さをしない限りは構わないと、事情を聴いた上で許可を得た。

無論、本人にもだ。バカしないなら使ってもよいと、許されている。

それだけに過ぎないのに。こいつは、その少女とも顔を知り、関係を保っている。

無秩序な関係性、責任を個人では取れない量の関わり。

どれもこれもが、不愉快な感覚を刺激する。

「本当に虫酸が走るなあ、お前って男はッ!!」

驚きの刹那。隙だらけの上条当麻。

その鳩尾に、一瞬で距離を詰めた彼女は蹴りを一撃、叩き込む。

攻撃に反応はしたが追いつけず、直撃を受ける。

「がはっ!!」

油断大敵。苛立った一発が腹にめり込み、河川敷を転がりながら吹っ飛ぶ上条当麻。

着地した彼女は、雑に乱れた髪型を整える。

「本当ならさ、ただ気になったことを確認しに來ただけなんだよ僕は。別に、お前……いや、君の知り合いに手出しなんか考えちゃいない。単なる脅し文句、のつもりだった。

君が気に入らない奴だつてのは事前に知っていたけど、真意を知りたかつた。それだけだったのにな」

何でこうなつたか。知れたそうにして起き上がる上条当麻に彼女は語る。

無償で彼女を救おうと勇猛果敢に飛び込んだ勇氣ある青年。

そんな風に解釈できるほど、彼女は彼に好意的ではない。

別の方法で救われて、別のやり方で救われている彼女からすれば。

上条当麻の救済は、あまりにも無責任な方法だから認められない。

そのやり方を何故したのか。それがどうしても気になった。

彼に直接真意を聞こうと思った。けど、實際会うと不愉快さが増して我慢できなかつた。

のうのうと自分は日常を謳歌している。その姿に嫉妬したといつてもいい。

お前はなんで日常にいる。お前が助けた人間はちゃんと元通りになつたのか？

世話を最後まで見ているんだらうな？ それが関わつた人間の、救おうとした人間の

最低限の礼儀。

なのに、なぜかこいつは普通に生活している。それらしき相手がない。

どうして？ あの人は、面倒を見ている人間に付きつきりで、自己を犠牲にして世話を焼いているのに。

責任をもつて、真摯に向き合っているのに。

それ以上に救済をしているという上条当麻は、どうして自分の日常を送る？

「上条当麻。君の救済は、無責任に過ぎるよ」

子供のような言い分と分かりながらも、彼女は言わずにはいられない。

自分勝手だとも。意味のわからない言い分でいちやもんをつけて襲つてきた。

上条当麻からすれば、チンピラと大差無い。

予め、ある程度は分かっていたのに、實際会えばこの有り様。

滅茶苦茶な難癖と自分でも思う。

「でもね、上条当麻。それを抜きにしても、今は君を殺さないといけないんだ。君が、お兄さんの関係者に接触して、尚且つ、ガイアメモリを知っている。それは僕にとつては、十分殺すに値する理由なんだよ。死ぬ前に、せめて理由ぐらひは話しておこう」

「待てよ……。俺は、少なくともあの女の子には関係無いって言ってるだろう」

彼女の言っているお兄さんなる人物の目星も上条当麻にはない。

だが、あの御坂妹の顔をした人物は本当に上条当麻を始末する気なのは分かった。

経験している修羅場の直感が告げる。あいつは、本気なのだ。

起き上がった上条当麻が、呻きながら説得を続ける。

「お前が何を言っているか、特に俺を殺そうという部分がさっぱり理解できない。俺がガイアメモリを知っているのは……詳しくは言えないけど、情報通の知り合いがいるんだ。ソイツから聞いたんだよ」

「じゃあそいつが僕の敵だよ。死ぬのが君からそいつになるだけさ。ガイアメモリの情報は本来、名称も含めて一部しか知らない。なのに君は聞いたと言う。君が嘘を言わない前提で進めると、僕はガイアメモリについて詳細を知る人間を殺すと決めているんだね。僕やお兄さん、その関係者を君も見た通りああいう手合いが襲いかかってしまうのを、自衛の意味合いを含めて防ぎたい。訳ありって言えば君もわかってくれるかい？」

実際見ていると思うけど、と説明した上でもう一度問う。

「上条当麻。僕の私怨は滅茶苦茶だ。だから、それは今回ぐつと我慢して聞くよ。君の行いを否定したい訳じゃないし、客観的に見れば君の言動は所謂善人。僕が難癖つけているだけだから、この際置いておく。でも、そのガイアメモリの事を知っていると云う人物は確実に、僕の始末しないとならない相手なんだ。教えてくれないか、上条当麻。君の善の感情があると思つて聞くよ。そいつは、誰かな」

「教えるわけないだろう。俺の、友達を殺すつて言つている相手にむぎむぎ言うと思ふか」

ちゃんと理由を教えているのに、上条当麻は構えた。

拳を握つて、怒りを見せて。

「今の話を聞く限りお前の立場からすれば、多分そうしないとならないとは思ふ。だけど、俺はそんなの認めない。だったら俺にも協力させればいい。殺すとかそんなんじゃないや、俺だつて幾らでも手伝うつもりでいる」

「僕は君に救いを求めてもいないし、手を貸せとも言つてない。君の余計なお節介は不必要だ」

またか。また、相手の事情を聞いているのに勝手に首を突つ込む。

そんなもの、彼女は必要ない。理解など要らない。欲しいのは情報。

ただ、それだけなのにこいつは別のことにすり替える。

「相手の言葉を聞く気があるのか、上条当麻。僕は、情報を寄越せと言っているんだが？」

「なら、こう返答するまでだ。教えない。絶対にだ」

「……交渉決裂か」

ダメだ。話を通じない。

此方の言い分に真っ向から上条当麻は否定する。

代わりの方法で妥協しろと提案してくる。

「気に入らない。僕の神経を逆撫でするやり方ばかり。僕はやはり上条当麻のその言動が腹が立って仕方ない」

「お前が俺をどう思っても俺は別に構わない。けど、友達を殺すって言うなら、普通に考えれば立ち向かうだろ」

「その友達とやらが健全な相手ならね」

彼女は鼻で笑った。

バカを見る目で、上条当麻を見つめて嘲笑する。

「上条当麻。君が守ろうとしているのは、後ろめたい事をしている人間なんだぞ。君は見境なく他人のために戦うとは聞いていたが、存外自分勝手なんだな。バカか君は。善人である君が何故そういう人間を庇う。真っ先に矯正するべき相手が後ろにいるのに、

僕に構えてどうするんだ？」

「笑いたきや笑えよ。それでも俺は、自分の友人をみすみす死なせたりしない。ソイツがどんな奴でもな」

「ハッ。大した友情だ。美しい、あまりの優しさに感動してしまふよ。然し……何処までも下らない。君の言い分に付き合っていると、僕にとっては不利益しかなさそうだ。良いから吐け、じゃないと君も死ぬぞ上条当麻」

彼はあくまで、自分が手伝い以外は認めない。

強引に進めたいなら、死なない程度にぶちのめすしかないか。

「戦わない方法はないのか？ お前なら、言葉で和解できると言うんだけど」

「自分から僕を挑発しておいて、どの口が言うのさ。避けてもいいよ、じゃあ吐け今直ぐに」

「お前が殺すのを止めると誓えば手伝うぞ」

「無限ループって空しくない？」

……戦いは徹底して避けようとする。

無闇に争いに発展させないのは悪くないが、然し鬱陶しい。

問答を繰り返し、埒があかないと彼女は下す。

「分かった。そこまで言うなら、僕に勝て上条当麻。勝ったほうが言うことを聞く。詰

まり、僕は君を殺さない。僕に勝てたら、君の言う通りにしよう。それでいいか」
勝ったものが言うことを聞く。シンプルにしていこう。

結局は戦争から、喧嘩に下がっただけで争いには違いなく。

「このまま死闘になるよりは良いよ。それよか、言い出したんだから約束を守れよ御坂妹」

「分かっているよ。あと、僕は御坂妹という人じゃない。顔を借りている他人だ」

さつき思わず名を乗ったが、もしかして上条当麻は知らないのか。

首を振って、改めて彼女は名乗る。

「僕の名は、藍花悦。レベル5、序列六位の藍花悦だ」

「……レベル5?」

そう、聞いた途端に上条当麻は狼狽した。

思い出すように、指を数えて折り曲げて……六の数字になったとき、彼女、藍花悦を見た。

「……もしかして、あの都市伝説の……空白のレベル5のお方ですか?」

「ご名答。君が戦おうとしているのは、学園都市最高峰の能力者だよ。光栄だろ?」

何故か敬語になった上条当麻、顔面が蒼白になった。

名前を聞いて漸く相手が誰か理解して、血の気が失せていた。

「あの……因みに今回は本気出したりしますか？」

「そうだね。悪いけど、僕は他のレベル5みたいにな、弱いからって手加減もしないし舐めたこともしない。普通に全力を出して君を打ち倒して勝つ」

左手をローブから出した彼女は、上条当麻の知る顔で知らない満面の笑みで告げる。
「行くよ上条当麻。……死なないでね？」

こうして処刑が、始まった……。

藍花悦は加減しない。

いきなり左手を突き出して、大量の蒸気をそこから上条当麻に向かって放った。

高熱の水蒸気だ。真っ白になる視界を上条当麻は避ける前に右手で防ぐ。

ぱあんっ！ と派手に音をあげて、水蒸気は消滅した。

「危なっ!？」

「へえ？ 面白い能力だね。何それ？」

棒立ちして防御した上条当麻の真横。

興味深そうに彼を見る藍花悦がそばにいた。

反応が遅れた上条当麻が咄嗟に右の裏拳を放つも、

「鈍いよ」

屈んで回避、頭突きで反撃。

脇腹に頭から突っ込む。上条当麻の無防備な横っ腹に、叩き込まれる。

歴戦の上条当麻も、横っ腹に頭突きという割りとしスターに近い戦法には対応が鈍る。

体勢を崩しつつ後退、然し藍花悦も追撃する。

「もう一回消して見せてよ」

左手から放電、電撃が下がる上条当麻を襲う。

青白いそれらを回避ができないと右手でまた防ぐ。

一ヶ所でも触れると電撃その物が霧散した。

（成る程。上条当麻の右手は盾なんだ。ああ、でも接触した能力の……無力化？ なら、触った時点で僕は確実に死ぬな。全部の能力をキャンセルされたら僕は一貫の終わりと見ていいか）

あの右手はどうも能力をキャンセルする能力を持っているらしい。

よく似ているのを藍花悦も知っている。

上条当麻は素手。徒手空拳で戦うと思われる。

案の定予想通りに白兵戦を仕掛けるが、接近される間に下がる。

「クソッ！」

上条当麻も焦っているようだ。

随分速く対応されている。

接近されないように能力による弾幕を張って足止めして、その悉く回避できない広範囲の大火力で攻めてきては、防御をさせる。

高温の水蒸気と電撃、そして何より常人とかけ離れた運動能力が上条当麻に接近を許さない。

自分よりも身体的アドバンテージの高い相手も交戦した事がある。

だが藍花悦は明らかに違う。自分の能力を過信せずに、尚且つ異様に汎用性があつて何をしてくるか分からない。

上条当麻の弱点を見極めて、嫌がらせに近い方法での確に先手を取らせない。

やりにくい。それが、上条当麻の率直な感想だった。

電撃と水蒸気から、今度は火炎を放ってきた。避けきれないのを防ぐ。

「ああ、そう言うことか。分かった分かった」

距離をあけて、藍花悦は何か掴んだのか笑っていた。

ずっと後手で追い回していたが一度も殴ることもできない上条当麻は、持久戦に持ち込まれて息が上がっている。

「上条当麻。君の明確な弱点を僕は見抜いたよ」

余裕綽々の藍花悦。

上条当麻は悔しそうに歯噛みしている。

愉快そうに、藍花悦は上条当麻に言った。

「君の弱点。それは、遠距離による広範囲の物理攻撃。避けきれない場合は君は大抵防御する。でも、運動神経は普通の人みたいだしその右手は、能力に直に触れないと意味がないと見た。詰まりはさ、こんなのは君はどうかできるかな？」

と、腕を広げて聞いてきた。

その背後には、大量の河川敷や川原にある大小様々な石ころが浮かびがっていた。無数のそれこそ、夥しい数のその辺にある路傍の石ころを、藍花悦は武器にする。

「……藍花さん。それ、確実に死にます」

流石に上条当麻も、あの数を一齐に叩き込まれたら絶対に死ぬ。

青ざめてそれは卑怯だろうと言うものの。

「悪いけど、僕は卑怯も佳境も知ったことじゃない。大丈夫、君なら生きてられるよ。あと、こんだけ多いと僕も精密な操作できないから逃げ回ると悪化すると思うんでよろし

く

点ではなく、面による物理的な制圧。

この女、上条当麻が一番どうにもできない物理攻撃を仕掛けてきた。

「冗談ですよね？」

「冗談じゃないよ？」

思わず敬語になった上条当麻、然し無情にも藍花悦は指揮者のように、人差し指を動かした。

「無駄な抵抗は見苦しいよ。諦めて受けてくれたまえ」

一斉に迫り来る、高速の石のつぶてが見えない速度で壁として襲う。

笑顔で死刑を宣告したレベル5。上条当麻はいつそ無謀にも突撃して少しでも、確率に賭けた。

が、用意周到に接近したらまた電撃で足止めされ、迂回した石のつぶてが頭上で旋回して、降り注ぐ。

「うわああああああああ!!」

頭を庇いつつ、容赦なく叩き込まれるそれに備えるが意味もなく。

上条当麻はこの日、初めてレベル5に敗北したのだった……。

人物解説。

上条当麻。

上条当麻の戦力に関して、本作品における解説。

上条当麻には弱点があるが、物理的な攻撃に弱いのは言うまでもない。

幻想殺しの無力化範囲は従来通りだが、相手が藍花悦の場合は状況が一変する。

一方通行のように油断大敵でもない限り、そもそも番狂わせは発生しない。上条当麻も負けるときは負けてしまう。

多才能力のような汎用性が高すぎるため、手段を変更すれば一方的な蹂躪すら可能になる。

触れれば上条当麻のKOなのだが、如何せん白兵戦にならない場合や回避できない広範囲の物理的な攻撃は彼も対応不可能。

瓦礫を使った面攻撃、単純な建造物の破壊、袋叩きなどをすれば彼の攻略は可能。

但し、現状藍花悦を一撃で殺せるのもまた、上条当麻だけなのである。

解説終了。

これからの方針

石のつぶてが上空から降り注ぎ、上条当麻は呑み込まれた。

土煙が舞い上がり、藍花悦は動きを待つ。

随分と奇妙な能力を保持しているようだし、正しく天敵と言えるような無力化の存在は脅威だ。

正しい判断を妥当にしたつもりだが、通じたか試してみた。

暫くして、土煙が晴れる頃、石に埋もれた上条当麻が気絶してる状態で見えた。

目立った外傷は無さそう。薄汚れてはいるが、四肢も繋がったままだった。

（生きてる。怪我也……あんまりしてないみたいだな。あの弾幕食らったのに。こいつ本当に人間か？）

ピクピク痙攣しているので死んではいけない。

だが、気絶しているのでは話を聞き出せない。

無抵抗の人間を襲うとなれば、流石にあの人が黙ってはいない。

一応でも、こういう形での活動は黙認してもらってるだけで許されているわけでもない。

これ以上は過剰な攻撃になる。仕方無く、戻ることにした。

あの人に報告しておこう。上条当麻の友人にガイアメモリを知る人間がいる、と。再びフードを被って変質者に戻り、帰路につく。

上条当麻も一時間もしないうちに回復して、嵐のようなレベル5の攻撃に大ケガしなかった幸運を噛み締めつつ、帰った。

因みに大きな怪我もなくレベル5から逃げ切れるレベル0は、多分こいつだけだ。

激戦を経て、直感的に防御と回避を組み合わせる最適解を出せる才能が上条当麻にはあるが、それを藍花悦が知るよしもない……。

裏側では上条当麻が酷い目に遭っていた。

そんなことは全く知らない鍊太郎たちは、数日大人しくしていた。

モーリッツや雫も連日宿泊しており、姉妹が受け入れなし崩しに暮らしている。

「わ、わたしは無傷なんだけど……」

「月川も同じスキルアウトでしょうに。個人行動をして、本当に無事である保証はありませんよ」

おずおずとご厄介になるのは気が引ける雫は柳に言うが、却下される。

そもそも野郎たちは、どうもガイアメモリを持っていないと知られているのか狙われない。

主に女子たちが、腕つぶしも弱いしメンタルも弱いと言う事で狙いが定まっていると柳は分析する。

「毒島さんや鈴木、上原は何も起きていないそうです。ガイアメモリ、持っていないので価値がないんでしょう」

一応何かあれば直ぐに近場の風紀委員に言えとスキルアウトの立場では抱えきれない問題は権力で庇うと、物理でダメなら組織力と、柳が頑張って話を通して警備員にも助力を漕ぎ着けた。

そんな風到手探りで妹が頑張っているのに姉と来たら。

「はあ……はあ……もーちゃん、抵抗はしても無駄！ さあ、お姉ちゃんとお風呂に入るんだよ!!」

「みぎやああああー……!!」

モーリッツが追い込まれていた。

自制しない杠が、毎日世話を焼いているのはいい。

柳が外回り、杠内回りなのもいい。

ただモーリッツにセクハラするのは止めない。

今日もお風呂と一緒に連れ込むと躍起になって部屋の隅っこに小動物を追い込んでいた。

「触るな！ 近寄るなロリコン!! モーリッツはまだ綺麗な身体でいるのよ!!」

「お姉ちゃんが汚いとしても言うの!?! 失礼だよ！ これでも弟君以外に予定は」

「杠、黙れ。ゴキブリ突き刺すぞ」

「弟君、それはいけない」

下ネタを言う前に阻止する。一室しか無いんだから騒ぐなど頭痛を覚える鍊太郎がぼやく。

コックローチを使うと脅すと柳まで反応するので言いたくない。

「お兄ちゃん、ゴキブリ使ったらニワトリ頭の殺虫剤をぶちこみますよ!?!」

「緊張しそうな殺虫剤を構えるんじゃない。やらねえよ」

キッチンで夕飯の支度をする柳に、体調が回復傾向の鍊太郎はベッドから起き上がっ

て言う。

真面目に殺虫剤を構えていた涙目の柳は本当にゴキブリが嫌いなのである。

「お、落ち着いて杠さん……。リッツが嫌がって……」

雫も緩衝材になるが、それで止まる杠ではない。

鼻息荒く、怯えるモーリッツに手を伸ばしていた。

「その柔らかな肢体がお姉ちゃんを魅了するんだよ……。触りたい、嗅ぎたい……」

「みぎやああああああ！　頭の中まで変態ワードで埋め尽くされているよこの変態!？」

言葉と思考が完全一致ってあんた最悪だ！　死ね!!　今すぐ死ね!!」

モーリッツはパニックになって、バタバタ暴れて抵抗するが、体格は杠のほうに部が

ある。

結局毎回、ぬいぐるみ宜しく回収されて抵抗むなしく……。

「みやああああああああ!!」

という悲しい悲鳴が風呂場から聞こえてくる。連れ込まれて可愛がりを受けていく始末。

お風呂上がりには、寝巻きに着替えた杠と抱き締められ白目を剥いて口から泡をふく

ぐったりとしているぬいぐるみ。

姉は良いがモーリッツのストレスがマツハでヤバイ。

いい加減、自宅療養も飽きてきた。体調も良くなってきたし、本格的に対処を考える。夕飯を囲みながら、日課になってきていた五人での食事を始める。

今日は柳のカレーだった。

「モーリッツ的にはやっぱ相手をぶちのめす対処療法しかないと思うよ。どうせ追跡できないと思うし、警備員より厄介な事になりかねない。自衛していくのが今の方法かな。一応、モーリッツには根本的な解決法は無いことはないけど危ない橋を渡るから信用できない相手には頼みたくないんだよなあ……」

警備員の技術でも勝てない闇は何処にでもあり、外で言う極道みたいなもんだとモーリッツは言った。

俗に言うマフィアに狙われたと分かりやすく例える。カレーを食べながら。

「モーリッツはどうにか出来るのですか?」

柳が怪訝そうに聞く。風紀委員としては聞き捨てならない。

渋い顔の彼女に、真横から身体を触ろうと黙って手を伸ばす杠の手を錬太郎が叩き落とすのを見ながら答える。

「モーリッツは別に、悪い連中とは極力つるんではないよ。ただ、知り合いにね……胡散臭いって言うか、キナ臭いことしている女子高生いるんだよ。思考を聞いて、マジっぽ

いんだ。まあ、適当に盗み聞きした程度だから、ホントかは分かんないし、向こうはモーリッツのことそこそこ信じているみたいだけど、モーリッツは全然信用しない一方的な関係だけでも。頼めば、やってはくれると思う。多分」

また、お得意のインスタントな交遊関係。

そういう裏家業みたいなものを生業にしていそうな怪しい奴がいて、結構友達思いと思われるので利用できそうとは言う。

「リッツ、それ仕返しされない……？」

雫の懸念通り、バレたらもつと現状が悪化する。

杠も同感とは言うが。

「でもさ、現状モーリッツたちじゃどん詰まりじゃん。利用できるものは利用しないと、死ぬの先輩だよ？ モーリッツたちも今回みたいに邪魔だからお掃除、なんて扱われたらたまったもんじゃないっての。風紀委員にだって限界あるし、警備員だってマフィアに勝てないよ。リスク抱えるなら、イーブンだよ。味方のリスクのほうがマシだと思うね」

「ああ、それは同感だわな。杠も柳も助けてくれるけど、相手が悪すぎるわ。出来るなら、博打で良いから攻勢に出たいぜ」

鍊太郎もあんなのはゴメンと、賛同する。

現状一般生徒もスキルアウトも敵だと言うのに殺し屋まで来ていたら心労で死ぬ。しかも、捕まえても意味がない。進まない。

ならば、僅かでも良いからどうかしないと袋のネズミと鍊太郎は腕組みして唸る。

「お兄ちゃん、ですが……」

「分かっている。他に手立てがあるならそつち優先する。これは最後の手段にしておきたい」

迂闊な自滅は防ぐ意味で、ジョーカーのようにしておこうと留めておく。

それよりも、今はもつと身を守る手段が欲しい。

「……ガイアメモリに慣れるしかないのかな」

副作用を知らない姉妹には秘密にしているので、雫も余計なこととは言わない。

でも、自衛するならガイアメモリによる応戦が確実に妥当とも思う。

「戦えるの？ またドーパントになったら、追い込まれちゃうよ？」

心配そうに杠が言うが、ドーパントに変異されて困るのは先ず、鍊太郎が内容を理解していないこと。

分からないまま、ばら蒔くから後手になるのだ。

「作ったら弟君は効果を試さないとダメじゃないかな。そこが問題だと思う」

杠にしては珍しく的を射た発言。

その通りだと素直に非を認めつつも言い返す。

「じゃあ杠も協力してくれよ？ 先ずはゴキ……」

「ことある事にお姉ちゃんに黒い油虫を突き刺そうとするの止めてね。お姉ちゃん悲しくて泣いちゃうよ」

わざとらしい嘘泣きの真似をする杠。

ウザいので切り捨てる鍊太郎。

「勝手に泣いてろ三重の拗らせた変態」

「弟君が反抗期だよなーちゃん……」

「お姉ちゃんがモーリッツを弄ぶからでしょうが」

妹から見捨てられていた。マジで姉は落ち込んでいた。

「あはは……」

苦笑いの雫は追求しないでおいた。

閑話休題。ガイアメモリの把握、及び三人の基礎的な実戦の経験不足。

それが、最も課題になるべき問題だと皆は話し合った。

「詰まりは、トレーニングすりゃあいいわけじゃん？ ドーパント並みに強い人と」

モーリッツが食べ終えて、膝の上に誘拐しようとする杠から逃れて雫の膝の上に避難して言った。

戦いに慣れるために、身を守る特訓をする。鍊太郎は自分の力を把握する。

何となく、解決策が見えてくる。乗り気じゃない雫も、目的は今忘れろと杠は言う。「いいんだよ。どんなことであれ、皆が無事なら。流儀はそれぞれで好きに決めるべき。別に此方から襲いかかる訳じゃないし、前提が抗戦だから。抗うことに怖がらなくていいの、月川さん。いざとなればお姉ちゃんもドーパントになれるし、一緒に戦う」

個人的な考えは縛らない。思うようにして、互いに助け合えば。

雫はそう言う杠に意外そうな顔をする。モリーツツはそれどころじゃない。

あのロリコン、今自分でドーパントになれるとか言った。

どう言うことか鍊太郎に聞いたですと。

「あー……学園都市に入る前な。まだ、ガイアメモリの事をわかってないころに一回、俺達ドーパントになってるんだよ。実家で。だから、杠も柳も能力者になる前だっけ？」と、初耳の事を言っていた。

因みに副作用は出ていないので、恐らく健全なメンタルをしているのだろう。

羨ましい限りであると二人は思った。

「そうですね。中学の時期でしたよ。そう言えば、今のあたしの能力とあの時のガイアメモリって、似たようなもんだった気がしますが気のせいでしょうか？」

「んー？ その辺はよくわかんない。って言うかお姉ちゃんそもそも何になっただっけ？」

ドーパントになれるのは覚えているけどなに使ったかは忘れちゃった」
姉妹は何を使ったかはあまり覚えてないそうだ。

覚えているのは錬太郎が悪夢のゴキブリとなって姉妹に殺虫剤を受けて死んだことぐらい。

「お兄ちゃんがブタになったときはゴキブリになったときぐらいのショックでした」

「ペットガイアメモリのことか？ あれそう言うもんみたいだから無茶言うなよ」

数少ない作用のわかる安全なガイアメモリなのだ。

責められても困るとじとつとした目で見てくる柳に肩を竦める錬太郎。

「二人ともドーパントになってたんだ……」

「道理でドーパントに偏見ないわけだ。経験あつたなら早く言つてよね」

驚きの雫がドーパントの先輩だったとはじめて知る。

モリーツツもだつたら最悪ドーパントになって相手してくれと言うのでそれは機会があれば。

今は、ともあれ戦いの心構えを作るために、特訓の準備をしようと言う結論になった。

そして、後日……。

「あぁーっ!! 常盤台のミコチュー!!」

「ぶはっ……。あの人、この前のミコチューさんだよ、大山君……」

「ぶつくく……止めろ月川、あいつが面白電気ネズミにしか見えなくなる……」

「出会って早々人を指差してミコチュー言うなっ!! その二人は笑い堪えるな!」

杠が、最高の特訓の相手をお願いしたと言ったが、まさかの常盤台のミコチュー参上。御坂美琴という、話も通じるし理解もするし協力もしてくれる、確かに最高の特訓の相手だった。

ガイアメモリ解説。

アイスエイジガイアメモリ。

詳細不明。

フレイムガイアメモリ。

詳細不明。

UFOガイアメモリ。

詳細不明。
解説終了。

藍花悦の詫び方

藍花悦は叱られた。

どうにも、あの人の言い付けを破ってしまったようだった。

あの人は言う。

ガイアメモリの事を過剰に気にする気持ちはわかるが落ち着け。

上条当麻は、ただの渦中の存在であり彼女には無関係。

気に入らなくても、敵対はしてはいけない。

上条当麻は事情が違う。彼の周囲は混沌の坩堝。

複数の思惑が錯綜する危険地帯。近寄れば違うことに巻き添えを受ける。

故に、穏便にしろ。争ってはいけない。

彼に敵対するのは、学園都市の外にいる何かとの敵対であり。

同時に、学園都市のレベル5の数名の逆鱗に触れるので今後は一切禁ずる。

尚、心配していた情報は上条当麻の知り合いが彼からガイアメモリを購入しただけ。

その際に調べた程度。心配するなどのこと。

と言うか、深入りも禁止された。折角闇から抜け出したのに逆戻りする気かと。

彼と自分のためにどうにかする前向きさは良いけれど、もう少し頼ることを覚える。

最低でも、魔の手が伸びるような事態は発展しない。させない。

故に、線引きをちゃんと出来るようになれ。そんな風に叱られてしまう。

「はっはっはっ!! あいつが叱るなんて珍しいな。お前、根性入れすぎて空回りしたな

？」

「わ、笑い事じゃないよ軍さん……」

世話になってるもう一人の恩人は豪快に笑った。

ちよつと頑張り過ぎて、河川敷で決闘してきたと正直に白状すると、根性あるとか逆

に褒められた。

なんかやっぱりこの人もずれている。

恩人の自宅である高級マンションで、共に夕飯を食べている藍花悦。

今晩は豚カツが食べたいと言うので頑張ってみた。失敗したが。

焦げた豚カツを気にせずガツガツ食べる恩人は、白米をお代わりしながら言うのだ。

「まあ、決闘して勝ったのはいいが、よく考えると結局お前が難癖つけちゃったと。じゃあ、そこは素直に頭下げてこねーと筋が通らねえよな？」

「……そうだね」

「わかってるならいい。ちゃんと詫び入れてこいよ。俺は根性の曲がったことは許さねえぞ」

間違えたら素直に謝れ。それが恩人の教え。

余計なことは考えるな。本質を見ろ。

相手に詫びを入れる。当然のことで、迷惑をかけたら謝るのが筋を通すこと。

厳しいものだ。確かに自分の過ちだが、一番嫌いな相手に謝るとは。

が、恩人にはそんな屁理屈通らない。甘えを言うなと次は拳骨を貰う。

彼の拳骨はとんでもなく痛い。一度もらったがその時は、アスファルトを陥没させて顔が沈んだ。

加減し間違えたらしいが、普通なら確実に死ぬのでそこは指摘しておいた。

兎に角、上条当麻にもう一度顔を出さないといけない。二名にそう言われ、反省した藍花悦は翌日の夕刻、再び向かう……。

放課後の時刻、上条当麻は再び戦慄する。

正門にまた来ていた。ローブの不審者。しかも今回は運悪くお求めの友人が近くにいた。

「やあ、上条当麻。待っていたよ」

目敏く発見されて、直ぐに声をかけてきた。

ちっこい不審者に、だがもう一人の友人が興奮して話しかける。

こいつは仕方無い。ピアスの変態なので。

「なんや!? このロリータな声は!？」

途端、ぞわつと彼女のローブが全身波打った。

身の危険を感じたのか、迫り来る青い髪の毛のピアス野郎に牽制して警告した。

「な、なんだお前……!?!? ロリコンの波動を感じるんだけど……!？」

怯えていると分かって更に興奮のピアス野郎。

鼻息荒く迫ろうとするのを、上条当麻は横から止める。

「止めろそこ。彼女は俺に用事があるんだ。お前ら先に帰っててくれ」

と、然り気無く友人たちを逃がそうとする。

上条当麻に、すると彼女は言い出した。

「ああ、安心してくれ上条当麻。もうその一件はいい。寧ろお詫びに来た。それだけの話なんで、身構えないで」

肩透かしのように、彼女の纏う雰囲気は至って平穩だった。……だった？

「おおう、可愛い！ 声が可愛い！ ミステリアスな幼女の予感！ さあ、顔を見せてえ!!」

「その前にこの変態をどうにかしていいかな!? 良いよね!?!」

否、ピアス野郎に尻込みして逃げようとしていた。

小動物のように威嚇している。上条当麻は仕方無く動く。

「いい加減にしろ!」

鍛えた一撃で迫る変態の後頭部に叩き込む。

こいつの場合、興奮しているときは言っても無意味なので殴る。

良い音がして、顔面から地面に倒れた。

「な、なんだこいつ……?」

「ゴメン、俺の知り合い。単なる変態だから、気にすんな」

「気にする部分しかないけど!?!」

鼻血を出して起き上がり、まだ狙うのかピアス野郎はげへげへ笑う。

「まだや……俺は沈まん。そのお顔を見るまでは……!」

怖がる彼女に執拗に触ろうとする。というか、ローブを剥がそうとする。

「お前は女性に脱げと言うのかこの変態がっ!!」

遂に怒った彼女は左手を出して、手のひらを向ける。

怒鳴り声をあげて、電撃をピアス野郎に容赦なく叩き込んだ。

放電がピアス野郎を貫く。派手に奏でた爆音。

「んぎゃあああああ!!」

何処か快感のように悲鳴をあげ、真っ黒に焦げるピアス。

バタツと倒れて、ぷすぷすと黒煙をあげ漸く沈黙させた。

「上条当麻、君の友人は頭がおかしいのしか居ないのかい……う?」

「いや、こいつは例外。極めつけの変態だから……」

取り敢えず、肝心のもう一人は黙って眺めていたが、往来で派手にやったので教師が来そうな空気になった。

「そこのお嬢さん。先生が来たら困るんじゃないのか? 早めの退散をオススメするぜ

」よ

金髪のグラサンが何かに気付いて、彼女も違和感を肌で感じた。

踵を返して、上条当麻を呼びつけて歩き出す。ピアスは放置していく。

戻る際に、グラサンに向かって告げた。

「……成る程。君だったのか。例の友人とやらは。なにか知っているようだけど、不干渉をお願いできない?」

「分かってはいるよ。どうも、そちらもキナ臭い感じがするしな。不利益にならない程度にしとこうかね」

「お氣遣い、ありがとう」

「礼には及ばんさ。下手なこととして、互いに首がすつ飛ぶのは避けたいしにや?」
ふざけているようにも見えるが、グラサンの奥の目は笑っていない。

空気を読んで、グラサンは少し離れた場所で別れた。

「六位に宜しく言っておいてくれ。そんじやな、誰かさん?」

「……………ああ」

去り際、小声で皮肉っぽく言ってから彼は足早に去っていった。

やはり知っていたか。彼女……藍花悦は舌打ちする。

「食えない野郎だ」

「そう言うなよ。お前が知りたがっていた、俺にガイアメモリの事を教えたのはアイツなんだ。納得したか?」

「ああ。殺せば蕨蛇だつて僕にもわかつたさ。もういい」
その背中を見送る上条当麻と藍花悦。

敵意が無いのは分かつていたので上条当麻も素直に教えた。

どこか彼のことも嫌そうに見ている藍花悦は、隣の上条当麻に聞く。

「さて。上条当麻。取り敢えず一発ぶちこんでいいよね?」

「はいいつ!」

敵意はないのに突発的に藍花悦は左手を向ける。

いきなり放電してきた。慌てて上条当麻は右手で防ぐ。

甲高く聞き慣れた音をさせて弾かれて電撃は霧散した。

「藍花さん!? いきなり何すんですか!」

一応レベル5。変人には違いな思っていた上条当麻。

変な行動には警戒していたが、彼女のように攻撃してくるとは。

言っておいたが殺意の薄い攻撃はやめてほしい。

「やっぱり見間違いないか……。君の右手、どうなってるのさ? 能力を強制キヤ

ンセルする能力なんか早々知らないけど、僕も」

不意打ちで、先の上条当麻の能力が勘違いでないとそれを見て、確信した。

白煙をあげる右手を見つめて謝罪する藍花悦。

「前に難癖つけたことは謝罪したい。けど、納得できないな。君の右手は理不尽すぎる。もう、君と敵対はしないけど戦った身として教えてくれないかな上条当麻。君って、もしかして僕より強いでしょ？」

謝罪しに来たのだが、同時に知りたいたいと藍花悦は語った。

自分も相当おかしいが、上条当麻はそれ以上におかしい人間。

上条当麻に一切の被害は出さない。お詫びもする。

だから教える右手のこと。と、あんまり反省していない藍花悦は上条当麻に問う。

「御坂みたいなこと言わないで!! それって納得できるまではずっとついてくるフラグだよね!!」

この展開、知ってる。上条当麻は覚えがある。

御坂と同じ自分が受け入れるまで何度でも追い回したりするパターンだった。

同じ顔ならやり口も同じだった……と思うが甘い。

「じゃあ納得させてよ上条当麻。あと、僕に右手で触れないでね。触れたら警備員に無理矢理触られたって泣きながら駆け込むから」

「レベル5のやり口じゃねえよ!! 社会的に上条さん追い詰めるとか陰険すぎませんか

藍花さん!!」

自分の幼い外見を巧みに使って上条当麻を社会的に抹殺する、ロリコンの性犯罪者に

仕立てようとしていた。

冤罪であるがこう言うのは学園都市でも男が不利なのである。

「き、君が無理矢理……僕のことをオモチャにしようとして……」

「止めてエ!! 俺で遊ぶの本当に止めて! 知り合いの顔でやられると要らぬ誤解が生まれるから!」

面白がっている藍花悦に、上条当麻は絶叫する。

何しに来たんだこの女。帰り道、新たな女難に彼は綺麗な夕日に今日も叫ぶ。

「不幸だああああああ!!」

結局自宅までついてきた。

ああだこうだと帰そうとしたが、帰らないまま。

同居人に言い訳を探すのに気苦労の上条当麻は胃痛を覚える。

だが、幸いなことにお詫びと称して夕飯の食費を藍花悦が支払ってくれた。

……この量は聞いてない。

「業務用スーパーって安いよね。これぐらいあれば足りるかな?」

「待って!! 上条さんの家にある冷蔵庫にはこんなに入らないよ!」

ふわふわ浮いている大量のビニール袋。藍花悦が能力で持ち運んでいるようだ。

明らか過剰に保存食を購入していた。

あの暴食シスターでも一ヶ月は食い繋げる物量に上条当麻はもういいと言うのに。

「じゃあ新しい冷蔵庫も一緒に買おうか。安い中古でも良いなら僕が出すよ」

「お詫びの範囲越えてる! これ以上は上条さんが戸惑うのですが!!」

最早お詫びじゃない。奉仕だ。

高校生が子供にあれこれ買われている。

店内での視線が痛いので困惑と食費が浮くのでそこは素直に嬉しい悲鳴をあげている。

「上条当麻。君は自分の命を安く見すぎだ。仮にも僕は君を殺そうとしてしまったんだぞ。こんなことで許されるほど、君は安くないだろうけど……申し訳ない。こんな方法でしか、僕は思い付かなくて」

「いや、いいんだけどさ……。今まで、なんていうか……謝りに来たのはあんた一人だし。俺も気にしない。これ以上、贖罪はしないでいいんだ藍花」

本当に彼女が反省しているのは上条当麻とて分かっている。

故にもう謝罪は要らないのだが。

「僕が気にするんだ。経験不足だからかな、やり方がまるで分からない。君が善人だから許しているんだろうと思うと、何故かムカつく」

「んな理不尽な……」

「僕は君が嫌いだ。けど、嫌いでも筋は通すし、自分で許せるなら切り上げよう」
律儀な少女だ。

不器用なりに懸命に行動を起こそうとしている。

上条当麻はぶつくさ言いながら次に向かう、藍花悦の言い分溜め息をついた。

「そうかよ。じゃ、遠慮なく満足するまでやってくれ。俺はもらっている方だから、有り難く頂戴する」

「そうしてくれ。じゃないと、僕は何が正解なのか分からないんだ」

物で返そうとするのは間違いかもしれない。

でも、その気持ちは本物だし既に上条当麻は許した。

ならば、後は藍花悦が気が済むまで受け取ろう。

彼女が自分を許せるまで上条当麻は、お人好しにも付き合うことにした。

……が。帰宅したとき、問題は発生する。

「とーうーまー……またわたしの知らないところで女の子と知り合って仲良くしてたん

だね……?」

(けど……この人、なんか変。気持ち悪い感じがする……どうして?)

「上条当麻。シスターと同居とはやるな。で、手を出したのか? 明らかに浮気を咎める恋人の様なだけど?」

「冷静に説明しないで藍花も説得手伝ってください! 因みに誤解ですので悪しからず!」

「大体あなたはとうまの何なの?! いきなり押し掛けてきて!!」

「僕か? 僕は……上条当麻と河川敷で決闘をした間柄だ。元々は相容れぬ存在だったが、今回は謝罪に来た」

「何を素直にそのまま白状してやがりますか藍花さん!」

「事実だろくに」

「そーだけど!!」

「決闘……? なんで?」

「理由はシンプルだ。僕が難癖つけたことよって戦いに発展し、争った」

「……ああ、少年漫画みたいな感じだね! じゃあとうまのライバルなんだ?」

「ライバルじゃない。ただの敵だ」

「それをライバルと言うんだよ!」

(……そう言えば軍さんも毎度そんな感じな漫画読んでるな。あんな感じか?)

「……済まない。よく分からない」

「インデックスさんは何を勘違いしていますか!？」

「言ってることは事実だろ？」

「違うないけども！ 展開がおかしくないか!？」

「でも僕は上条当麻が今でも嫌いだ」

「嫌いって言われるとちよつとやだけど、今回は許してあげる。良かったねとうま」

「……何時もみたいに襲いかかってこない……だど!？」

今回は上条当麻は嘯まれずに済んだ。理由は不明のまま。

藍花悦は取り敢えず、この同居人のシスターにもお詫びの夕飯も作っていくことにする。

人物解説。

インデックス。

とある魔術の禁書目録のヒロイン。

出番が少ないとかたくさんいるヒロインにフラグを立てまくる上条当麻に苦勞する元祖ヒロイン。

藍花悦がフラグが立ってないことに安堵して上条当麻と戦いを経てライバルになったと勘違いした。

実は色々凄いらしいが、魔術の出番がない本作品ではただの上条当麻の家にいる日常の象徴。

藍花悦が聞く限り、上条当麻に数少ない女の子として意識されている模様。

但し上条当麻に最もセクハラ紛いの事故にも巻き込まれている。本人はどうも、恥ずかしいらしい。

尚、藍花悦のことをのちに語っている。

……魔術には関係無いようだが、どう見ても普通の人間じゃない
得体の知れない、自分ですら上手く説明できないなにかに見える。

絶対に、幻想殺しで触れてはいけない。藍花悦は、右手で触れたら。

——死んでしまうと思う、と。

解説終了。